慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本人学生との交流に対する動機づけに影響を与える中国人留学生の心理的要因の特定
Sub Title	Identification of psychological factors that affect motivation of Chinese students to interact with Japanese students
Author	申, 起百(Shin, Kibaek) 当麻, 哲哉(Tōma, Tetsuya)
Publisher	慶應義塾大学大学院システムデザイン・ マネジメント研究科
Publication year	2019
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2019年度システムデザイン・ マネジメント学 第373号
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40002001-00002019-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

修士論文　　2019 年度

日本人学生との交流に対する動機づけに影響を与える中国人留学生の心理的要因の特定

申　起百
（学籍番号：81833346）

指導教員　教授　当麻　哲哉

2020 年 3 月

慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科
システムデザイン・マネジメント専攻

論　　文　　要　　旨

学籍番号	81833346	氏　名	申 起百

論 文 題 目：

日本人学生との交流に対する動機づけに影響を与える中国人留学生の心理的要因の特定

（内容の要旨）

現在、日本政府による「留学生 30 万人計画」の目標が達成されている中、留学生支援が追い付いていないのが現状である。留学生問題においてホスト国の学生との対人関係形成は重要な要素であり、先行研究より留学生と日本人学生との交流への影響要因は研究されているものの、日本人学生との交流に対する留学生の動機づけに着目した研究はなかった。中国人留学生に限定した理由は文化の価値観やニーズによって対人関係が変化することから対象者を限定する必要があり、在日留学生の中でも平成 29 年 5 月 1 日時点で在日留学生の 4 割を示していた中国人留学生に限定した。

そのため、本研究では、中国人留学生の日本人学生との交流への動機づけに関連する要因の特定を行い、それに対する提案を行う。

本研究では、まず、提案への仮説を得るために予備調査を 2 回行った。一つ目は留学生支援のアプローチの中一つである教育的アプローチにおいて取り上げられる接触仮説に対する予備実験、二つ目は日本語教育に対する予備実験を行った。

そして、5 名の中国人留学生（2 名大学院生、3 名学部生）に半構造化形式でインタビュー調査を行い、中国人留学生の日本人学生との交流に対する動機づけに影響を与える要因の特定を行った。インタビューから得た逐語記録データをオープンコーディングにより分析し、要因の特定を行った。オープンコーディングの結果に対する妥当性の確認は質的調査専門家 1 名及び中国人留学生 1 名に確認してもらうことに信頼性を確保した。

その結果、「留学生の日本語に対する自信のなさ」、「日本人の留学生に対する興味なし」、「留学生と日本人学生の接触場面の少なさ」、「曖昧な表現に対する解釈の違い」、「学校内の同国人のコミュニティの充実さ」の 5 つの要因の抽出ができた。

その中で「曖昧な表現に対する解釈の違い」に着目し、それに対するワークショップを提案した。主に、Byram(1997)の異文化間能力の中でも文化間の解釈（Interpreting Skills）に着目したが、その理由としては参加者の曖昧な表現に対する解釈を変化させることを目的としているからである。文化間の解釈のために必要な“Comparing them to own culture”を参照し、設計を行った。

提案に対する評価は参加者による事前、事後アンケートの結果の比較、およびインタビュー実施により行った。

同じ場面の動画を日本人バージョンと中国人バージョンで見て、それを同じ場面だと認識しているにも関わらず、それに対する日本人と中国人の違いを明確にわけて考え、日本と中国の曖昧な表現に対する違いを意識するようになったことから、在日中国人留学生に対して、あいまいな表現の違いを再認識させることが有効であることを確認できた。これは両国が持つハイコンテクスト文化が原因だと考えられた。

キーワード（5 語）

中国人留学生、動機づけ、日本人学生との交流、心理的要因、文化比較

SUMMARY OF MASTER'S DISSERTATION

Student Identification Number	81833346	Name	Kibaek Shin

Title

Identification of Psychological Factors that Affect Motivation of Chinese Students to Interact with Japanese Students

Abstract

Currently, while the goals of the Japanese government's "300,000 International Students Plan" have been achieved, supporting activities for international students has not yet caught up. The formation of interpersonal relationships with students in the host country is an important factor in the international student problem, and although factors affecting the exchange between international students and Japanese students have been studied from previous studies, international students' interactions with Japanese students have been studied. However, No study focused on international students' motivation for interaction with Japanese students.

Therefore, in this study, we identified the factors related to the motivation of Chinese students to interact with Japanese students, and made proposals for them. The reason for limiting to Chinese international students is that it is necessary to limit the target population because interpersonal relationships change depending on cultural values and needs, and among foreign students living in Japan as of May 1, 2017, Limited to 40% of Chinese students.

In the beginning, we conducted two preliminary studies to obtain a hypothesis for the proposal. First, we conducted an experiment on the contact hypothesis taken up in the educational approach to support international students, and second, another experiment on Japanese language education.

Interviews were conducted with five Chinese students (two graduate students and three undergraduate students) in a semi-structured format to identify factors affecting the motivation of Chinese students to interact with Japanese students. We analyze the verbatim record data obtained from the interview by open coding and identify the factors. The validity of the results of open coding was ensured by one expert on qualitative research and one Chinese student.

As a result, we were identified Five factors."international students are not confident in Japanese", "Japanese are not interested in international students", "there are few contact scenes between international students and Japanese students", "differences in interpretation of ambiguous expressions", "Enriching the country's community within the university".

Focused on the "differences in interpretation of ambiguous expressions" from among the identified factors, the author proposed a workshop. It was focused mainly on interpreting skills, a cross-cultural ability of Byram (1997), because it aims to change the interpretation of participants' ambiguous expressions. The design was made with reference to "Comparing them to own culture" necessary for interpretation between cultures. The evaluation of the proposal was made by comparing the results of the questionnaire before and after the participants, and conducting interviews. The Japanese and Chinese versions of a video show the same scene. Despite recognizing that it was the same scene, participants were aware of the differences between Japanese and Chinese in terms of the ambiguous expression, thinking clearly about the differences between Japanese and Chinese.

It was confirmed that it is effective to make Chinese students in Japan aware of the differences in ambiguous expressions which come from high-context cultural background of both countries.

Key Word(5 words)

Chinese Students, Motivation, Interact with Japanese Students, Psychological Factors Culture Comparison

目次

第１章　緒論.....1
1.1　本研究の背景.....1
1.2　本研究の目的.....3
1.3　本論文の構成.....3
第２章　研究の背景及び先行研究.....5
2.1　在日留学生の問題に関する先行研究.....5
2.2　在日留学生の日本人学生との交流に関する先行研究.....5
2.2.1　在日留学生と日本人学生との交流の影響要因に関する先行研究.....6
2.2.2　在日留学生と日本人学生の交流の困難に対する提案の先行研究.....6
2.2.3　友人関係形成・維持における動機づけに関する先行研究.....7
2.3　課題導出のための先行研究.....8
2.4　本研究の目的と新規性.....8
第３章　仮説構築のための予備調査.....9
3.1　予備調査における先行研究.....9
3.1.1　接触仮説に関する先行研究.....9
3.1.2　日本語教育に関する先行研究.....9
3.2　予備調査１.....10
3.2.1　予備調査１の概要及び目的.....10
3.2.2　予備調査１の基本情報.....10
3.2.3　予備調査１の方法.....10
3.2.4　予備調査１の実施結果.....11
3.2.5　予備調査１の評価方法.....13
3.2.6　予備調査１の評価結果.....14
3.2.7　予備調査１からの考察や限界.....14
3.3　予備調査２.....14
3.3.1　予備調査２の概要と目的.....14
3.3.2　予備調査２の基本情報.....15
3.3.3　予備調査２の方法.....15
3.3.4　予備調査２の評価尺度.....18
3.3.5　予備調査２の実施結果.....23
3.3.6　予備調査２の評価方法.....26
3.3.7　予備調査２の評価結果.....26

3.3.8　予備調査２からの考察や限界 27
3.4　予備調査からの仮説 27
第 4 章　在日留学生へのインタビュー調査 28
4.1　インタビュー設計 28
4.2　事前アンケートの設計 28
4.2.1　参加者のデモグラフィックに関する項目 28
4.2.2　対人ストレスコーピング尺度 29
4.2.3　対人的自己効力感尺度 30
4.2.4　日本人への信頼感尺度 30
4.2.5　対人ストレス尺度 31
4.2.6　友人関係への不満の原因帰属 32
4.3　留学生へのインタビューの分析方法 32
4.4　留学生へのインタビューの結果 33
4.4.1　インタビュー協力者の概要 33
4.4.2　事前アンケートの結果 35
4.4.3　インタビューの結果 38
4.5　留学生へのインタビューからの全体考察および限界 42
第 5 章　提案の設計 45
5.1　「ワークショップ」のコンセプト 45
5.2　提案内容の設計 46
5.2.1　準備段階 46
5.2.2　ワークショップの流れ 49
5.3　アンケートおよびインタビューの設計内容 50
第 6 章　提案内容の実施結果 53
6.1　評価の目的と方法 53
6.2　予備実験の概要 53
6.2.1　予備実験の基本情報 53
6.2.2　予備実験の参加者情報 53
6.2.3　予備実験の実施結果 54
6.2.4　予備実験のアンケートの結果 57
6.2.5　予備実験のインタビューの結果 62
6.3　予備実験の考察および限界 62
6.4　実験の概要 62
6.4.1　実験の基本情報 62
6.4.2　実験の参加者情報 63

6.4.3　実験の実施結果 63
6.4.4　実験のアンケートの結果 68
6.4.5　実験のインタビューの結果 72
6.5　提案実施からの考察および限界 72
第 7 章　結論と今後の展望 74
7.1　結論 74
7.2　課題と今後の展望 74
謝辞　76
引用文献　77
Appendix　a

図目次

図 1-1　留学生が苦労した内容（日本学生支援機構、2019 より筆者作成）.....3
図 1-2　本論文の構成 4
図 2-1　親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデル（岡田、2008）より筆者作成）.....7
図 2-2　中国人留学生の日本人学生との友人関係構築をめぐる体験モデル（佐々木・張（2012）より筆者作成）.....8
図 3-1　不安軽減・自尊感情・動機づけの循環モデル（元田、2002 より筆者作成）..... 10
図 3-2　日本バージョンのプロトタイプ１の結果（筆者和訳）..... 12
図 3-3　日本バージョンプロトタイプ１の結果（筆者和訳）..... 12
図 3-4　中国バージョンプロトタイプ１の結果（筆者和訳）..... 13
図 3-5　中国バージョンプロトタイプ１の結果（筆者和訳）..... 13
図 3-6　第二言語不安軽減ツールの構造 15
図 3-7　第二言語不安軽減ツールの詳細 16
図 3-8　プロトタイプ 2 の実施順番 17
図 3-9　プロトタイプ２においての第二言語不安の位置づけ（元田（2002）より筆者作成）..... 18
図 3-10　日本語による日常会話文作成の結果..... 24
図 3-11　作成文の母国語への翻訳の結果 24
図 3-12　翻訳した文を日本語に翻訳の結果..... 25
図 3-13　ブレインストーミングの結果..... 25
図 3-14　時系列に書く及びスキル化の結果..... 26
図 4-1　オープンコーディングの手順..... 33
図 5-1　中国バージョン動画のスクリプト..... 47
図 5-2　日本バージョン動画のスクリプト..... 47
図 5-3　中国人バージョンの動画 48
図 5-4　日本人バージョンの動画 48
図 5-5　ワークショップの流れ..... 49
図 6-1　予備実験の様子..... 54
図 6-2　B1 さんの”思い出しワーク”結果 55
図 6-3　B2 さんの”思い出しワーク”結果 55
図 6-4　ブレインストーミング１の結果 56

図 6-5　ブレインストーミング２の結果 56
図 6-6　実験会場の様子 64
図 6-7　実験の様子 65
図 6-8　B3 の”思い出しワーク”の結果 65
図 6-9　B4 の”思い出しワーク”の結果 66
図 6-10　B5 の”思い出しワーク”の結果 66
図 6-11　ブレインストーミング１の結果物 67
図 6-12　ブレインストーミング２の結果物 67

表目次

表 3-1　第二言語不安尺度（教室内・外）の質問項目 19
表 3-2　日本語不安尺度（教室内・外）の質問項目 20
表 3-3　日本語不安尺度（教室内・外）の質問項目（つづき） 21
表 3-4　日本語での自尊感情尺度（教室内・外）の質問項目 22
表 3-5　全体的な自尊感情尺度の質問項目 23
表 3-6　参加者のアンケート結果（平均値） 26
表 4-1　対人ストレスコーピング尺度（加藤、2000） 29
表 4-2　対人的自己効力感尺度 30
表 4-3　日本人への信頼感尺度（譚・今野、2012） 31
表 4-4　対人ストレス尺度（湯、2004） 31
表 4-5　友人関係への不満の原因帰属（小松、2013） 32
表 4-6　インタビュー協力者の属性 34
表 4-7　インタビュー協力者の主観に対する項目 34
表 4-8　参加者のアンケート結果（平均値） 36
表 4-9　インタビュー参加者の対人ストレスコーピング（ポジティブ関係コーピング）結果 37
表 4-10　インタビュー参加者の対人ストレスコーピング（ネガティブ関係コーピング）結果 37
表 4-11　インタビュー参加者の対人ストレスコーピング（解決先送りコーピング）結果 37
表 4-12　インタビュー参加者の対人ストレス結果 38
表 4-13　インタビュー対象者の友人関係への不満の原因帰属（社会的外的要因）結果 38
表 4-14　インタビュー対象者の友人関係への不満の原因帰属（人的内的要因）結果 38
表 4-15　インタビュー対象者の友人関係への不満の原因帰属（人的外的要因）結果 38
表 4-16　オープンコーディングの結果　A1 41
表 4-17　オーピンコーディングの結果　A2 41
表 4-18　オープンコーディングの結果　A3 41
表 4-19　オープンコーディングの結果　A4 42
表 4-20　オープンコーディングの結果　A5 42

表 5-1　実験に使う備品 49
表 5-2　自律的動機づけ尺度（岡田、2005） 51
表 5-3　対人場面における曖昧さへの非寛容尺度（友野・橋本、2005） 52
表 6-1　予備実験参加者の属性 53
表 6-2　予備実験参加者の主観に関する項目 54
表 6-3　予備実験参加者のアンケート結果（平均値） 57
表 6-4　予備実験参加者の自律的動機づけ結果 58
表 6-5　予備実験参加者の自律的動機づけ（同一化調整）結果 58
表 6-6　予備実験参加者の自律的動機づけ（内発的動機づけ）結果 59
表 6-7　予備実験参加者の対人ストレス結果 59
表 6-8　予備実験参加者の対人場面における曖昧さへの非寛容結果 60
表 6-9　予備実験参加者の対人場面における曖昧さへの非寛容結果（初対面における曖昧さへの非寛容） 61
表 6-10　予備実験参加者の対人場面における曖昧さへの非寛容結果 61
表 6-11　実験参加者の属性 63
表 6-12　実験参加者の主観に関する項目 63
表 6-13　実験参加者のアンケート結果（平均値） 68
表 6-14　実験参加者の自律的動機づけ結果 69
表 6-15　実験参加者の対人的自己効力感結果 69
表 6-16　実験参加者の対人的自己効力感（対人的スキルへの自信）結果 70
表 6-17　実験参加者の対人的自己効力感（友人からの信頼）結果 70
表 6-18　実験参加者の対人的自己効力感（友人への信頼）結果 70
表 6-19　実験参加者の対人ストレス結果 71
表 6-20　実験参加者の対人場面における曖昧さへの非寛容（初対面における曖昧さへの非寛容）結果 71
表 6-21　実験参加者の対人場面における曖昧さへの非寛容（半見知りにおける曖昧さへの非寛容）結果 72

第1章　緒論

第 1 章では、在日留学生が抱えている問題を、社会的な背景および留学生支援からの観点から概観し、在日留学生と日本人学生との交流の重要性について述べていく。本章は、本研究の背景、目的、構成の 3 節から成り立っている。

1.1 本研究の背景

2018 年 5 月 1 日の時点での日本における留学生総数は 298,980 人であり、前年比で 31,938 人増加している [1]。この結果は日本政府が 2020 年まで進めていた「留学生 30 万人計画」の目標にも近く、その目標数は達成できていると思われる。そして、次の留学生政策の方向性として “大学の国際化を実現する多様な留学生交流の推進”、“留学生経験者のネットワークの拡大と可視化”、“高度外国人材としての留学生の我が国への定着促進”の3つが言われており、その理由は“日本企業に就職することといった外国人留学生が日本留学に求める目的を実現できるような支援を行うことが重要である”ことからであると述べている [2]。つまり、これからの留学生政策はいかに優秀な外国人留学生を日本社会に取り組むかが課題になっていることが窺える。

そのために、「留学生 30 万人計画」では “留学生を引き付けるような魅力ある大学づくりと受け入れ体制”を中心に政策を進めている。現在、留学生の受け入れ体制として進んでいるのは、“優れた留学生に向けたインセンティブの付与―日本の大学のグローバル化―”、“留学生にとって安心で魅力ある受け入れ態勢等の整備”、“海外も含めた日本語教育の充実”の三つである [3]。しかし、大学入学前と大学卒業後に対する支援が主であり、大学在学中の支援は乏しいと考えられる。

一方、留学生への支援体制は留学生センターが中心であるが、増加する留学生に合わせての担当組織の拡大が見込まれないことにより、増加する留学生への支援が追い付かないのが現状である [4]。

加賀美（2007）は留学生問題をマクロレベル、メゾレベル、ミクロレベルに分類し、その中でもメゾレベルに当たる情報提供および対人関係問題がマクロレベルの問題やミクロレベルの問題を解決にもつながると述べている [5]。しかし、図 1-1 が示すように在日留学生の苦労で克服できなかったことに“物価が高い”、“日常生活における母国の習慣（生活習慣、宗教上の習慣等）との違い”、“日本語の習得”、“英語の習得”、“学校内で日本人学生と交流できないこと”が上位に来ており、“物価が高い”といった経済的な問題や“日本語の習得”、“英語の取得”といった語学の問題以外に人間関係の問題を克服できていないのが現状であると考えられる [6]。図 1-1 の示すように日本語の習得は留学中に克服できる項目として考えられるため、本研究では、留学生問題において重要だと言われており、留学生全体 2 割であり悩んでいると答え、また、留学生全体の 2 割が克服できなかったと答えた対人関係形成の中でも日本人学生との交流に着目する。

そこで、本研究では在日留学生の留学生問題と関係が深い日本人学生との対人関係に着目し、その原因の特定および提案することを目指して行われた。

在日留学生と日本人学生の交流への影響要因の特定には量的調査および質的調査からのアプローチがされており、量的調査では質問紙調査により因子を抽出すること、そして、質的調査では在日留学生と日本

人学生の交流体験のモデルをインタビューにより構造化することを試みた。

ただし、田中 et.al(2011)によると在日留学生と日本人学生との交流において在日留学生からの積極的なアプローチが日本人学生との友人関係の構築をより容易にする可能性があることから、在日留学生の日本人学生への交流に対する動機づけは重要になってくると考えられる [7]。田中(1992)はそのために、留学生へのソーシャル・スキルを教えることを重要だと論じており、それに伴う教育カリキュラムの提案を行っている [8]。しかし、岡田(2008)によると友人関係の形成および維持において、スキルも重要であるが、それに伴う動機づけも重要であると述べている [9]。そのため、留学生の日本人学生との交流への動機づけに関する研究も必要になってくると考えられる。

筆者自身も在日留学生であり、日韓のハーフであることから他の留学生より日本に対する理解はできていると思ったが、実際大学 4 年間は苦労をしており、その中でも日本人学生との交流においては大変苦労をした。特に、日本語の勉強に対する意欲が強く、日本人学生と交流することによってより自然な日本語を身につけたかった。しかし、日本人学生との交流は非常に難しく、日本人学生との交流をあきらめて同国の人、もしくは、母国にいる友達との交流だけをしようとした時期もある。

このように在日留学生は日本に来て、日本語の上達を目的として、もしくは、日本に対する興味があり、日本人との交流を試みるが、支援の乏しさやどのように振舞うかわからないことから日本人学生との交流における動機づけが低下しているのではないかと考えた。

したがって、本研究では、留学生と日本人学生の交流体験のモデルを参考にし、その中で留学生の日本人学生との交流のための努力を妨げる原因の特定とそれに対する提案を行うことを目指した。

田中(2000)は先行研究では留学生を1つの集団として扱っている研究が多いが、文化の価値観やニーズによって対人関係が変化することから特定の文化圏の人に着目する必要があると述べている [10]ことから、本研究でも特定の文化圏に限定して行う必要性があった。留学生の中でも中国人は同じ漢字圏で類似する文化を有し、日本語をよく学んで留学してきているにもかかわらず、日本人との交流に苦労しているケースが多く見られることから、何が交流を疎外しているのか、心理的要因を明らかにすることが、今後の両国間の良好な交流発展に必要になると考えた。田中(1992)は留学生の出身地と日本における対人行動上の困難を頻度を目安にして分析しており、その中でもっとも多く挙げられた項目は間接性であり、その間接性を困難だと思っている留学生は西欧・中南米が 85%、その次に漢字圏の人が 83%であったという結果からも、同じ漢字圏であっても交流が難しいことが考えられる [8]。また、平成 29 年 5 月 1 日時点で中国人留学生数が留学生全体の 4 割を占めている [11]ことから、その重要性は今後ますます増加すると考えられる。

そこで本研究では、中国人留学生の中でも日本語ができる留学生を対象にして行う。その理由は日本人は日本語ができる外国人に対して、日本の思考様式・価値観・人間関係におけるコミュニケーションを理解している、理解すべきであると考えている傾向があると言われており [12]、そこから考えられるのは日本語ができない中国人留学生より日本語ができる中国人留学生に対する支援が比較的手薄になっている可能性があると考えられたからである。

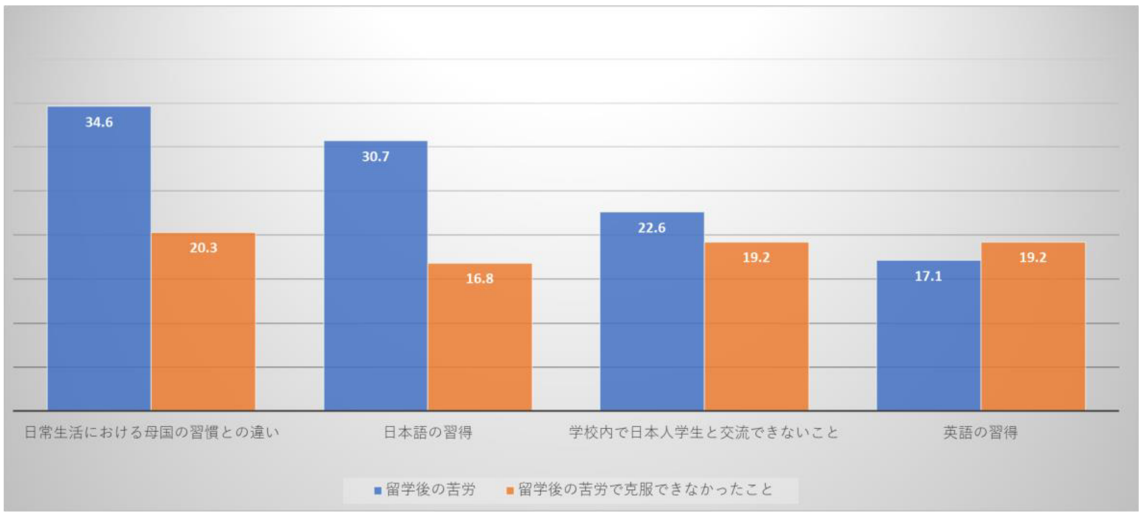


図 1-1 留学生が苦労した内容（日本学生支援機構、2019 より筆者作成）

1.2 本研究の目的

本研究の目的は在日中国人留学生の日本人学生との交流における動機づけを低下させる要因を特定し、その背景にある文化的な違いを特定することである。さらに、そこから得られた気づきを基に、その要因を解消するための提案を考え実験を行ったので、合わせて報告する。

1.3 本論文の構成

第 1 章では序論として、研究の動機とその目的について述べる。第 2 章では、本研究の研究背景になる先行研究や課題導出のための先行研究のレビューを行い、先行研究と本研究の違いについて述べている。第 3 章では、留学生支援の教育的アプローチとして取り上げられている“接触仮説”の偏見に着目した予備実験、そして、日本語教育と対人不安との関連がある第二言語不安に着目した予備実験を行うことで提案への仮説を導きだす。第 4 章では第 3 章で得た仮説をもとにインタビュー調査を実施し、第 5 章でも第 3 章で得た仮説をもとに本研究の提案について述べる。最後に第 7 章では本研究の結論とその展望を述べる。本論文の構成を図 1-2 に示す。

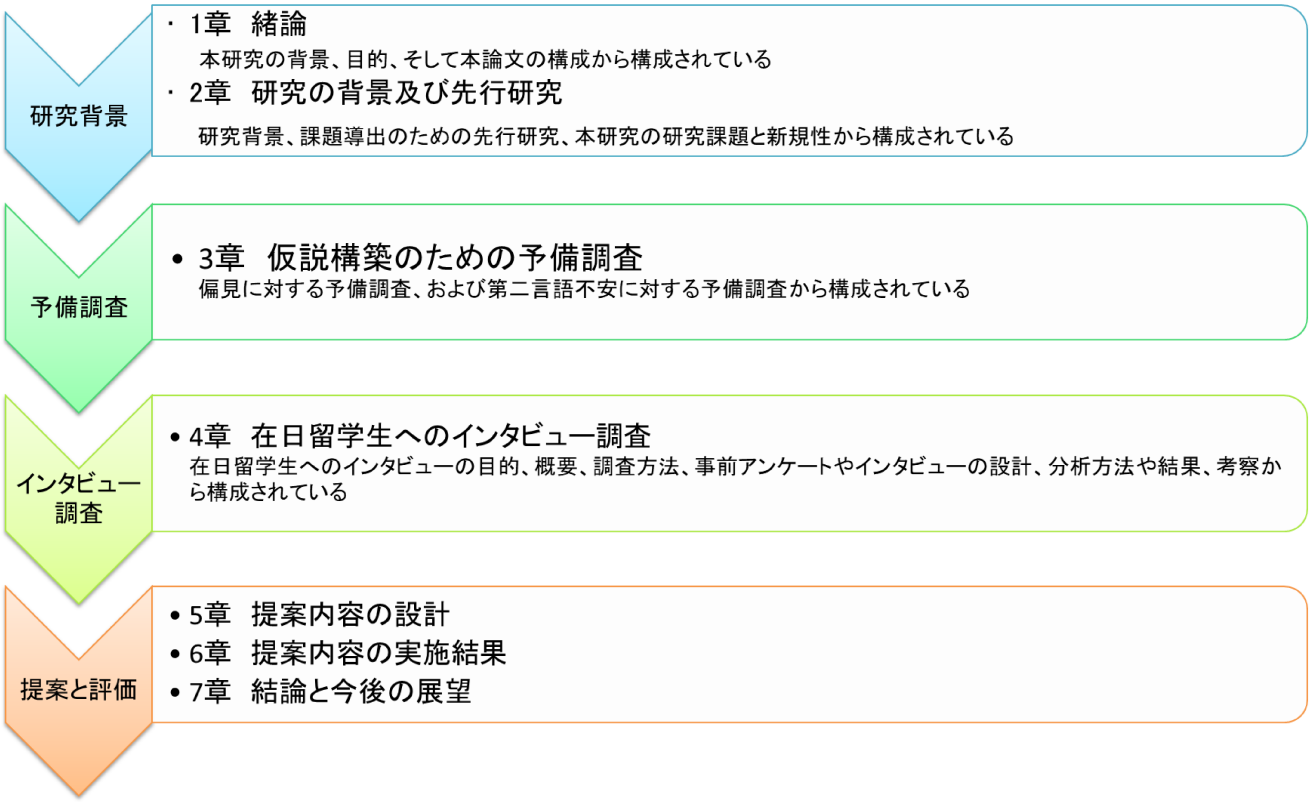

研究背景
・1章　緒論
本研究の背景、目的、そして本論文の構成から構成されている
・2章　研究の背景及び先行研究
研究背景、課題導出のための先行研究、本研究の研究課題と新規性から構成されている
予備調査
• 3章　仮説構築のための予備調査
偏見に対する予備調査、および第二言語不安に対する予備調査から構成されている
インタビュー調査
• 4章　在日留学生へのインタビュー調査
在日留学生へのインタビューの目的、概要、調査方法、事前アンケートやインタビューの設計、分析方法や結果、考察から構成されている
提案と評価
• 5章　提案内容の設計
• 6章　提案内容の実施結果
• 7章　結論と今後の展望

図 1-2 本論文の構成

第2章　研究の背景及び先行研究

第 2 章では、本研究の研究背景になる、在日留学生と日本人学生の交流に関する先行研究や動機づけ、課題抽出のための先行研究を概観し、本研究の新規性について述べる。

2.1 在日留学生の問題に関する先行研究

横田（2004）は留学生の問題を6つの領域で分類しており、「語学学習に関する領域」、「専門分野の教育・研究に関する領域」、「経済的自立と安定に関する領域」、「生活環境への適応に関する領域」、「青年期の発達課題に関する領域」、そして、「交流に関する領域」であると述べている [13]。加賀美（2007）は留学生問題をマクロレベル、メゾレベル、ミクロレベルに分類している。マクロレベルの問題は環境的・物理的な要因による経済的・住居問題、ミクロレベルでは日本語学習や留学生の健康心理の問題があると述べている。これらのマクロとミクロをつなぐ問題がメゾレベルの問題であり、メゾレベルの問題は情報提供や対人関係に関連している [5]。とくに、対人関係における問題は異文化適応と関係が深く、田中（2000）は異文化理解を果たす状態である「適応」を促進するためには、ホスト国の人々との対人関係が良好であることが重要であると述べており、岩男・荻原（1988）も留学生の日本社会への適応の観点において日本人との人間関係が何より重要な役割を果たすとのべている [10] [14]。とくに、留学生の日常的な生活の場である大学キャンパスおいて接触するホスト国学生の友人の有無は、異文化適応の促進とかかわりが深い。このことから留学生のホスト国への適応において日本人学生との交流が重要な問題であることが示唆させる。

留学生の交流における問題は異文化不適応ととらえることも可能であり、異文化への適応の困難さが原因となり、異文化への不適応の症状がでることをカルチャー・ショックと呼ぶ。カルチャー・ショックの概念を最初に提唱したのは Oberg（1960）であり、「社会的な関わり合いに関するすべての慣れ親しんだサインやシンボルを失うことによって突然生じる不安」と定義している [15]。カルチャー・ショックを克服するプロセスに関する研究には Lysgaard(1955)の「U 字カーブ」説や Gullahorn&Gullahron(1963)の「U 字曲線」説があり、両方とも異文化適応を一つのプロセスとして捉えている [16] [17]。つまり、カルチャー・ショックは留学生はだれでも経験することになり、それらを留学生がどのように受け止めるかを明白にすることは、異文化適応研究の一つの重要な視点であるといえる [18]。

したがって、在日留学生が日本人学生との交流において感じるカルチャー・ショックをどのように受け止めるかを明白にすることが重要であると考えられる。

2.2 在日留学生の日本人学生との交流に関する先行研究

本節では、在日留学生の日本人学生との交流に影響を与える原因を分析した先行研究を概観したあと、それに対する問題提起を行う。

2.2.1　在日留学生と日本人学生との交流の影響要因に関する先行研究

在日留学生と日本人学生との交流における影響要因に関しては質問紙調査による因子分析を通して影響要因の因子の抽出を行う研究が多い。量的調査においては、横田（1991）、田中（1995）、田中（2003）などがあげられる。在日留学生と日本人学生の親密化について初めて研究をはじめたのは横田（1991）であり、在日留学生と日本人学生の交流における影響要因を因子分析し、留学生の側では、「日本の慣習」、「言葉の障壁」、「関係づくりへの抵抗感」、「余裕なし興味なし」、「希薄な主張」の5つの因子を抽出し、日本人学生側では「無力な暗黙なルール」、「漠然とした不安と遠慮」、「言葉の障壁」、「興味なし余裕なし」の4つの因子を抽出している [19]。

田中（1995, 2003）は留学生側と日本人側の対人関係形成における困難のそれぞれの原因認知を調べた [20] [21]。田中（1995）は留学生 268 名を対象に対人関係困難の原因認知を7つの項目に分けて留学生側と日本人側にそれぞれ回答してもらった。7 項目は語学、ソーシャル・スキル、社会的知識、無関心、否定的感情、多忙、個人要因の7つである。回答を分析した結果、留学生側から「日本人批判」、「自分の知識」、「機械的理由」、「自分の態度」の4つの因子が抽出された [20]。日本人側では「スキルと社会知識」、「日本人の消極性」、「留学生の消極性」、「双方の多忙」、「双方の語学力」の5つの因子が抽出された [21]。

質的調査による要因の分析では、たとえば、小松（2013）は友人関係の形成および不形成に至る過程を中国人女子留学生 7 名に対して、半構造化インタビューを実施し、KJ 法によって分析した。その結果、「友人形成への関心」、「友人関係期待」、「友人関係に関する否定的体験」、「否定的体験に対する行動、「友人関係に関する肯定的体験」の5つのカテゴリーを見出した [22]。

また、留学生の友人関係についての理論を提示するような研究もある。たとえば、工藤（2003）は留学生と日本人学生の友人関係の形成過程モデルを質的面接法にて提示した [23]。佐々木 et al.(2012)は半構造化インタビューから得た情報から修正版グランデッド・セオリー・アプローチによって分析を行い、留学生と日本人の体験モデルを提示した。そこから日本人学生と留学生が友人関係をどのように構築していくのかを明らかにしたのである [24]。

これらの研究から留学生と日本人学生の交流がどのようになされているか、そして、その交流の際にどのような原因がそれを妨げているのかについて着目した研究はある。しかし、交流を妨げる要因を留学生がどのように認識しているか、そして、その背景にある要因の特定に着目した研究はない。

2.2.2　在日留学生と日本人学生の交流の困難に対する提案の先行研究

横田・白土（2004）によると留学生支援において3つのアプローチがあり、問題解決的アプローチ、予防的アプローチ、そして、教育的アプローチがある [13]。問題解決的アプローチは問題が発生したあとに相談により解決する方法であり、主に、異文化間カウンセリングやアドバイジングなどがあげられる。しかし、相談に来ない留学生がいることや留学生が増加すればそれに伴って対応する問題も増える一方、限界が来るという問題点がある。予防的アプローチは問題が発生する前に行われる活動であり、主に、オリエンテーションの充実や留学生の支援者の学内外に増やすことなどがあげられる。教育的アプローチは留学生と日本人学生に対して情報を与える教育活動であり、主に文化摩擦に対する対処のためである。予防的アプローチと似ているが、教育という形をして行われるため、区別して読んでいると述べている。問題解決アプローチは先ほどの限

界があることから今後予防的アプローチや教育的アプローチが重要になってくると述べている。

在日留学生と日本人学生の対人関係問題に対する教育的アプローチは主に Allport(1954)が提唱している接触仮説をもとに考えられている。加賀美(1999)は日本人学生との接触が少ない留学生には「教育的介入」が必要だと論じており、「異文化間教育に関わる者が日本人学生との協働活動を前提とした教育的介入を行うことで、ステレオタイプをうち崩すことができるような交流の場を大学コミュニティに設定することが必要である」と述べている [25]。また、日本語教育が異文化適応教育としての要素を持っているという意見もあり、守谷(2015)は教育的アプローチとしての日本語教育の重要性についても述べている [13] [26]。

また、田中(1992)は留学生に対するソーシャル・スキルの教育の重要性を説いており、留学生の困難を質的調査から抽出し、それらをソーシャル・スキルに落としており、それに対応する教育プログラムの提案を行っている [8] [27]。

しかし、ソーシャル・スキルや教育的介入によって留学生に対してどのような変化があるのかを測っている研究は少ないのが現状であり、また、友人関係形成のモデルに着目した研究はない。

2.2.3 友人関係形成・維持における動機づけに関する先行研究

友人関係の形成や維持に関する先行研究は、岡田(2008)の研究がある。図 2-1 は親密な友人関係の形成。維持過程の動機づけをモデル化しており、このモデルが示すように友人関係への動機づけには“環境要因”、“個人要因”、“親密な友人関係”の3つが関わってくる [9]。また、岡田(2008)によると適切なスキルを身につけているか否かと、積極的に他者と関わろうとするか否かは別の観点であり、スキルの側面に注目するだけでは必ずしも十分とは言えないと述べている [9]。

この観点から留学生の日本人学生との交流に対する動機づけを見てみると、なぜ、留学生が日本人学生との交流をやめてしまったのかに対する研究は少ない。上述した佐々木 et al.(2012)の友人関係構築をめぐる体験モデルで言及されている“すれ違い”がそれに当てはまると考えられる [24]。その研究での“すれ違い”とは「心理的距離感」、「生活スタイルの違い」が言われており、「心理的距離感」は「日本人は気持ちをストレートに表さない」、「日本人はすぐに友達にはならない」、「日本人が距離を置くと友達になれない」から感じていると述べている [24]

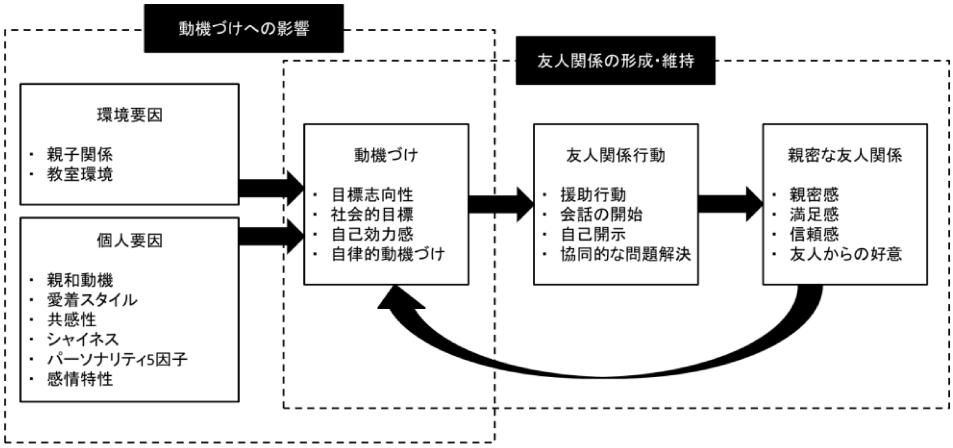


図 2-1 親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデル(岡田、2008)より筆者作成)

2.3 課題導出のための先行研究

在日留学生の日本人学生との交流への動機づけに関する研究は上述した佐々木 et al.(2012)の友人関係構築をめぐる体験モデルからも見られる。図 2-2 が示すように体験モデルの中でも「すれ違い」が動機づけに関係があると考えられるが、その原因についての調査までには及んでいない [24]。

留学生の日本人学生との交流への動機が減ってしまった原因の背景に関する研究は上原 et al.(2011)の日台中における大学生の友情観の比較に関する研究がある。上原 et al.(2011)は面接調査から質問紙調査を行い、日台中の友情観の比較を行った。その結果、中国人は友人に対しての社会的距離感が近く、あまり礼儀を重視せずに信頼感をもって、相手の面目に配慮しながら率直な意見表明をする傾向があり、日本人は友人に対して社会的距離感が大きく、相手を気遣い迷惑をかけない傾向を示し、台湾はその真ん中であると述べており、その背景には文化的な背景があると述べている [28]。

しかし、どのような文化の違いがそのような違いを生み出しているのかに着目した研究はない。

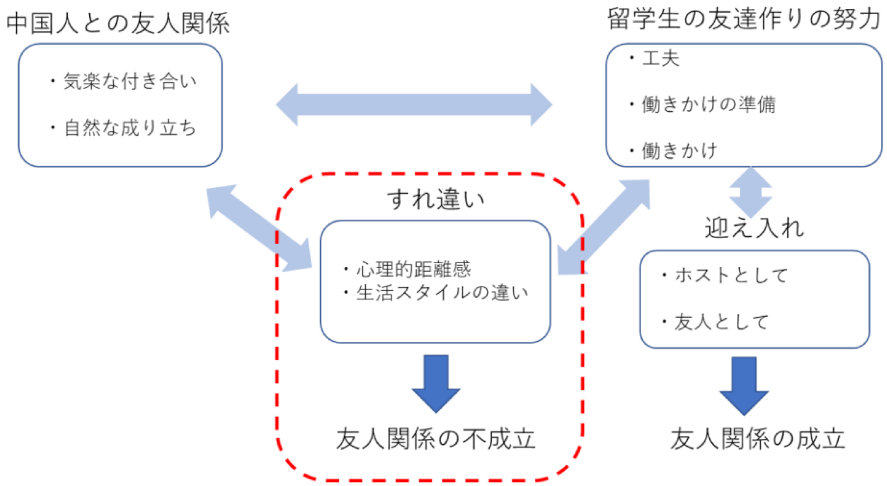


図 2-2 中国人留学生の日本人学生との友人関係構築をめぐる体験モデル(佐々木・張(2012)より筆者作成)

2.4 本研究の目的と新規性

1 章 2 節で述べた研究の目的を、先行研究との違いに着目して再考する。本研究の目的は、留学生の日本人学生との交流における動機づけが減少してしまう要因を特定し、それに対する提案を行うことである。本研究の新規性は、留学生と日本人学生との交流への研究において文化の違いは重要な要因であることが考えられるが、先行研究ではあまり触れられていないことから、どのような文化の違いが交流への動機づけの妨げになるかを特定する点である。

第3章　仮説構築のための予備調査

第 3 章では留学生支援の中で教育的アプローチの際に言及される“接触仮説”および“日本語教育”についての予備調査を行い、その後に行われるインタビュー調査（4 章）のための仮説を導くことを目的とする。そのため、予備調査1では接触仮説と関係が深い“偏見”に着目し、予備調査2では“日本語教育”と関係が深い“第二言語不安”に着目し、それぞれ予備調査を行った。それぞれの詳細については以下より述べていく。

3.1 予備調査における先行研究

教育的アプローチの際に言及される“接触仮説”と“日本語教育”について先行研究の概観を行う。

3.1.1　接触仮説に関する先行研究

異文化交流における理論的枠組みとしてはAllport(1954)が提唱した「接触仮説」がある [29]。この理論は日本でも概ね支持されており [30]、そのことから本研究では接触仮説によって影響をうける偏見に着目して予備調査1を行った。Allport（1954）によると、一定の条件を満たした接触でなければ、異文化間交流は効果的ではないと述べており、その条件とは①対等な地位関係、②共通の目標を持つ協働、③社会的制度的支持、④親密な接触であると述べており、そのことによってある集団に対する偏見は緩和されると述べている。

偏見とは、対象に対しての否定的な態度のことを指し、その対象が含まれる対象集団に関する否定的な内容を含む信念や感情、行為を含んでいると定義されている [31]。偏見の認知基盤になるものがステレオタイプであり、ステレオタイプとは他者に対する情報処理を一定の方向へ導く認知的スキーマーの一種とされている [32]。

そのため、予備調査1では、ある対象もしくは、対象集団に対して否定的な意見を出させ、それが事実に基くものかそれとも被験者の印象による意見なのかを見ることによって偏見を抽出する。

3.1.2　日本語教育に関する先行研究

本研究では日本語教育の中でも対人不安研究の影響を強く受けた第二言語不安に着目してそれの対する予備調査を行う [33]。第二言語不安とは、“第二言語学習や使用、習得に特定的にかかわる不安や心配とそれによって引き起こされる緊張や焦り”と元田（2005）が定義している。Horwitz et al.(1986:128) や MacIntyre & Gardner(1994b:284)による定義もあるが、元田（2005）の定義を用いた理由としては主に教室外の第二言語不安をも包括する定義であったためである。そのため、予備調査2ではこのモデルに着目して予備調査を行う。第二言語不安を軽減するためには、図 3-1 で示すように第二言語での自尊感情の向上、および内発的動機づけの向上が必要であることからこのモデルに沿った予備実験を行う。

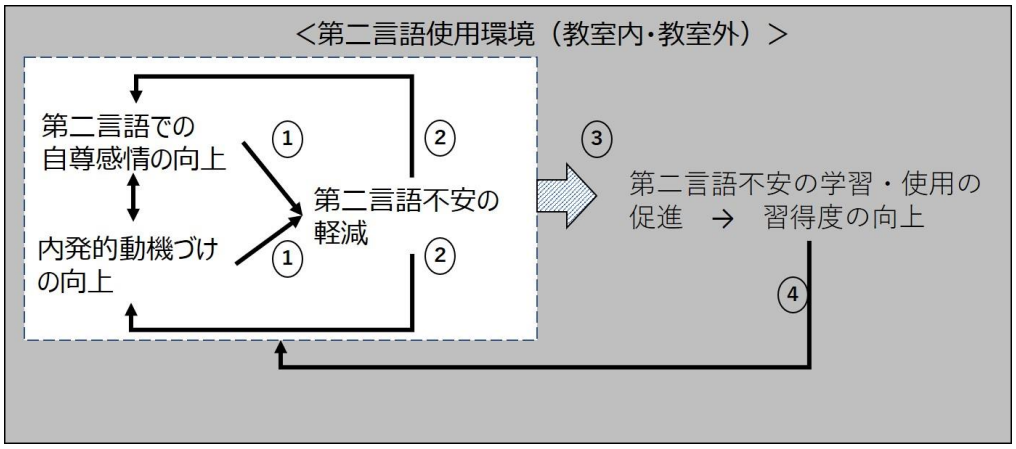


図 3-1 不安軽減･自尊感情･動機づけの循環モデル（元田、2002 より筆者作成）

3.2 予備調査 1

予備調査1の概要および目的、基本情報、方法や実施結果、評価方法、結果から予備調査1から得た考察および限界について述べる。

3.2.1 予備調査 1 の概要及び目的

予備調査 1 では偏見を可視化する方法についてのプロトタイプを実施した。“偏見” とは誤った知識や過度の一般化によってもたらされる悪感情（antipathy）と定義する [34]。予備調査 1 では偏見を可視化する方法の有効性及び方法についての課題の確認を行っており、詳細は以下に記す。そのため、今回は日本と中国への渡航歴を持ち、かつ、日本と中国の人との接触があることから日本や中国の人に対する知識や意見がある人を対象に予備実験を行った。

3.2.2 予備調査 1 の基本情報

予備調査 1 の基本情報は以下の通りである。

日時 …2019 年 3 月 12 日 20:44 ~ 21:00
対象者 …20 代韓国人男性 1 名
実施場所 …韓国 ソウル市のカフェ

3.2.3 予備調査 1 の方法

予備調査 1 の設計は以下の考え方から実施した。思考の枠をある程度固定させ、必要な部分だけを参加者に書かせることによって、今まであまり意識していなかった部分が浮き彫りになるという仮説から行った。今回のプロトタイプでは形成的評価を 5W1H を用い、Why の部分を分析することによって形成的評価の意義を分類した研究があることから、5W1H のフレームワークを用いて実施した [35]。その理由としては場面の設定がしやすい点、そして、場面を固定させて Why の部分を深堀してもらうことによって今まであまり意識しなかった自分の考えにたどり着けると考えたためである。

具体的な方法としては以下の順に沿って参加者に実施した。

① 普段の自分の行動の中で一番思い浮かびやすいシーンを想起する。

② そのシーンを When,Where,What,How に沿って書く。

③ Who の部分は参加者が接したことがある外国人を覚。

④ 上記の５つが書かれた時点で参加者に Why を書く。

⑤ その Why に対して 5 回考える。

方法は以上の５つのステップからなっている。プロトタイプ１の特徴としては、場面の設定を普段の生活の中の日常生活にしたこと、そして、Why を１回考えてもらったうえで、その理由を最低 5 回かかせることである。初めの Why は表面的な理由になりやすく、それを何回も自分の中で繰り返し聞くことにより、深い理由が出るのではないかという考えから 5 回の理由を聞く機能を入れた。

そして、今回のプロトタイプ１の実施においての国の設定は中国と日本で行った。韓国、日本、中国は日々メディアでもよく取り上げられ、他の国の人より接した経験が多いと判断したからである。

プロトタイプ１の実施は以下の手順で行った。

① 事前インタビューを行い、参加者が今回の対象国（日本や中国）に対する偏見があるかどうか確認をし、さらに、それは間接経験か直接経験なのかを確認した。

② 日本と中国の両方の場面を設定し、参加者はそれぞれシートの順番に沿って記入した。

③ 事後インタビューを行い、シートで出た内容をもとに偏見があると思うかどうかの確認を行い、実際に変化があるかどうかを確認した。

3.2.4 予備調査１の実施結果

これらの図は、実際に参加者が記入した韓国語のシートを、筆者が和訳したものである。作成順番は日本バージョンから中国バージョンの順に作成した。日本バージョンはインタビュー相手が日常生活を想像し、それに基づいて、Who,When,Where,What,How,そして、Why を書いた。しかし、日本バージョンでは、Why の部分で偏見が見られなかったため、中国バージョンではインタビュー相手が自分の直接、間接経験をもとに書いた。参加者が作成したシートを図 3-1、3-2、3-3、3-4 に示す。なお、予備実験1で用いた手順書は Appendix の付録資料①に載せている。

日本バージョン（インタビュー相手の日常生活を想像してもらった）

5W 1H	記　述　部　分
WHO	極右日本人
WHEN	昼食後に
WHERE	家の前のカフェで
WHAT	コーヒーを頼む
HOW	言葉で
WHY	彼らも食後のコーヒーが欲しいから

図 3-2　日本バージョンのプロトタイプ1の結果（筆者和訳）

WHYの内容：食後のコーヒーが欲しいから

WHYに対する5W	記　述　部　分
WHY	彼らも人であるから
WHY	普通の人は食後のコーヒーが欲しいから
WHY	偶然の一致
WHY	
WHY	
WHY	

図 3-3　日本バージョンプロトタイプ1の結果（筆者和訳）

中国バージョン（直接＆間接経験をもとに作成）

5W 1H	記　述　部　分
WHO	遊びに来てうるさい中国人
WHEN	下校もしくは仕事帰りに
WHERE	地下鉄の中で
WHAT	中国人同士でほかの人にかまわずおしゃべりをしている
HOW	言葉で、うるさく
WHY	彼らのよく知られた特徴

図 3-4　中国バージョンプロトタイプ1の結果(筆者和訳)

WHYの内容：彼らのよく知られた特徴

WHYに対する5W	記　述　部　分
WHY	彼らの人口が多い
WHY	お金が多い人口も多いため、その行為を他国でも行う
WHY	彼らは自分たちがうるさいとは気づいていない
WHY	それがだめだとは思わない
WHY	でも、全世界の人はそれがだめだと知っている
WHY	彼らのそういう行動の理由は彼らの自尊心の過多

図 3-5　中国バージョンプロトタイプ1の結果(筆者和訳)

3.2.5　予備調査１の評価方法

プロトタイプ１の成果物シートは以下の３項目で評価した。

①　偏見を可視化することができたのかどうか確認した。

②　偏見の判断軸は事実か意見なのかでわけ、意見の部分が根拠がないと判断した場合、偏見として捉えた。

③　可視化した偏見から参加者が偏見を持つとされる対象に対する考え方の変化があったかどうかを

質問した。

以上の３つの項目について①や②に対しては実際シートに Why の部分を記入することができたのか、そして、その項目が偏見であるかどうかを目視で確認した。③に対しては参加者に事後インタビューから確認を行った。

3.2.6　予備調査１の評価結果

予備調査１に対しては偏見の可視化ができた。ただし、日本のバージョンにおいては偏見の可視化ができず、中国のバージョンだけ可視化ができた。２に関しても中国バージョンの Why のシートを用いて、それらを参加者と話しあいながら事実と意見として分けることができた。③に対しては参加者にインタビューで確認を行ったところ特に変化はないと答えてもらったため、参加者の偏見に対する認知の変化に有効ではなかったことが確認できた。

3.2.7　予備調査１からの考察や限界

事前インタビューで参加者は今回の対象国である日本に対しては偏見がなく、中国に対しては偏見があると答え、両方とも偏見につながるような直接的な経験はなく、間接的な経験だけであると答えた。このインタビュー結果は今回のプロトタイプ１で日本バージョンでは偏見がでず、中国のバージョンでは出たのと関係があると考えられる。日本バージョンでは偏見を出すことができなかったため、中国バージョンでは参加者の中国に対する間接的な経験をもとにシートを作成してもらい行ったところ偏見の可視化ができた。

そこから考えられるのはあまり本人が意識していない偏見に対してはより精巧な仕組みが必要であり、普段の生活で意識している偏見に対しては可視化ができたことから今回のプロトタイプ１は普段意識している偏見に対しては有効であることが確認できた。さらに、それを事実や意見に沿って分類することによって偏見の判別を行ったことも有効であったことから次回改良する際に意見の部分をより深く掘り下げる仕組みも考えられる。今回の対象者が１人であることから汎用性に関しては議論の余地が残っているが、本人の間接的もしくは直接的な経験を思い出させることには有効であると考えられる。

そのため、在日留学生が日本人学生との交流において持つ否定的な体験を予備調査１でのシートを使うことによって、可視化することが可能であると考えられ、後述する第６章の実験においても、本シートを「思い出しワーク」として活用した。

3.3 予備調査２

予備調査2では第二言語不安に対する提案のプロトタイプを実施した。第二言語不安に対する提案の妥当性及び方法についての課題、そして、その有効性を確認するために行っており、詳細は以下に記す。

3.3.1　予備調査２の概要と目的

予備調査２では第二言語不安に対する提案のプロトタイプを実施した。予備調査より、第４章における

仮説および、第 5 章における仮説を導き出すことを目的とする。

まず、このプロトタイプで扱っている第二言語とは目標言語圏で学習する新しい言語であると述べている [36]。予備調査での対象は在日留学生であることから、日本語を第二言語として定義して行う。

そのため、プロトタイプ 2 で参照にしたモデルは図 3-1 で示す元田（2002）の不安軽減・自尊感情・動機づけの循環モデルを採用し、そのモデルに基づいて機能を抽出した。予備調査では第 2 言語不安に対する方法の妥当性及び方法についての課題、そして、その有効性を確認するために行っている [37]。

3.3.2　予備調査２の基本情報

プロトタイプ２の基本情報は以下の通りである。

日時　…2019 年 9 月 10 日　19:00 ~ 21:00（2 時間）
対象者　…20 代中国人留学生　女性　1 名
実施場所　…慶應義塾大学日吉キャンパス協生館

参加者は日本への来日歴が 2 年以上の人で、日本人との交流に悩んでいる人を対象にした。また、自分の日本語に対してあまり自信がないと考えられる人を対象にした。今回の対象者は女性の中国人留学生であり、来日歴は約 5 年ぐらいである。日本語関連資格は日本語能力試験 1 級を取得している。また、日本語の自己評定では、7 件法において、話すことは４、聞くことは６、読むことは５、そして、書くことに対しては４と評価している。

3.3.3　予備調査２の方法

プロトタイプ２の設計方法は以下の考えから実施した。まず、上述した元田（2002）の循環モデルを参照にしながら、プロトタイプ２の作成を行った。まず、第二言語での自尊感情の向上、および、第二言語学習に対する内発的動機づけを向上させることが求められたため、その二つを合わせたツールを第二言語不安軽減ツールとして捉えて作成した。図 3-6，3-7 に詳細を記す [37]。

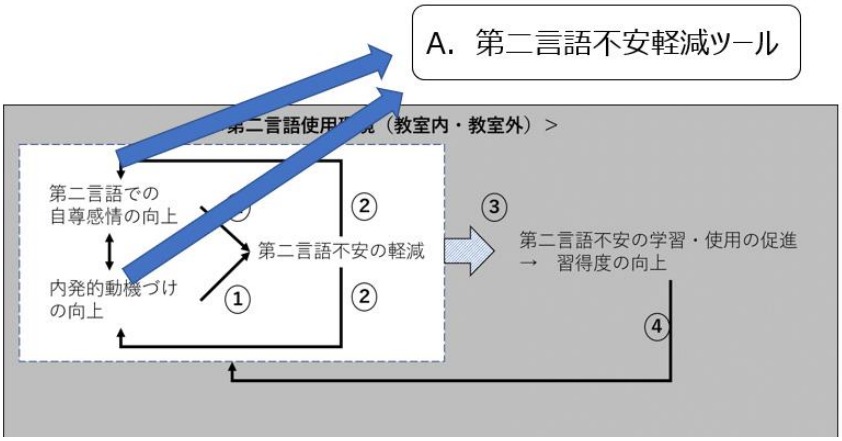


図 3-6 第二言語不安軽減ツールの構造

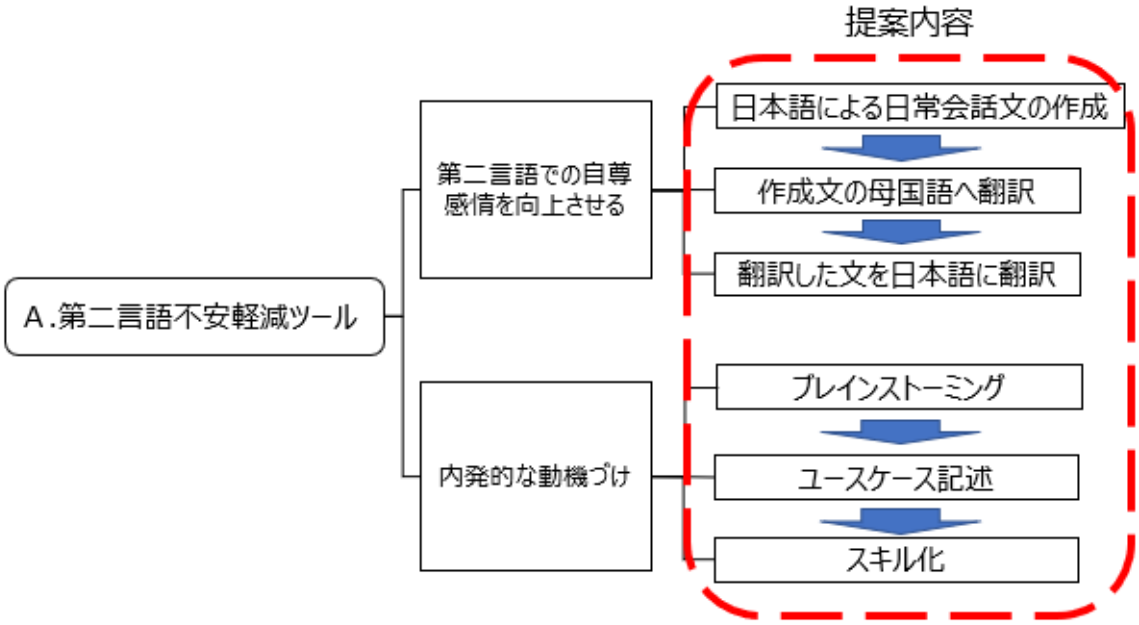


図 3-7 第二言語不安軽減ツールの詳細

(1) 第二言語での自尊感情を向上させるツールの詳細

元田（2004）によると第二言語学習者の自尊感情が下がる理由は 4 つの比較からであると述べている[38]。第 1 は母語での自分との比較(Horwitz et al., 1986)、第 2 は目標言語母語話者との比較(Clemont et al., 1980)、第 3 は他の学習者との比較（Price、1991）、第 4 は到達目標との比較（Price,1991）であるが、今回の提案では第 1 の母語での自分との比較や第 2 の母語言語母語話者との比較の両方を行うことに対応した提案を考えた。

まず、参加者に普段の日常会話文を日本語で作成してもらう。そして、その内容を参加者の母国語へ翻訳してもらい、もう一回日本語に翻訳してもらった。

① 日本語による日常会話文の作成
参加者に対し、A4 用紙 1 枚分程度で最近あった日常会話を書いてもらった。

② 作成文の母国語へ翻訳
①で作成した日常会話文を母国語へ翻訳してもらった。書くときに最初の文の日常的な部分を活かす形での翻訳をお願いした。

③ 翻訳した分を日本語に翻訳
①で作成した母国語での会話文をもう一回日本語に翻訳してもらった。

（2）第二言語に対する内発的動機づけを高めるツールの詳細

元田（2005）は第二言語不安を軽減するためには、内発的動機づけを高めることが有効であると述べており、そのためには第二言語や第二言語の学習に興味を持つこと、そして、願望を実現化させる確かな目標を定めることも重要であると述べていた。そのため、今回の提案では参加者がそもそもできることをより詳細化させ、その中からそれぞれに対応する目標を設定することにより内発的動機づけがされると考え設計した [33] [39]。

① ブレインストーミング

プレインストーミングより、自分ができることを数多くだしてもらうことを目的とする。そのために、テーマを“自分がいま日本でできること”に設定し、ブレインストーミングを行ってもらった。

② 時系列で書いていく

ブレインストーミングを行ったものから一つ選び、時系列に書いてもらう。その理由としては、あることを達成するために必要な行動を詳細化することによって、今まで意識していなかった具体的な行動を想起させるためである。

③ スキル化

時系列に行動を書いていくことをスキル化することによって、あまり意識していなかった自分の日本語の能力によってできることを具体化することを目的とする。そして、今まで自分の日本語能力ではあまりできていなかったという意識の変化を試みることを目的とする。

プロトタイプ２の実施順番は以下の図 3-8 に示す。

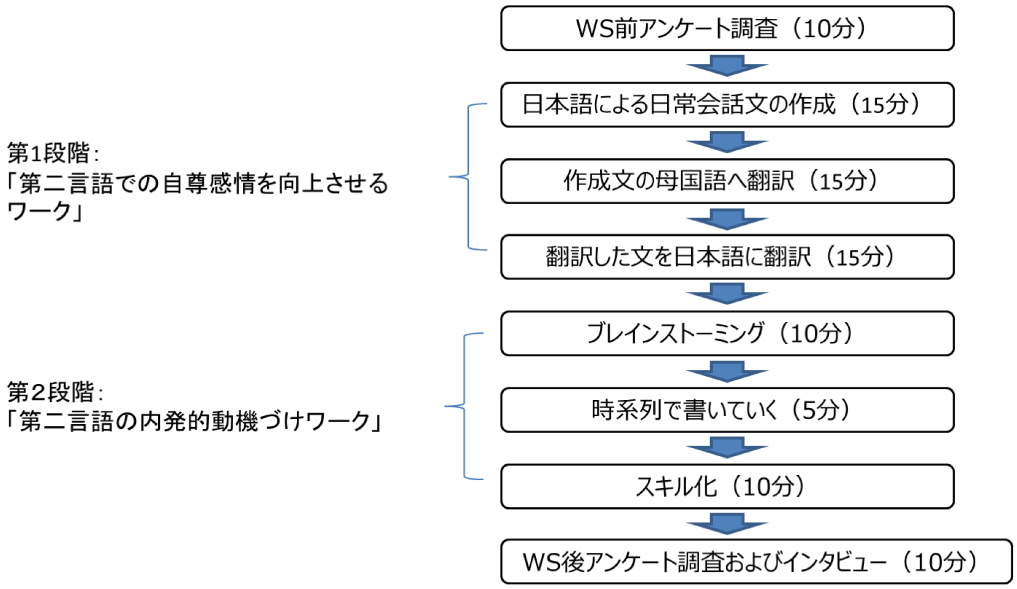


図 3-8 プロトタイプ２の実施順番

3.3.4　予備調査２の評価尺度

プロトタイプ２の効果を明らかにするために、プロトタイプ２の実施前、実施後の合計 2 回のアンケート調査を実施し、プロトタイプ２の実施による意識変化を測った。プロトタイプ２に対する設計と分析について以下で述べる。

質問項目は、以下の６つである。

① 参加者の属性に関する項目
② 第二言語不安尺度（教室内外）
③ 日本語能力の自己評定
④ 日本語不安（教室内・教室外）尺度
⑤ 日本語での自尊感情尺度（教室内外）
⑥ 全体的な自尊感情尺度

（1）第二言語不安尺度（教室内外）

プロトタイプ2を実施する前に第二言語不安を持っているかどうか、そして、実施後はその不安が緩和されたのかを測るために用いた。実施後は教室外の第二言語不安だけを測った。元田(2000)が作成した尺度であり、この尺度を用いた理由は、Horwitz et al.(1986)の FLCAS（Foreign Language Classroom Anxiety Scale）や MacIntyre & Gardner(1988)の FCA（French Class Anxiety）/FUA（French Use Anxiety）などは元田（2002）が指摘した通り、母語使用環境下での第二言語学習者を対象にした尺度であること、さらに、教室外は尺度の中にあまり含まれていないという問題点があることから、今回のプロトタイプ2で測りたい内容までを測ることができないと判断した [37]。プロトタイプ2においての第二言語不安の位置づけは図 3-9 より示す。そのため、目標言語使用環境での教室内外の第二言語不安が測れる元田（2002）の尺度を用いた。回答は「1. Strongly Disagree」から「5. Strongly Agree」の 5 件法となっており、それぞれ 7 項目で構成されている。質問事項は以下の表 3-1 に記す。

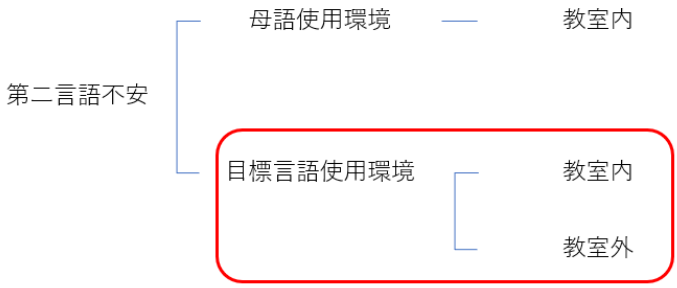


図 3-9 プロトタイプ2においての第二言語不安の位置づけ（元田（2002）より筆者作成）

表 3-1 第二言語不安尺度(教室内・外)の質問項目

教室内	教室外
日本語の授業中、日本語で発言するとき、緊張する	日本人に日本語で自分の意見を言わなければならないとき、緊張する
日本語の授業中、先生が日本語で何を話しているのかわからないと不安になる	電話で日本語を話さなければならないとき、緊張する
日本語の授業中、先生に自分の日本語を低く評価されるのではないかと不安になる	日本人が教室で学んだものとちがう日本語を使ったとき不安になる
日本語の授業中、指名されそうになると、どきどきする	日本人と話すとき、おかしな日本語を使っているのではないかと心配になる
日本語の授業中、自分より他の生徒の方が日本語ができると思って不安になる	日本人と日本語で話をしていて、彼らが何を話しているのかわからないとき、不安を感じる
日本語の授業中、日本語をまちがうことを心配している	日本人と日本語で話をするとき、自分が伝えたいことがうまく通じなかったらどうしよう、と不安になる
取り残されるのではないかと不安になるほど、日本語の授業の進みは速い	困ったことがあって、日本人に日本語で助力を求めなければならないとき、緊張する

(2) 日本語不安尺度(教室内外)—JLAS—

上述した第二言語不安の項目では拾えない参加者の日本語不安を把握するために、元田(2000)が作成した日本語不安尺度(Japanese Language Anxiety Scale)を用いて、参加者の教室内、教室外に関する調査を行った。教室内に関する内容は 23 項目、教室外に関する内容は 22 項目から構成されており、回答は「1. 全くあてはまらない」から「6. 非常によくあてはまる」の 6 件法になっている。

表 3-2 日本語不安尺度(教室内・外)の質問項目

教室内不安	教室外不安
教室で日本語を話すとき、ふだん緊張します	日本人と話しているとき、 日本語をまちがえないか心配です
指名されそうだとわかると、不安になります	日本人が、私の日本語を下手だと 思わないか心配です
教室で、日本語をまちがえないか心配です	日本人が、教室で勉強したものとちがう 日本語を使ったとき、不安になります
教室で緊張すると、ふだんは知っている日本語 が思い出せません	日本人との会話で、言いたいことが日本語でう まく言えないとき、あせります
教室で、声に出して日本語を読むとき、 緊張します	何回言っても、日本人が私の 日本語をわからないとき、あせります
日本語の授業の速さについていけないとき、 不安になります	はじめて会った人と話すとき、 日本語がうまく話せるかどうか心配です
テープやビデオの日本語がわからないとき、 不安になります	レストランで、日本語を使って注文するとき、 緊張します
教室で、日本語を使って口頭発表をするとき、 緊張します	日本語の敬語を使って 話さなければならないとき、緊張します
私の日本語のレベルは、他の学生よりも 低いのだろうか、と心配になります	日本人が私の日本語を聞いて、「え？」と聞き 返したとき、不安になります
他の学生の前で日本語をまちがえないとき、恥 ずかしいです	日本人との会話で、知っている 日本語が思い出せないとき、あせります
先生の質問の答えがわからないとき、あせりま す	日本人の日本語がわからなくて、どう反応して よいかわからないとき、不安になります
日本語の授業の内容が難しくてわからないと き、不安になります	私より日本語のうまい留学生がそばにいると、 落ち着いて日本語を話せません
日本語の授業で、たくさんのことを勉強しなけ ればならないとき、あせります	日本人が、私の知らない 日本語をたくさん話すと、不安になります

表 3-3 日本語不安尺度(教室内・外)の質問項目(つづき)

他の学生の前で日本語をまちがえないとき、恥ずかしいです	日本人との会話で、知っている日本語が思い出せないとき、あせります
先生の質問の答えがわからないとき、あせります	日本人の日本語がわからなくて、どう反応してよいかわからないとき、不安になります
日本語の授業の内容が難しくてわからないとき、不安になります	私より日本語のうまい留学生がそばにいると、落ち着いて日本語を話せません
先生が早口で日本語を話すと、不安になります	教室の外で先生と話すとき、日本語でうまく話せるかどうか心配です
他の学生が、私の日本語を下手だと思わないか心配です	私には日本語の会話能力がないのだろうか、と心配になります
日本語をまちがえたとき、先生にしかられないか心配です	日本人と話すとき、日本語を速く話さなければならないと思って、不安になります
教室の前に出て、日本語のロールプレイをするとき、緊張します	銀行や郵便局で日本語を使うとき、緊張します
教室で、私には日本語の学習能力がないのだろうか、と心配になります	日本人が私の日本語を聞いて、わからないという顔おしたとき、不安になります
急に先生に質問されたとき、緊張します	日本人が、私の日本語を笑わないか心配です
日本語を話すとき、他の学生に笑われないか心配です	日本語での会話が、なかなか上手にならないことが心配です
教室で、日本語を使ってディスカッションをするとき、緊張します	お店の人と日本語で話すとき、不安になります
先生が私の日本語をわからないとき、あせります	医者に、病気の様子を日本語で説明するとき、不安になります
テープやビデオの日本語の速さについていけないとき、不安になります	

（3）日本語での自尊感情尺度（教室内外）

元田（2000）によると第二言語不安は他者と自分を比較し、外国語学習に関して劣っていると感じる「外国語に関する自尊感情」と密接にかかわっていることが示されていた [39]。そのため、Rosenberg（1965）による自尊感情尺度を日本語場面置き換えた元田（2004）の日本語での自尊感情尺度（教室内外）を用いて測った。回答は「1. 全くあてはまらない」から「4. 非常によくあてはまる」の 4 件法になっており、それぞれ 10 項目から構成されている [40]。

表 3-4 日本語での自尊感情尺度(教室内・外)の質問項目

教室内	教室外
日本語の教室で、私には他の学生と同じくらい価値があると思っています	日本人と日本語で話すとき、私には、彼らと同じくらい価値があると思っています
自分の日本語には、いい面がたくさんあると思います	自分の日本語には、いい面がたくさんあると思います
日本語の教室で、自分はだめだなあと思う傾向があります	日本人と話すとき、自分はだめだなあと思う傾向があります
私は、他の学生と同じくらい日本語がうまくできます	私は、他の留学生と同じくらい日本語がうまくできます
自分の日本語には、あまり得意なところがないと思います	自分の日本語には、あまり得意なところがないと思います
私は、自分の日本語を前向きにとらえています	私は、自分の日本語を前向きにとらえています
だいたい、自分の日本語に満足しています	だいたい、自分の日本語に満足しています
日本語の教室で、もっと自分に自信を持てたらいいのに、と思います	日本人と話すとき、もっと自分に自信を持てたらいいのに、と思います
ときどき、自分の日本語は本当に役に立たないと思います	ときどき、自分の日本語は本当に役に立たないと思います
ときどき、自分の日本語は全くだめだと思います	ときどき、自分の日本語は全くだめだと思います

（4）全体的な自尊感情尺度

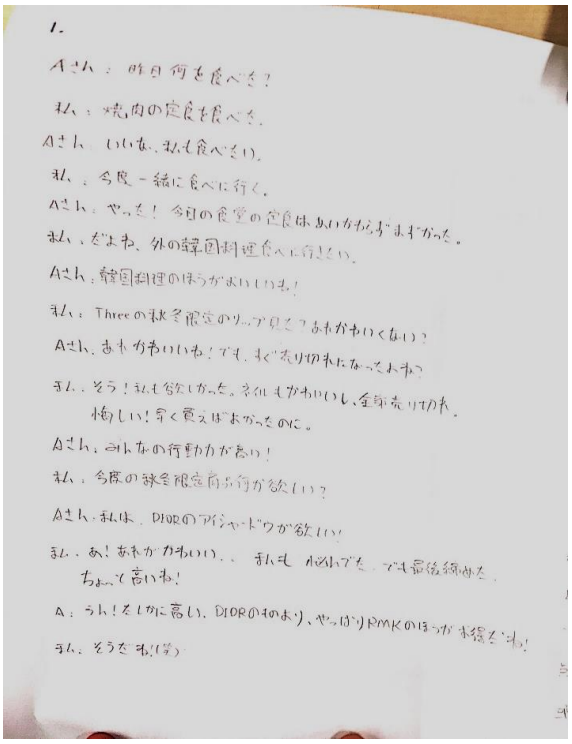
全体的な自尊感情が日本語での自尊感情に影響を与えているのではないかと考えられたため、Rosenberg(1965)の自尊感情尺度を用いた。今回のプロトタイプ２は日本語での自尊感情の向上を目的としているため、実施前だけに測り、参加者の全体的な自尊感情と日本語での自尊感情を比較した。回答は「1. 全くあてはまらない」から「4. 非常によくあてはまる」の 4 件法になっており、それぞれ 10 項目から構成されている [41]。

表 3-5 全体的な自尊感情尺度の質問項目

私には、いいところがたくさんあると思います
全体的に、自分はだめだなあと思う傾向があります
私には、他の人と同じくらい物事がうまくできます
私には、あまり誇れないところがないと思います
私は、自分自身を前向きにとらえています
だいたい、自分に満足しています
もっと自分を尊重できたらいいのに、と思います
ときどき、自分は本当に役に立たないと思います
ときどき、自分は全くだめだと思います
私には、少なくとも他の人と同じくらい価値があると思います

3.3.5 予備調査２の実施結果

第 1 段階の「第二言語での自尊感情を向上させるワーク」の中で参加者の日常生活中での会話を日本語で作成した結果物は図 3-11、作成した日本語の会話文を母国語へ翻訳した結果物は図 3-12、母国語に翻訳した文を日本語に翻訳した結果物は図 3-13 より示す。そして、第二段階の「第二言語の内発的動機づけワーク」の中で“自分がいま日本でできること”をテーマにしたブレインストーミングの結果物は図 3-14、そのブレインストーミングの結果から参加者が選んだ“ファンクラブに入会する”をするために必要な行動を時系列に書き、その行動をスキル化した結果物は図 3-15 より示す。なお、予備実験2で用いた手順書は Appendix の付録資料②に載せている。



1.

Aさん：昨日何を食べた？

私：焼肉の定食を食べた。

Aさん：いいな、私も食べたい。

私：今度一緒に食べに行く。

Aさん：やった！今日の食堂の定食はあいかわらずまずかった。

私：だよね、外の韓国料理食べに行きたい。

Aさん：韓国料理のほうがおいしいね！

私：Threeの秋冬限定のリップ見た？あれがかわいくない？

Aさん：あれかわいいね！でも、すぐ売り切れになってれた

私：そう！私も欲しかった。それもかわいいし、全部売り切れた。
悔しい！早く買えばよかったのに。

Aさん：みんなの行動力が高い！

私：今度の秋冬限定商品何が欲しい？

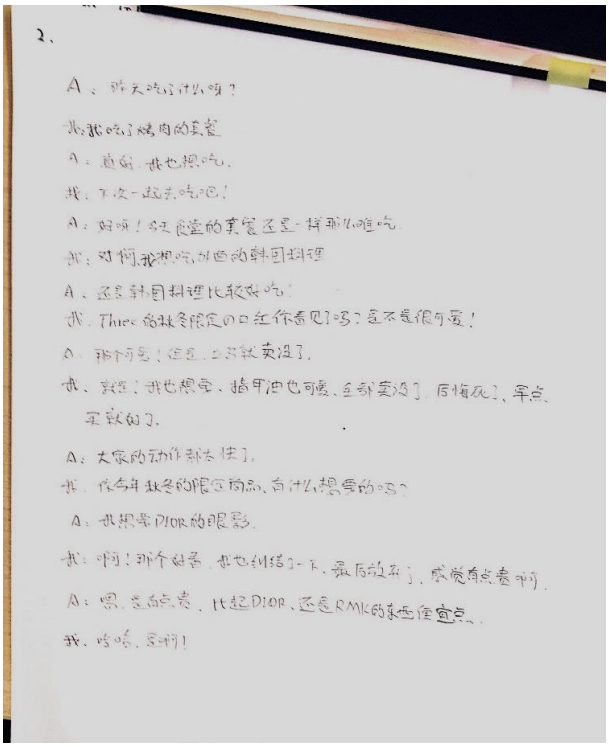
Aさん：私は、DIORのアイシャドウが欲しい！

私：あ！あれかわいい。。私も。ホントだ。でも最後残ってた。
ちょっと高いね！

A：うん！たしかに高い。DIORのものより、やっぱりRMKのほうが本物そうね！

私：そうだね(笑)

図 3-10 日本語による日常会話文作成の結果



2.

A：昨天吃了什么呀？

我：我吃了烤肉的套餐

A：真的，我也想吃。

我：下次一起去吃吧！

A：好呀！好不容易的套餐还是一样那么难吃。

我：对啊，我想吃外面的韩国料理

A：还是韩国料理比较好吃！

我：Three的秋冬限定口红你看见了吗？是不是很可爱！

A：那个可爱！还是，太好卖没了。

我：就是！我也想要，指甲油也可爱，全部卖没了，后悔死了，早点
买就好了。

A：大家的动作都快了。

我：你今年秋冬的限定商品，有什么想要的吗？

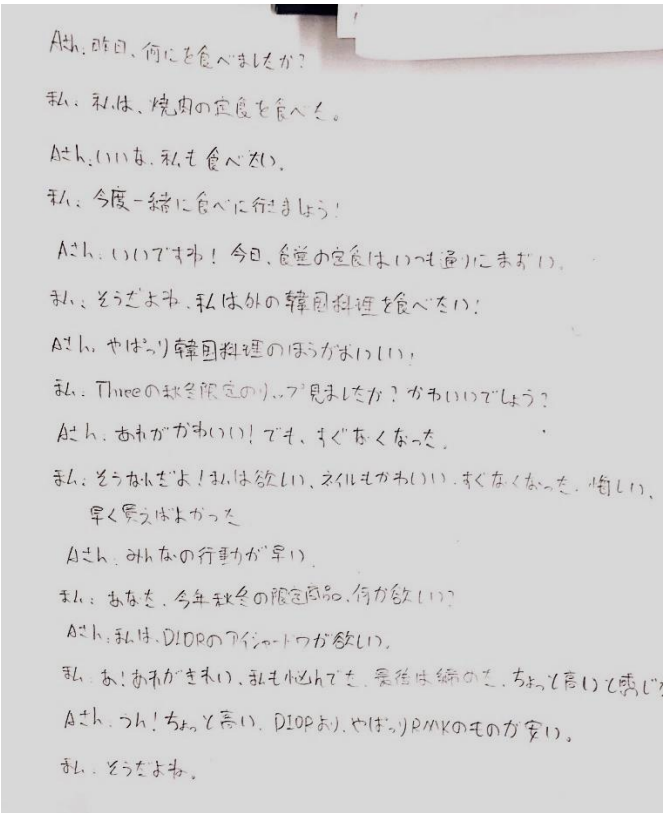
A：我想要DIOR的眼影。

我：啊！那个好看，我也纠结了一下，最后放弃了，感觉有点贵呢。

A：嗯，总的点贵，比起DIOR，还是RMK的东西便宜点。

我：哈哈，是呢！

図 3-11 作成文の母国語への翻訳の結果



Aさん、昨日、何にを食べましたか？

私、私は、焼肉の定食を食べた。

Aさん、いいな、私も食べたい。

私：今度一緒に食べに行きましょう！

Aさん：いいですね！今日、食堂の定食はいつも通りにまずい。

私：そうだよね、私は外の韓国料理を食べたい！

Aさん、やはっり韓国料理のほうがおいしい。

私：Threeの秋冬限定のリップ見ましたか？かわいいでしょう？

Aさん：あれがかわいい！でも、すぐなくなった。

私：そうなんだよ！私は欲しい、ネイルもかわいい、すぐなくなった、悔しい、
早く買えばよかった

Aさん：みんなの行動が早い。

私：あなた、今年秋冬の限定商品、何が欲しい？

Aさん：私は、DIORのアイシャドウが欲しい。

私：あ！あれがきれい、私も悩んでた、最後は諦めた、ちょっと高いと感じ

Aさん：うん！ちょっと高い、DIORより、やはっりPINKのものが安い。

私：そうだよね。

図 3-12 翻訳した文を日本語に翻訳の結果

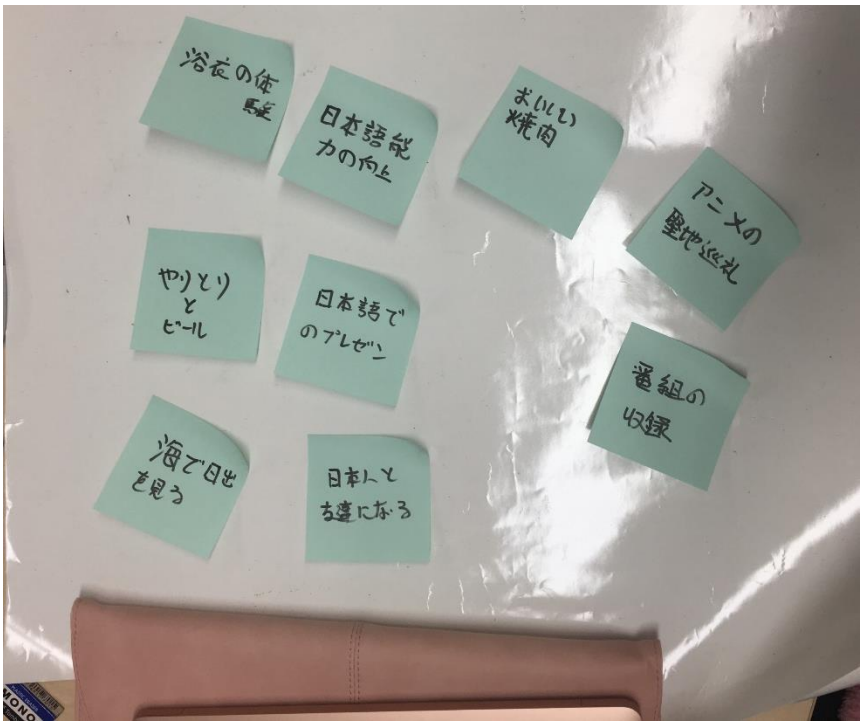


図 3-13 ブレインストーミングの結果

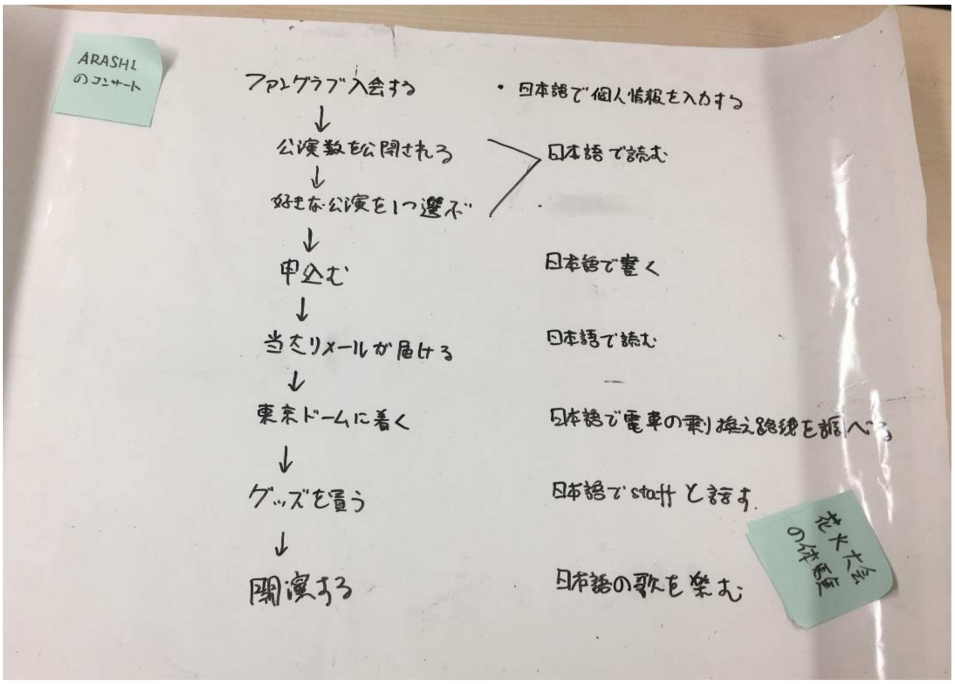


図 3-14 時系列に書く及びスキル化の結果

3.3.6 予備調査２の評価方法

二つの方法による評価を行った。まず、前節で挙げた質問項目の中で平均値の変化が見られたのかを分析していった。人数が少ないことから今回は Excel による分析を行った。次に参加者に対して、インタビューから日本人学生との交流についての変化がみられたかどうかの確認を行った。

3.3.7 予備調査２の評価結果

参加者のアンケートの結果は表 3-6 に示す。まず、第二言語不安（教室外）の軽減や日本語での自尊感情（教室外）の減少に対する影響が示唆された。ただし、日本語不安（教室外）では軽減より増加への影響が示唆された。

表 3-6 参加者のアンケート結果（平均値）

尺度		事前	事後
第二言語不安（教室内外）	第二言語不安（教室内）	3.71	
	第二言語不安（教室外）	3.00	2.71
日本語不安（教室内外）	日本語不安（教室内）	4.00	
	日本語不安（教室外）	3.14	3.45
全体的な自尊感情		2.30	
日本語での自尊感情（教室内外）	日本語での自尊感情（教室内）	2.50	
	日本語での自尊感情（教室外）	2.60	2.40

3.3.8　予備調査２からの考察や限界

予備調査2の目的としては、第二言語不安が留学生の日本人学生の交流の動機づけに関連があるかどうかを確認するために、そして、本研究の提案における仮説を得るために実施した。

まず、予備実験2の参加者は来日歴が約 5 年目であり、日本語能力試験 1 級を持っていたことから日本語によるコミュニケーションができる留学生であった。ただし、第二言語不安や日本語不安においては教室内と教室外の差があり、教室外での不安が教室内での不安より低いことから教室内での日本語の使用に対する不安の方が高いことが考えられた。

また、参加者の全体的な自尊感情や日本語での自尊感情が平均値より高いことからもともと日本語に対する自尊感情は強いことが示唆される。話すことや書くことにおいての自己評定が低いことや聞くことや読むことに対する自己評定が高い。元田（2005）によると教室外では発話不安だけではなく、聴解不安にも注目する必要があると述べている [33]。

今回の予備調査の結果、第二言語不安の軽減が示唆された。

しかし、予備実験2のあとのインタビューの結果、日本人との交流に対する動機づけになってはないというところから来日歴が高い人にとっての第二言語不安は日本人学生との交流においての動機づけとの関係性が低いことが予想される。

そのため、今回の調査により本研究の対象を日本語ができる学部生に定め、第 4 章にて日本語ができる留学生に対象を絞り、インタビュー調査を行うことでより直接的な原因を探ることを目的とする。

ただし、予備調査2においては、参加者が 1 名であることから一般化は難しく、今回の予備調査の結果は 20 代の大学院の女性中国人留学生に限定しての内容であることが示唆される。

3.4 予備調査からの仮説

予備調査1からは偏見を可視化することによる参加者の意識の変化は見られなかった。しかし、直接的な経験と間接的な経験の関係性を確認することができたことや偏見を可視化するにあたって、直接的な経験を可視化するにあたり、シートは一定では有効であったと考えられる。ただし、場面の設定においての工夫が必要であると考えられる。

予備調査2からは日本語がある程度できる人は第二言語不安を感じにくい傾向が見られた。さらに、第二言語不安を感じることになる原因は日本人学生との交流において記憶によるところがみられ、その記憶をいかに変えていくのかが重要であるという仮説を導けた。

そのため、第 4 章のインタビュー調査の際に友人関係における原因帰属をどこにするのかを確認する必要があり、どのようなストレスを感じるかを確認し、友人関係における不満の原因帰属と対人関係におけるストレスの関係性を見ていく。

第4章　在日留学生へのインタビュー調査

第 4 章では、まず、インタビューの目的と概要を述べる。次にインタビューの調査設計について述べ、分析方法や結果を述べ、最後にインタビュー調査からの考察を述べる。

4.1 インタビュー設計

第 3 章で日本語ができる留学生に対象を絞り、第二言語不安が日本人学生との交流への動機づけを減少しているのではないかを確認した。しかし、日本語ができる留学生に対しては第二言語不安の軽減と動機づけへの関係性は少ないと考えられ、日本人学生との交流でストレスを感じてしまった記憶が関係あることが考えられた。その中でもどのように原因帰属を行っているか、そして、その原因になるストレスは何かを確認する必要があった。参加者の募集は他大学の中国人留学生コミュニティに日本語ができて、かつ、日本人学生との交流に悩んでいると思っている留学生を紹介してもらう形で行った。

本インタビューの目的は、在日中国人留学生と日本人学生との交流の実態を調査し、留学生の交流への動機づけが減ってしまった原因を明らかにしたうえで、在日中国人留学生の日本人学生との交流への動機づけの維持への示唆を得ることである。

インタビューは、半構造化面接を用いて行った。なお、インタビューの実施においては、研究科の倫理委員会の申請を行い、協力者の同意の元にインタビューを実施している。インタビューの設計および内容は以下に示す。

インタビューは次の 3 点を考慮した半構造化形式を採用した。

１．日本人学生との交流に興味があるのかどうか

２．できた / できてないと思う理由は何か

３．なぜできた / できなかったと思ったか

本調査は以下のプロセスで実施した。まず、在日中国人留学生の中から日本人学生との交流をしたいけど、やめてしまったと答えた留学生を対象に事前アンケートを実施した上でインタビューを行った。

インタビュー方法は 1 対 1 の個別インタビューを設定し、事前アンケートに 20 分、そして、インタビューは 60 分実施した。

4.2 事前アンケートの設計

インタビューを実施する前にインタビューの協力者の傾向を把握するために、事前アンケートを行った。留学生への事前アンケートの項目は以下の 6 つである。

4.2.1　参加者のデモグラフィックに関する項目

参加者のデモグラフィックの項目は湯（2004）を参照に構成した [42]。性別（男性、女性）、年齢（20

代未満、20～24、25～29 歳、30～34 歳、35 歳以上)、学籍（学部生、研究生、大学院修士課程、大学院博士課程)、専攻（文科系、理科系)、日本での滞在期間（1 年未満、1 年以上 2 年未満、2 年以上 3 年未満、3 年以上)、日本語学校の通学期間（なし、半年、1 年、1 年半、2 年)、日本語能力（自己評価)（日常会話にもまだ困難を感じる、日常会話なら問題なし、ほぼ十分についていける)、日本語関連資格から構成されている。さらに、日本人（学生）と交流したいと思うかに対する質問を「1. まったく思わない」から「5. とてもそう思う」の 5 件法で測っている。日本人の友人・知人や同国の友人・知人の数を聞く項目は、ほとんどいない、1～2 人くらい、3～5 人くらい、5～10 人くらい、10 人以上の 5 項目から構成されている。

4.2.2　対人ストレスコーピング尺度

インタビューの協力者が日本人学生との対人関係においてのストレスをどのように解釈して処理しているのかを確認するために、加藤（2000）の「対人ストレスコーピング尺度」を用いた [43]。本来は 3 件法であるが、本研究では「1.とても当てはまる」～「5.まったく当てはまらない」の 5 件法を採用し、計 34 項目から構成されている。質問表は表 4-1 に示す。ただし、本研究においての対象者が留学生であることから、ネガティブ関係コーピングの下位項目である“相手の鼻を明かすようなことを考えた”は留学生には難しい表現だと判断し、“相手を出し抜こうと考えた”という表現に変えた。

表 4-1　対人ストレスコーピング尺度(加藤、2000)

ポジティブ関係コーピング	ネガティブ関係コーピング	解決先送りコーピング
相手のことをよく知ろうした	かかわり合わないようにした	気にしないようにした
積極的に話をするようにした	話をしないようにした	そのことにこだわらないようにした
積極的にかかわろうとした	友達付き合いをしないようにした	何とかなると思った
この経験で何かを学んだと思った	無視するようにした	あまり考えないようにした
相手の良いところを探そうとした	人を避けた	何もせず、自然の成り行きに任せた
人間として成長したと思った	表面上の付き合いをするようにした	そのことは忘れるようにした
相手を受け入れるようにした	1人になった	こんなものだと割り切った
反省した	相手と適度な距離を保つようにした	自分は自分、人は人と思った
相手の気持ちになって考えてみた	相手を悪者にした	
たくさんの友人を作ることにした	相手の鼻を明かすようなことを考えた	
自分の意見を言うようにした		
これも社会勉強だと思った		
自分の存在をアピールした		
自分のことを見つめ直した		
あいさつをするようにした		
友人などに相談した		

4.2.3　対人的自己効力感尺度

表 4-2 対人的自己効力感尺度

対人的スキルへの自信	友人からの信頼	友人への信頼
私はだれとでも気軽に話せる	友人は自分を必要としてくれている	私にとって友人は頼りになるものだと思う
私はたれとでも仲良くできると思う	友人は私に隠しごとなく、何でも話してくれる	友人と元気をわかちあうことができると思う
初めて会う人にでもうまく自己紹介ができる	友人に何を話しても、理解してくれると思う。	私は友達に素直にありがとうと言える
相手とうまく話しのやり取りができる	私が友人を誘えば一緒に行動してくれると思う	私には心から信頼できる友人がいる
私は同級生だけではなく、先輩後輩ともうまくやっていくことができる		

陳(2011)によると対人ストレスを軽減する要因の一つとして、自己効力感の獲得が必要であるということから、インタビューの協力者の自己効力感を測るために、陳(2011)が用いた「対人的自己効力感尺度」から質問文を作成した [44]。「1. とても当てはまる」 ～ 「5. まったく当てはまらない」の 5 件法を採用し、計 13 項目から構成されている。質問表は表 4-2 に示す。

4.2.4　日本人への信頼感尺度

譚・今野（2012）によると留学生の日本人への信頼と人間関係への満足感は相関関係があることから、譚・今野（2012）の「日本人への信頼感尺度」を用いた［45］。回答は「1. 非常によく当てはまる」 ～ 「6. 全く当てはまらない」の 6 件法を採用し、計 16 項目から構成されている。質問表は表 4-3 に示す。

表 4-3 日本人への信頼感尺度(譚・今野、2012)

日本人への不信	日本人への信頼
過去に、ある日本人に裏切られたりだまされたりしたので、信じるのは怖くなっている	無理をしなくてもこの先の人生でも、私は信頼できる日本人と出会えるような気がする
気をつけていないと、日本人は私の弱みに付け込もうとするだろう	周りのほとんどの日本人は私を信頼してくれているだろう
私はなぜか日本人に対して疑(うたぐ)り深くなってしまう	一般的に、日本人は信頼できるものだと思う
結局、周りの日本人は敵ばかりだと感じる	状況が許せば、たいてい日本人はお互いに正直に、かつ誠実にかかわりあいたいと思っているだろう
日本人は自分のためなら簡単に相手を裏切ることができるだろう	私は多少のことがあってもまわりの日本人と今の信頼関係を保っていけると思う
今は何かと話せても、日本人など全くあてにならないものである	これまでの経験から、日本人もある程度は信頼できると感じる
相手(日本人)が自分を大切にしてくれるのは、そうすることによって相手(日本人)に利益があるときだ	これまでに出会ったほとんどの日本人は私によくしてくれた
今心から頼れる日本人にもいつか裏切られるかもしれないと思う	私は現実に信頼できる特定の日本人がいる

4.2.5 対人ストレス尺度

インタビューの協力者が日本人学生との交流においてどのような対人ストレスを抱え、どのぐらいストレスとして感じているかを測るために用いた。田中（2001）の留学生におけるストレス評定尺度を参照に湯（2004）が作成した「対人ストレス尺度」を用いた［42］。「1．まったく感じない」～「5．非常に感じる」の 5 件法を採用し、計 8 項目から構成されている。質問表は表 4-4 に示す。

表 4-4 対人ストレス尺度(湯、2004)

日本人の曖昧ではっきりしない表現の本当の意味を理解すること
日本人に質問したり、話題に参加しようとしても無視される
日本人学生と親しい人間関係をつくることの難しさ
外国人だということで特別視されること
礼儀が多くて、いつも「すみません」、「ありがとう」などと口にすること
割り勘の習慣
日本人のまじめさ
日本人の冷たい対人態度

4.2.6　友人関係への不満の原因帰属

表 4-5 友人関係への不満の原因帰属（小松、2013）

社会的外的要因	人的内的要因	人的外的要因
周囲の環境が良くないから	自分が努力しなかったから	相手が努力しなかったから
たまたまそうであったから	自分が積極的ではないから	相手が積極的ではないから
文化の違いから		相手の自分に対する態度が良くないから

インタビューの協力者が日本人学生との関係における不満をどのように受け止めているかを測るために用いた。小松（2013）の「友人関係への不満の原因帰属」を用いており、「1. まったく当てはまらない」～「5. とても当てはまる」の 5 件法を採用している。計 8 項目から構成されており、質問表は表 4-5 に示す［22］。

4.3 留学生へのインタビューの分析方法

在日留学生へのインタビューの分析にはオープンコーディングの方法を採用した［46］。今回は在日中国人留学生にインタビューを行ったため、在日中国人留学生とのインタビュー内容の分析を行う。オープンコーディングの手順は以下の通りである（図 4-6）。

ます、手順 1 としては、インタビューした内容の文字起こしを行い、インタビューの逐語記録データから「在日中国人留学生の日本人学生との交流への動機づけ」に関係がある内容を拾い上げた。次の手順で用いる親和図法（KJ 法）のカテゴリー化に使用する視点を決める［47］。ここでは、在日中国人留学生が日本人学生との交流を試みたが、その動機づけが阻害された要因と特定するために、「在日中国人留学生の日本人学生との交流への動機づけを妨げる要因特定」を視点に定めた。

次に、手順 2 として、文字起こしをした内容を Excel に移し、そのコメントを親和図法によって、上記の視点を軸に、同じような意味の内容ごとにカテゴリー化する。

最後に、手順 3 として、カテゴリーに名前を付ける。（総称を「オープンコーディング結果」と呼ぶ）

また、分析結果の信頼性を確保するために、質的調査法を専門とする研究者 1 名に確認し、在日中国人留学生 1 名がカテゴリー結果の確認を行った［48］［49］。

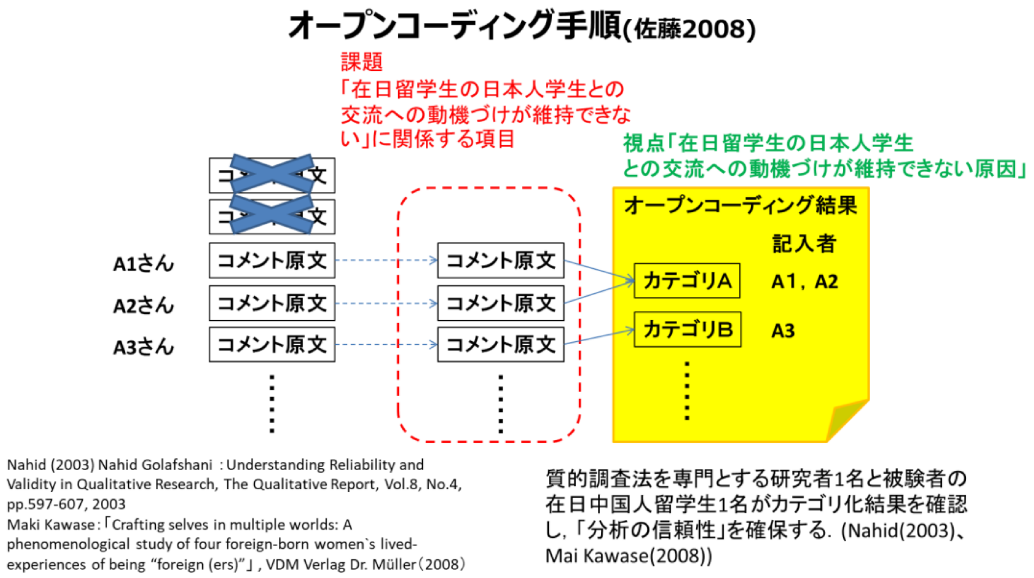


図 4-1 オープンコーディングの手順

出典:Nahid(2003) Nahid Golafshani：Understanding Reliability and Validity in Qualitative Research, The Qualitative Report, Vol.8, No.4, pp.597-607, 2003 と佐藤郁哉(2008):質的データ分析法 原理・方法・実践, 新曜社, pp.97-103, 2008 より筆者が加筆

4.4 留学生へのインタビューの結果

留学生へのインタビュー調査の結果について以下より述べていく。事前アンケートの結果からインタビューの結果の順に考察していき、最後に総合考察を行う。

4.4.1 インタビュー協力者の概要

インタビューの協力者は合計で 7 名であったが、国籍が違う対象者が 1 名、質問事項が違った対象者を除いた 5 名に対しての分析を行った。中国人留学生 5 名に対する情報は表 4-1、4-2 に示す。表 4-1 はインタビュー協力者の属性の中でも国籍、年齢、性別、専攻、学籍、在日歴、日本語学校期間、日本語関連資格をまとめたものであり、表 4-2 は協力者の主観的な日本語能力、日本人との交流意欲、そして、友人関係に関する項目をまとめたものである。

表 4-6 インタビュー協力者の属性

協力者	国籍	年齢	性別	専攻	学籍	在日歴	日本語学校期間	日本語関連資格
A1	中国	20～24 歳	男	理科系	学部生	3 年以上	1 年半	N1
A2	中国	25～29 歳	女	文科系	大学院修士	3 年以上	1 年半	N1
A3	中国	20 代未満	男	文科系	学部生	2 年以上 3 年未満	半年	なし
A4	中国	20～24 歳	男	文科系	学部生	3 年以上	1 年	N1
A5	中国	25～29 歳	女	文科系	大学院修士	2 年以上 3 年未満	なし	N2

表 4-7 インタビュー協力者の主観に対する項目

協力者	あなたの日本語力はどのレベルですか？	日本人（学生）と交流したいと思いますか？	よく連絡を取っている日本人友人・知人は何人いますか？	よく連絡を取っている同国の友人・知人は何人いますか？
A1	日常会話なら問題なし	4	1～2 人くらい	10 人以上
A2	ほぼ十分についていける	4	5～10 人くらい	10 人以上
A3	日常会話なら問題なし	5	1～2 人くらい	ほとんどいない
A4	日常会話なら問題なし	4	３～５人くらい	10 人以上
A5	日常会話なら問題なし	3	3～5 人くらい	５～10 人くらい

4.4.2　事前アンケートの結果

表 4-8 ではインタビュー参加者の事前アンケート結果をそれぞれの項目に対する平均値でまとめたものであり、この中で対人ストレスは協力者全員共通して平均値より高いことから協力者全員が日本人との対人関係においてストレスを抱えていることが分かった。対人ストレスコーピングの項目の中で、ポジティブ関連コーピングに関しては A1,A3,A5 は平均値より高く、A4 は平均値より低い。ネガティブ関連コーピングに関しては A1 は平均値より低く、残りの 4 人は平均値より高かった。解決先送りコーピングに関しては A2,A3,A5 は平均値より高く、A1,A4 は平均値より低い。これらのことから協力者の中で対人ストレスの解決において、ポジティブに解釈する人は A2,A4 であり、ネガティブに解釈する人も A1 以外はいなかった。また、解決を先送りにする人は A1 や A4 であることがわかった。また、友人関係への不満の原因帰属の項目の中で、A1 は全項目に関して平均値より低いことから不満への原因帰属をしていないことがわかり、A2 や A3 は全項目について平均値より高いことから不満への原因帰属を社会に対して、そして、自分や日本人学生にしていることが分かった。A4 は社会的外的要因は平均値より高く、残り2つの項目に関しては平均値より低いことから原因帰属を社会にしていることがわかった。A5 は社会的外的要因は平均値より低く、残り2つの項目に関しては平均値より高いことから、原因帰属を社会ではなく、自分と日本人学生にしていることが分かった。

表 4-12 で示すように対人ストレスの中で平均値が高かった項目は「日本人ははっきりしない表現の、本当の意味を理解すること」、「日本人学生と親しい人間関係をつくることの難しさ」、「外国人だということで特別視されること」、「礼儀が多くて、いつもすみません、ありがとうなどと口にすること」、「日本人の真面目さ」、「日本人の冷たい対人態度」の 6 項目であったことから、協力者は日本人と親しい人間関係をつくることに難しさを感じており、日本人のはっきりしない表現や礼儀、真面目さ、冷たい対人態度、そして、外国人として特別視されていることにストレスを感じていることが分かった。

表 4-13 で示すように「文化の違いから」の項目に関しては参加者全員平均値より高いことから、協力者は文化の違いを不満の原因として考えていることがわかった。表 4-14 で「自分が努力しなかったから」に関しては A4 以外は平均値より高く、「自分が積極的ではないから」に関しては A1 や A4 以外は平均値より高いことから A2,A3,A5 は交流において自分の行動にも原因があると考えているが、A1,A4 は考えていないことが分かった。

また、表 4-15 で示すように「相手が積極的ではないから」の項目に関しては参加者全員平均値より高いことから、協力者は日本人学生の積極的ではない態度を不満の原因として考えていることがわかった。なお、対人的自己効力感や日本人への信頼感に関しては大きな特徴がみられなかったため、詳細を付録③に添付している。

インタビューの協力者の事前アンケート結果に対する考察は以下の順で行う。まず、全体的に共通してみられる特徴について考察を行い、インタビューとのつながりについて述べていく。

まず、インタビューの協力者は全員 2 年以上日本に滞在しており、1 人を除いては全員日本語学校を通ってから今現在の大学もしくは大学院に入学している。また、日本語能力に関しては全員が日常会話なら問題なし、もしくは、ほぼ十分ついていけるレベルと判断しており、日本語関連資格も日本語能力試験 2 級以上を持っていることから日本語のレベルでは日常会話では問題ないと考えられる。

対人ストレスは 1 人を除いて全員平均値より高いことから日本人との対人関係におけるストレスを抱えてい

ることが言えると考える。対人ストレスコーピング尺度の中でのポジティブ関係コーピングや解決先送りコーピングが低い人が多い中、対人ストレスは共通して高いため、ストレスコーピングができているといって必ずしも対人ストレスが緩和されるとは言えないと考えられる。

これらの結果からみられるインタビュー対象者の共通した特徴としては、日本人学生との交流において対人ストレスを抱えており、友人関係への不満の原因を文化の違いや相手の積極的ではない態度から考えていることから、これらの特徴に注目し、インタビューを実施した。

ただし、協力者 A1、A2 の日本人への信頼で項目1つに対して抜けている。事前に行ったアンケートでぬけがあったためであるため、協力者 A1,A2 の日本人への信頼性に対する項目の信頼性は欠けている。

表 4-8 参加者のアンケート結果（平均値）

A1

対人的ストレスコーピング尺度	ポジティブ関係コーピング	3.1
	ネガティブ関係コーピング	2.2
	解決先送りコーピング	2.0
対人的自己効力感	対人的スキルへの自信	3.4
	友人からの信頼	5
	友人への信頼	3.5
日本人への信頼感	日本人への不信	4.75
	日本人への信頼	3.71
対人ストレス		3.4
友人関係への不満の原因帰属	社会的外的要因	2.0
	人的内的要因	2.0
	人的外的要因	2.0

A2

対人的ストレスコーピング尺度	ポジティブ関係コーピング	2.5
	ネガティブ関係コーピング	4.0
	解決先送りコーピング	3.1
対人的自己効力感	対人的スキルへの自信	3.1
	友人からの信頼	3.6
	友人への信頼	1.25
日本人への信頼感	日本人への不信	4.00
	日本人への信頼	3.14
対人ストレス		4.3
友人関係への不満の原因帰属	社会的外的要因	4.33
	人的内的要因	4.0
	人的外的要因	4.5

A3

対人的ストレスコーピング尺度	ポジティブ関係コーピング	2.6
	ネガティブ関係コーピング	3.8
	解決先送りコーピング	2.9
対人的自己効力感	対人的スキルへの自信	2.2
	友人からの信頼	2.25
	友人への信頼	3.5
日本人への信頼感	日本人への不信	3.63
	日本人への信頼	2.29
対人ストレス		3.9
友人関係への不満の原因帰属	社会的外的要因	3.0
	人的内的要因	4.33
	人的外的要因	4.0

A4

対人的ストレスコーピング尺度	ポジティブ関係コーピング	2.4
	ネガティブ関係コーピング	4.0
	解決先送りコーピング	2.1
対人的自己効力感	対人的スキルへの自信	2.2
	友人からの信頼	2.25
	友人への信頼	1
日本人への信頼感	日本人への不信	5.88
	日本人への信頼	1.86
対人ストレス		3.0
友人関係への不満の原因帰属	社会的外的要因	3.67
	人的内的要因	1.67
	人的外的要因	2.0

A5

対人的ストレスコーピング尺度	ポジティブ関係コーピング	2.8
	ネガティブ関係コーピング	4.2
	解決先送りコーピング	2.9
対人的自己効力感	対人的スキルへの自信	3.4
	友人からの信頼	2.0
	友人への信頼	2.25
日本人への信頼感	日本人への不信	6.0
	日本人への信頼	3.43
対人ストレス		3.5
友人関係への不満の原因帰属	社会的外的要因	2.33
	人的内的要因	2.67
	人的外的要因	3.0

表 4-9 インタビュー参加者の対人ストレスコーピング（ポジティブ関係コーピング）結果

協力者	A1	A2	A3	A4	A5
相手のことをよく知ろうとした	5	3	3	1	2
積極的に話をするようにした	3	2	3	2	4
積極的にかかわろうとした	1	4	4	2	4
この経験で何かを学んだと思った	4	3	3	1	2
相手の良いところを探そうとした	5	3	3	3	2
人間として成長したと思った	3	2	2	2	2
相手を受け入れるようにした	3	2	2	2	3
反省した	1	3	3	4	1
相手の気持ちになって考えてみた	3	2	4	2	4
たくさんの友人を作ることにした	4	3	2	3	5
自分の意見を言うようにした	3	4	3	4	3
これも社会勉強だと思った	3	1	2	1	1
自分の存在をアピールした	3	2	2	2	5
自分のことを見つめ直した	1	2	3	1	1
あいさつをするようにした	2	1	1	3	5
友人などに相談した	5	3	2	5	1

表 4-10 インタビュー参加者の対人ストレスコーピング（ネガティブ関係コーピング）結果

協力者	A1	A2	A3	A4	A5
かかわり合わないようにした	2	4	3	4	3
話をしないようにした	1	4	4	4	1
友達付き合いをしないようにした	2	4	3	5	5
無視するようにした	2	5	4	5	3
人を避けた	4	4	3	4	5
表面上の付き合いをするようにした	2	3	3	2	5
1人になった	1	4	4	4	5
相手と適度な距離を保つようにした	1	3	4	2	5
相手を悪者にした	3	5	5	5	5
相手の鼻を明かすようなことを考えた	4	4	5	5	5

表 4-11 インタビュー参加者の対人ストレスコーピング（解決先送りコーピング）結果

協力者	A1	A2	A3	A4	A5
気にしないようにした	1	4	3	4	3
そのことにこだわらないようにした	1	3	2	1	1
何とかなると思った	3	2	2	1	2
あまり考えないようにした	2	3	3	1	4
何もせず、自然の成り行きに任せた	2	3	2	5	4
そのことは忘れるようにした	4	2	3	1	4
こんなもんだと割り切った	1	3	4	3	4
自分は自分、人は人と思った	2	5	4	1	1

表 4-12 インタビュー参加者の対人ストレス結果

協力者	A1	A2	A3	A4	A5
日本人ははっきりしない表現の、本当の意味を理解すること	4	5	4	4	2
日本人に質問したり、話題に参加しようとしても無視される	4	3	3	1	1
日本人学生と親しい人間関係をつくることの難しさ	5	4	5	4	3
外国人だということで特別視されること	3	4	4	3	3
礼儀が多くて、いつも「すみません」「ありがとう」などと口にすること	2	4	3	3	5
割り勘の習慣	1	5	3	2	5
日本人のまじめさ	3	5	5	4	5
日本人の冷たい対人態度	5	4	4	3	4

表 4-13 インタビュー対象者の友人関係への不満の原因帰属（社会的外的要因）結果

協力者	A1	A2	A3	A4	A5
周囲の環境がよくないから	1	5	2	3	1
たまたまそうであったから	1	3	3	4	2
文化の違いから	4	5	4	4	4

表 4-14 インタビュー対象者の友人関係への不満の原因帰属（人的内的要因）結果

協力者	A1	A2	A3	A4	A5
自分が努力しなかったから	3	4	5	1	3
自分が積極的ではないから	2	4	5	2	4

表 4-15 インタビュー対象者の友人関係への不満の原因帰属（人的外的要因）結果

協力者	A1	A2	A3	A4	A5
相手が努力しなかったから	1	4	4	1	3
相手が積極的ではないから	3	5	4	3	3

4.4.3 インタビューの結果

インタビューの逐語記録データをオープンコーディングで分析した結果、5つの親和グループに分類された。グループの名前が導かれた理由やその詳細は以下より示す。なお、分析の結果については、質的研究調査の専門家１名に手順と親和図法の確認をしてもらい、さらに、在日中国人留学生１名に親和図法の確認をし

てもらい、質的評価の信頼性を確保した。

1. 留学生の日本語に対する自信のなさ

A1「母語じゃない言語で話すときはすごく自信が失っていきます。」、A3「自分の想像と比べて、日本人学生と話しかけの難しさが全然違う」、A4「たとえば、あざーすとか若者言葉全然、聞き取れなかったので、その時には確かに、めちゃくちゃ挫折しました」、A5「自分が本当に言いたいことを日本語で私だったら難しいので。でも、普通の日常の話はできるけど、詳しく自分の言いたいことを伝えることは難しいです」などの生データから、教室内で勉強した日本語と実際の日本人と話した時に使う日本語の乖離や話したいことが言えないことに対する不安が考えられたため、「留学生の日本語に対する自信のなさ」という親和グループを導出した。

２． 日本人の留学生に対する興味なし

A1「先輩たちが、僕に、興味、すごく興味を示さなかったです」、A2「向こうはたぶん、私が、たぶん、日本人があまり留学生と友達になりたくないから。私もそんなに積極的に話かけたくない」、A3「中国人への関心を示せることとか」などの生データから、日本人学生が留学生に対しての関心や興味がないことを留学生が感じていることが考えられたため、「日本人の留学生に対する興味なし」という新和グループを導出した。

3. 留学生と日本人学生の接触場面の少なさ

A1「僕の場合はアルバイトもしてないし、あの大学入る前は日本人と直接話すチャンスは少なかったんですね」、A2「学校で日本人学生と話す機会が少ないからあまり話す時間がない」、A3「授業が終わったらみんなバラバラ」、A4「学校では周りに中国人の留学生が多いので、日本人の学生はあたしの周りにあまり多くないです」などの生データから留学生と日本人学生が学校内、もしくは、入学前から日本人や日本人学生と接触する場面が少ないことが考えられたため、「留学生と日本人学生の接触場面の少なさ」という親和グループを導出した。

4. 曖昧な表現に対する解釈の違い

A1「日本人はすごく礼儀正しい。すごくいいことですけど、逆に礼儀が正し過ぎて、何を考えているのかがわからないです」、A2「誰にも（日本語の間違いを）言われなかった。間違っても何も言われなかった」、A3「嫌な話をしても、女性たちが全然気にしていない、全然大丈夫だよと韓国人と中国人は絶対どんな話がすごくいやか自分が気に入らないか話言うから。友達になってもちょっと距離感を持っている、これほども友達になったからまだ本当の友達にもならないから。なれないから」、A4「距離感が本当にもう。距離感だけでこの人が東京の人がどうか判断する。すぐ判断できると思います。礼儀の正しさとかあと、ツッコミとかするときに、東京の人だったら大体そういうあたったり、触ったりする話だけをするので。そういう感じですかね。」などの生データから在日中国人留学生は日本人の接し方について礼儀正しいと認識をしており、それを良い意味で解釈をする反面、悪い意味でも解釈をしている。間違いを言わないことやいやだと思うことを言わないといったネガティブなことを直接的に話さないことを礼儀正しいと判断する反面、それによって日本人の本心を読むことができなく、距離感を感じると考えたため、「曖昧な表現に対する解釈の違い」という親和グループを導出した。

5. 学校内の同国人のコミュニティの充実さ

A3「あと周りが中国人がいると、中国人と友達になりやすいからそんなに日本人と友達になる必要がない」、A4「なぜかというと人数が多すぎるからです。中国人人数が多すぎるからです。そもそもなんもしなくても自然に中国人のグループに参加できる、グループが生まれますので、わざわざ日本人スタイルになる必要がないと思います」などの生データから、学校内に同国の人が多く、そこのコミュニティに入ることで学校内の生活ができることから日本人との交流への必要性を感じないと考えたため、「学校内の同国人のコミュニティの充実さ」という親和グループを導出した。

以下より、協力者別のコーディング結果（親和図の出現回数）を示し、それぞれについて考察していく。

A1 は、「留学生の日本語に対する自信のなさ」は出現回数4回であった。「日本人の留学生に対する興味なし」は出現回数7回であった。「留学生と日本人学生の接触場面の少なさ」は出現回数1回であった。「曖昧な表現に対する解釈の違い」の出現回数は6回であった。「学校内の同国人のコミュニティの充実さ」の出現回数は0回であった。

A1 は、事前アンケートの中でも「対人的自己効力感」が全体的に低く、もともとうつ病の傾向があることから対人関係において敏感であることが影響していると考えられる。さらに、“ないがしろにされたくない”という表現を使っていたことやネガティブ関係コーピングが参加者の中で一番高かったことから、人間関係に対して敏感であると考えらえる。A1 のオープンコーディングの結果は表 4-16 に示す。

「学校内の同国人のコミュニティの充実さ」が 0 回であった理由としては、A1 さんが大学内で中国人留学生コミュニティを率いていることから言及しなかったと考えられる。

A2 は、「留学生の日本語に対する自信のなさ」は出現回数1回であった。「日本人の留学生に対する興味なし」は出現回数5回であった。「留学生と日本人学生の接触場面の少なさ」は出現回数2回であった。「曖昧な表現に対する解釈の違い」の出現回数は4回であった。「学校内の同国人のコミュニティの充実さ」の出現回数は1回であった。

A2 のオープンコーディングの結果は表 4-17 に示す。

A3 は、「留学生の日本語に対する自信のなさ」は出現回数4回であった。「日本人の留学生に対する興味なし」は出現回数2回であった。「留学生と日本人学生の接触場面の少なさ」は出現回数2回であった。「曖昧な表現に対する解釈の違い」の出現回数は10回であった。「学校内の同国人のコミュニティの充実さ」の出現回数は0回であった。

A3 は、大学内で中国人留学生との交流を意図的にせず、別の国籍の留学生との交流を試みていたため、「学校内の同国人のコミュニティの充実さ」が 0 回だった理由だと考えられる。A3 のオープンコーディングの結果は表 4-18 に示す。

A4 は、「留学生の日本語に対する自信のなさ」は出現回数2回であった。「日本人の留学生に対する興味なし」は出現回数1回であった。「留学生と日本人学生の接触場面の少なさ」は出現回数0回であった。「曖昧な表現に対する解釈の違い」の出現回数は3回であった。「学校内の同国人のコミュニティの充実さ」の出現回数は5回であった。

A4 は日本人との交流の動機づけができてないわけではないが、接する日本人に合わせて自分を変えてお

り、日本人スタイルで来た時にはそれに合わせて対応すると答えていた。そのため、「留学生と日本人学生の接触場面の少なさ」が 0 回だった理由だと考えられる。A4 のオープンコーディングの結果は表 4-19 に示す。

A5 は、「留学生の日本語に対する自信のなさ」は出現回数1回であった。「日本人の留学生に対する興味なし」は出現回数0回であった。「留学生と日本人学生の接触場面の少なさ」は出現回数3回であった。「曖昧な表現に対する解釈の違い」の出現回数は0回であった。「学校内の同国人のコミュニティの充実さ」の出現回数は0回であった。

A5 は基本的に日本人との交流について興味があるあけではなく、日本人との交流を避けているわけではなかった。そのため、「日本人の留学生に対する興味なし」、「曖昧な表現に対する解釈の違い」、「学校内の同国人のコミュニティの充実さ」が 0 回だった理由だと考えられる。A5 のオープンコーディングの結果は表 4-20 に示す。

表 4-16 オープンコーディングの結果 A1

A1	件数
留学生の日本語に対する自信のなさ	4
日本人の留学生に対する興味なし	7
留学生と日本人学生の接触場面の少なさ	1
曖昧な表現に対する解釈の違い	6
学校内の同国人のコミュニティの充実さ	0

表 4-17 オーピンコーディングの結果 A2

A2	件数
留学生の日本語に対する自信のなさ	1
日本人の留学生に対する興味なし	5
留学生と日本人学生の接触場面の少なさ	2
曖昧な表現に対する解釈の違い	4
学校内の同国人のコミュニティの充実さ	1

表 4-18 オープンコーディングの結果 A3

A3	件数
留学生の日本語に対する自信のなさ	4
日本人の留学生に対する興味なし	2
留学生と日本人学生の接触場面の少なさ	2
曖昧な表現に対する解釈の違い	10
学校内の同国人のコミュニティの充実さ	0

表 4-19 オープンコーディングの結果 A4

A4	件数
留学生の日本語に対する自信のなさ	2
日本人の留学生に対する興味なし	1
留学生と日本人学生の接触場面の少なさ	0
曖昧な表現に対する解釈の違い	3
学校内の同国人のコミュニティの充実さ	5

表 4-20 オープンコーディングの結果 A5

A5	件数
留学生の日本語に対する自信のなさ	1
日本人の留学生に対する興味なし	0
留学生と日本人学生の接触場面の少なさ	3
曖昧な表現に対する解釈の違い	0
学校内の同国人のコミュニティの充実さ	0

4.5 留学生へのインタビューからの全体考察および限界

今回のインタビュー調査の対象者の傾向は、日本人学生との交流において対人ストレスを抱えており、友人関係への不満の原因を文化の違いや相手の積極的ではない態度から考えていることであった。そして、インタビューの結果から「留学生の日本語に対する自信のなさ」、「日本人の留学生に対する興味なし」、「留学生と日本人学生の接触場面の少なさ」、「曖昧な表現に対する解釈の違い」、「学校内の同国人のコミュニティの充実さ」の5つの要因の抽出ができた。

この結果の中から今回の対象者の原因帰属の中で平均値が高かった「文化が違うから」と「曖昧な表現に対する解釈の違い」に関連があると考える。

たとえば、田中(1992)は在日留学生の対人行動上の困難において、「感情や機嫌を損ねずに調和を保つ工夫としての表現の間接性」を抽出しており、とくに、漢字圏の留学生および西欧・中南米の留学生がこの「間接性」を困難として指摘していることから今回の結果とも一致していると考えられる [8]。小松(2013)は在日中国人留学生が日本人との交流に関する体験の否定的認識の中でどのような要因が友人関係への不満感をもたらすかを検討している。119 名の留学生を対象に質問紙調査を行い、「友人関係満足度」に『被差別感』、『交流不全』が影響を及ぼしていると述べており、その中でも『交流不全』は“微妙なニュアンスを伝えたり理解することができないなど満足なコミュニケーションができないと感じている状況への否定的認識”であると述べている [50]。つまり、お互いのニュアンスの違いによって、満足なコミュニケーションが取れないことによ

り、留学生側否定的な認識をとることがあることが示唆される。

今回のインタビュー調査から見られた傾向は日本人学生の「感情や機嫌を損ねずに調和を保つ工夫としての表現の間接性」を中国人留学生が“礼儀”として捉えており、それを礼儀正しい行動として捉えている点である。田中（1992）は間接性と礼儀を別の枠として捉えていたが [8]、本研究のインタビュー調査においての留学生は両方を同じものとして捉えていることが見られた。

これは上原 et.al(2011)が述べている友情観にも通じており、日本人と中国人留学生の友情観を比較した結果、日本人は友人関係の社会的距離が大きく、相手を気遣い迷惑をかけない傾向を示す一方、中国人は友人関係が最も社会的距離が近く、あまり礼儀を重視せずに信頼感を持って、相手の面目に配慮しながら率直な意見表明をする傾向があると述べている。中国人留学生は友人関係においての社会的距離感が近いことを友人関係における礼儀として捉えており、日本人学生は社会的距離感を遠くもつことが友人関係における礼儀として捉えていることを示唆している [28]。

Meyer（2014）は一般的なコミュニケーションにおける各国の相対的なコンテクストへの依存度合いをまとめており、その中で中国、日本は両方ともハイコンテクスト文化として分類されている [51]。庄藝(2007)は日系企業での日本人管理者と中国人管理者の間の異文化コミュニケーションに着目し、中国、日本ともにハイコンテクストであることから言葉が通じてもコミュニケーションがうまくとれていないと述べており、そのためにはお互いの文化・慣習・価値観を尊重しながら信頼関係を築くことが重要だと述べている [52]。

留学生にとっての対人関係問題は、ストレス要因であると考えられており、その理由としては日本人は日本語ができる外国人に対して、日本の思考様式・価値観・人間関係におけるコミュニケーションを理解している、理解すべきであると考えている傾向があるからだと言われており、この傾向からそのような違いが生まれたと考えられる [12]。つまり、お互いがハイコンテクスト文化であることから、よりお互いの文化・慣習・価値観を尊重する必要性が生じるが、日本語ができるから日本のことをよく知っていると考えてしまう傾向が日本人にあり、そのことが原因となって、益々留学生と日本人学生の交流における溝が深まることが考えられる。

「留学生の日本語に対する自信のなさ」に対しては出現回数が少なく、その理由としては参加者が日常会話ができる日本語の実力を有しており、日本語能力試験の資格も持っていることからだと考えられる。つまり、日本語に対する不安は日本語能力の上昇によって、緩和できるため、留学生の日本人学生との交流における動機づけの最初の段階では影響があると考えられるものの、それが続いて影響しているとは言い難いのではないかと考えられる。

「学校内の同国人のコミュニティの充実さ」に対しては、同国人とのコミュニティは必ずしも悪い影響を与えるわけではなく、Bochner et al.(1977)によると同国からの留学生との交流は自分化の価値観を共有する機能をもち、それは留学生に対しての情緒的サポートになると述べていることから [53]、今回の提案には難しいと考えられる。

「留学生と日本人学生の接触場面の少なさ」はすでに先行研究でも同様の結果が示されており、そのためには学校組織による介入が必要になるが、留学生センターの拡充が必要になるため [4]、これらの実現の提案は難しいと考えられる。

これらのことから今回の提案は曖昧な表現に着目し、それに対する提案を行う。

今回のインタビュー調査における限界は以下のようなものである。まず、インタビューの調査方法において

の限界である。インタビューは日本語によって行われたため、すでに日本を理解しており、たぶんある程度の好意を持って学んできた人たちだと思われることである。また、インタビューでは日本語を中心に行ったため、より深いところまでは聞けなかった。

次に、インタビュー調査の対象者が 5 人であることから一般化はできない。今回の結果は対象が年齢が 20 代の男性の学部生および女性の大学院生であったため、その対象にとっての可能性だけを示している。

ただし、今回の研究の意義としては、戦（2007）が述べているように中国人と日本人学生の親密な交流関係における文化的相違に対する考え方を質的調査を用いて解釈できたことである [54]。

第5章　提案の設計

第 4 章で留学生の日本人学生との交流における動機づけに“曖昧な表現に対する解釈の違い”があることが明らかになった。曖昧な表現に対しては先行研究でも触れていることから留学生と日本人学生の阻害要因であると考えられ、そのあいまいな表現に対して留学生が日本人との交流への動機づけが低下していることが明らかになった。

そのため、本研究では、留学生の日本人学生の曖昧な表現に対しての解釈を変える方法として、「ワークショップ」を設計し、その効果を測定することとした。

5.1 「ワークショップ」のコンセプト

「ワークショップ」を設計するにあたって、以下の3点をコンセプトとして設定した。

今回のワークショップにおいては留学生の“曖昧な表現に対する解釈”の認知を変えることを目的とする。これは Byram(1997)の異文化間能力においての“文化間の解釈”と類似しているため、そちらを参考にして設計した。文化間の解釈において必要なのは“Interpreting things from other cultures”“Comparing them to own culture”“developing new perspectives through comparison and contrast”が必要であり、この中でも“Comparing them to own culture”を中心に行った [55]。

(1)　日本人学生との交流をする際にコミュニケーションで苦労した場面を出すこと

留学生が日本人学生との交流において苦労した場面は数多く存在しており、それに関係がある要因が多いことから、一つの原因に焦点を当てさせるために予備調査1で使用したシートを用いた。その理由は今回のワークの結果を日本人学生との交流に結びつけるために使用したのである。

(2)　日中の共通の場面を見せることによって比較させること

Byram（1997）が述べている Comparison them to own culture のために、日本と中国の“曖昧な表現を使う場面”を見せることにした。その理由は日本でも中国でも同じく“曖昧な表現を使う場面”があることを見せることによって、参加者に比較する機会を与えることを目的とする。なお、できるだけ同じ場面を見せることが重要であると考えたため、今回は筆者が動画を撮影し、それを用いることにする。動画の撮影に関しては提案内容の設計より述べる。

(3)　母国で自分が同じことをした場面を想起させること

参加者が日本と中国の同じ場面を見ることによって母国にも同じことが起きることを考えることができた。そのあとに、自分も同じことをしたことを思い出してもらうことによって、日本人学生との交流においての認知が変わるのではないかという仮説のもと行った。

5.2 提案内容の設計

5.2.1　準備段階

(1)前日までの準備から(2)当日実施前の準備の順に詳細を示す。

(1) 前日までの準備

① 参加者の募集

ワークショップを実施する 1 週間前に参加者の募集を行った。今回の対象者は日本人学生との交流において悩みを持っている留学生を意識しながら募集している。募集方法は他大学のコミュニティに募集内容を送り、募集を行った。

② 動画の準備

日中の共通場面を見せることによって、日本や中国関係なく曖昧な表現があることを認識させることを目的としている。そのため、同じ場面を設定する必要があり、全く同じ場面の動画を探すのは時間がかかるため、本研究においては筆者が作成を行った。手順は以下の通りである。

1） 筆者が曖昧な場面を任意的に設定し、中国人留学生にその内容が中国でもあるのかを確認する。
2） 中国人留学生に内容を修正してもらい、その内容に沿って演じてもらう。
3） 演じた内容を動画で撮る。
4） 演じてもらった中国人留学生に、中国でよくある場面であるかどうか、曖昧な表現になっているかどうかを確認する。
5） 動画を見ながら使った言葉をスクリプトとして作成する。(図 5-1 参照)
6） スクリプトを和訳し、その内容を日本人学生に確認してもらい、日本的な表現になっているかどうかを確認する。
7） 表現だけを変え、同じ場面を日本人学生に演じてもらい、その様子を動画で撮る。
8） 日本の動画を見て、スクリプトにまとめる(図 5-2 参照)。
9） 日本語の動画に字幕を入れる。

A：哎，辛苦了，你看工作做得差不了，要不咱们周末和公司同事们一块聚个会喝点酒，大家一起热闹热闹

B：周末？周六还是周日？

A：周六吧？

B：晚上啊？

A：是的，同事们都去，你也一定要参加一下。

B：啊，周六下午刚好要去见一个客户，不知道还不来的急。这样吧，只能先帮我占个位。能否去的了还说不定，能去的话我一定去

A：你还是尽量来吧，大家都来，你不来不合适，

B：现在也说不太清楚，这样，拜托你占个位子

A：哦，好的，那我明白了

図 5-1 中国バージョン動画のスクリプト

A:お疲れ様です。仕事も大体終わったと思うので、週末一緒に飲みにでも行きませんか

B:良いお誘いありがとうございます。週末、土曜日、日曜日どっちですか？

A:土曜、土曜日ですね

B:夜？ということですね？

A:夜、ぜひお願いします。

B:なるほど。土曜だと一応クライアントに会う予定があります。で、それが終わったら行きます。で、間に合うかどうかちょっと保証ができない。ただ、行くつもりではあるので、席だけは残してください。ただ、万が一間に合わなかったら申し訳ないです。

A: ありがとうございます。了解です。

図 5-2 日本バージョン動画のスクリプト

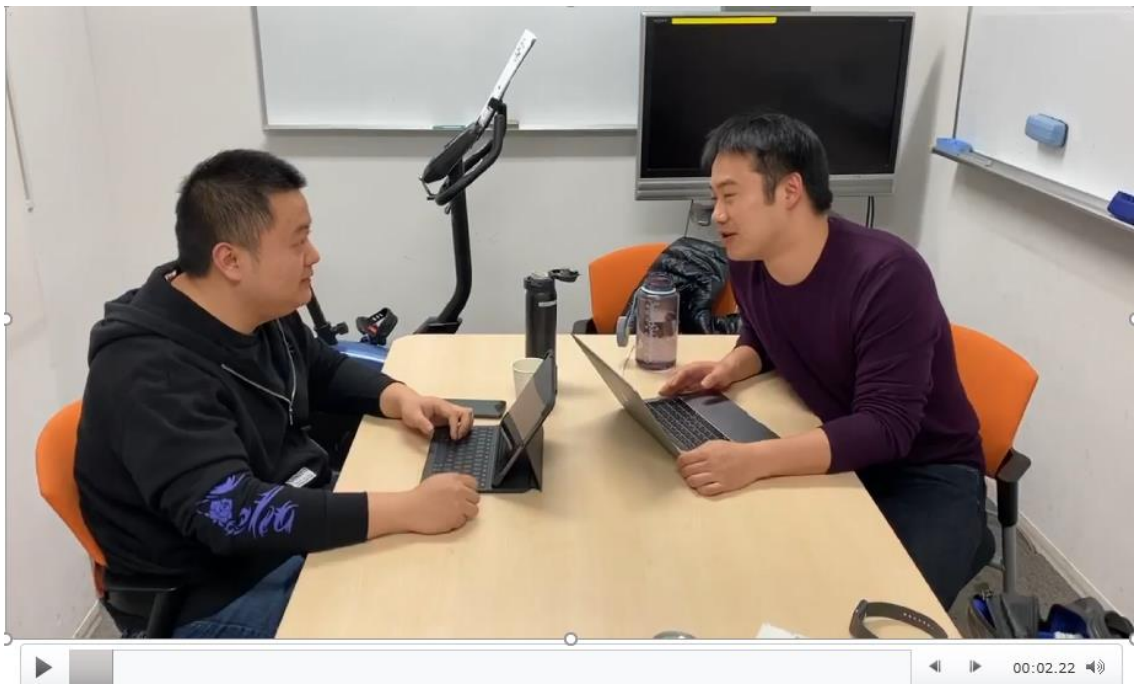


図 5-3 中国人バージョンの動画

図 5-4 日本人バージョンの動画

③ 物品の準備

以下の表 5-1 の物品を準備する。

表 5-1 実験に使う備品

番号	物品名	数量	備考
1	付箋紙	班ごとに 1 本	
2	思い出しワーク用シート	参加者×1 枚	A4サイズで印刷する
3	消せる紙	班ごとに 2 枚	付箋紙を張れる場所が確保できれば、消せる紙ではなくても良い
4	パソコン	ファシリテーター1 台	
5	プロジェクター	1 台	進行用スライドを表示・投影するために用いる。
6	進行用スライド	1つ	添付資料③のようなワークショップ進行用のスライドを用意する

(2) 当日開始前の準備

①会場づくり

会場の机と椅子をグループワークができるように設置する。また、参加者が進行用のスライドを見れるように、司会者用のパソコンとプロジェクターを設置する。

②物品の配置

グループに必要なものを机に設置する。

5.2.2 ワークショップの流れ

本節は、ワークショップの流れについて述べる。以下の図 5-5 のように4段階に分けている。

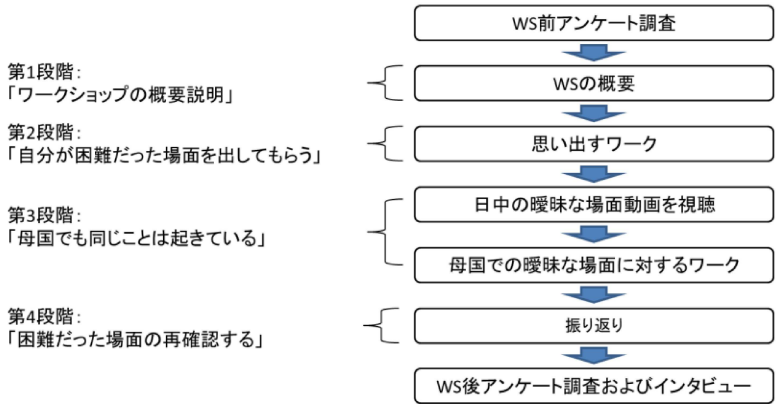


図 5-5 ワークショップの流れ

（1）第一段階 「ワークショップの概要説明」

① ワークショップの概要（5 分）

ファシリテーターの自己紹介、今回ワークショップの概要、ワークショップの流れの説明および時間配分や注意事項などを用意したパワーポイント資料で説明した。

② 自己紹介（5 分）

ワークショップに参加した参加者同士の自己紹介をしあう。

（2）第二段階 「自分が困難だった場面を出してもらう」

予備調査1で使用したシートの書き方の説明や書いてほしい内容に対するテーマの説明を行った。
シートで書いてもらったテーマは“今まで日本人学生との交流をするときに、困難だった時”に設定し、それについて書いてもらった。

（3）第三段階 「母国でも同じことは起きている」

① 動画の視聴（5 分）

筆者が作成した動画を日本人バージョンの動画、中国人バージョンの動画の順に参加者に見せる。
そして、視聴が終わったあとに、動画の共通点について話してもらう。

② 母国（中国）における曖昧な場面のブレインストーミング（20 分）

ブレインストーミングのやり方やルールについての説明を行ったあと、2つのテーマについてのブレインストーミングを実施した。まずは、“中国で自分のために曖昧な表現を使ってしまったときはありますか？”というテーマで次は“中国で他人のために曖昧な表現を使ってしまったときはありますか？”というテーマで実施した。

（4）第四段階 「困難だった場面の再確認する」

2 段階で書いてもらったシートの再確認し、ワークの前後でどのように変わったのかについて参加者が個々人で考える。

5.3 アンケートおよびインタビューの設計内容

プロトタイプの効果を明らかにするために、プロトタイプの実施前、実施後の合計 2 回のアンケート調査を実施し、プロトタイプの実施による意識変化を測った。プロトタイプに対する設計と分析について以下で述べる。

質問項目は、以下の４つである。

① 参加者の属性に関する項目

② 自律的動機づけ尺度

③ 対人場面における曖昧さへの非寛容

④ 対人ストレス

(1) 参加者の属性に関する項目

4.3.1 で使用した参加者のデモグラフィックに関する項目をそのまま借用する。

(2) 自律的動機づけ尺度

曖昧な表現に対する日中の共通点を示すことにより、留学生の日本人学生への交流の自律的動機づけが向上するのかを確認するために、岡田(2005)の友人関係への動機づけ尺度を用いた。その中でも「同一化調整尺度」、「内発的動機づけ」だけを用いた理由は、この二つの項目から「自律的動機づけ」を測るからである。「1. 当てはまらない」 ～ 「5. 当てはまる」の 5 件法を採用し、計 8 項目から構成されており、表 5-2 に示す。

表 5-2 自律的動機づけ尺度(岡田、2005)

同一化調整尺度	内発的動機づけ
友人と一緒に時間を過ごすのは、重要だから	友人と話すのは、おもしろいから
友人関係は、自分にとって意味のあるものだから	友人と一緒にいると、楽しい時間が多いから
友人といることで、幸せになれるから	友人と一緒にいるのは楽しいから
友人のことをよく知るのは、価値のあることだから	友人と親しくなるのは、うれしいことだから

(3) 対人場面における曖昧さへの非寛容尺度

曖昧な表現に対する日中の共通点を示すことにより、日本人との対人場面における曖昧さへの非寛容さが変化するのかを確認するために友野・橋本(2005)の「対人場面における曖昧さへの非寛容尺度」を用いた。「1.全く同意しない」～「7. とても強く同意する」の 7 件法を採用し、本研究では、「初対面における曖昧さへの非寛容」および「半見知りの関係における曖昧さへの非寛容」だけを採用し、計 12 項目から構成されている。[56]その理由は本研究における動機づけが形成されない部分は多くの場合、初対面もしくは半見知りの関係から友人関係形成ができなかった人を対象にしているためである。質問表は表 5-3 に示す。

表 5-3 対人場面における曖昧さへの非寛容尺度（友野・橋本、2005）

初対面における曖昧さへの非寛容	半見知りの関係における曖昧さへの非寛容
見ず知らずの人と一緒にいるとき、私に対してどのように振舞うのか予想がつかないと、とまどってしまいます	あいさつぐらいしかしない人をその日、二度目に見かけたとき、どう接してよいのかわかりません
友達の友達に会ったとき、どうすべきか迷います	隣人と出会ったとき、お互い顔は知っているのに、あいさつしてよいのかどうか迷います
初対面の人に、どの程度親しく接してよいのかとまどいます。	表面上の付き合いにとどまっている人との会話は、どこかお互いに本音を出すまいとしていて、中身がないので苦痛です
初対面の人と、お互いを探り合いながら話します	中途半端に親しい友人の発言は、はっきりしないことが多いので困ります
初対面の人とするあいさつは、あいまいで困ります	「知人」程度の人と出会うと、お互い気づかないフリをしてしまい気まずいです
初対面の人と2人きりでいるとき、話をするべきかどうかとまどいます	昔の知人とあいさつをかわすのは、緊張します

（4）対人ストレス尺度

4.3.1 で使用した対人ストレス尺度をそのまま借用する。

（5）インタビューの設計内容

インタビューでは以下のことを確認した。

① “思い出し”ワークで日本人学生との交流で困難だった場面を出すことができたのかどうか。そして、それは今回のワークとつながりがあると思うかどうかを確認した。

② 2 回のブレインストーミングで難しかった部分はあったかどうか、そして、それに対してはどのようなところが難しかったのかを確認した。

③ 今回のワークの趣旨を説明し、今回のワークによって、中国人の留学生が中国でも同じく曖昧な表現を使う場面があると認識するかどうか、そして、それが日本人との交流につながると思うかどうかを確認した。

第6章　提案内容の実施結果

第 6 章では第 5 章で設計したワークショップを予備実験および実験に分けて行った。それぞれに対する詳細は以下より示す。

6.1 評価の目的と方法

本提案の評価の目的はワークの効果およびその妥当性を確認するためであり、事前事後のアンケートおよびインタビューから評価を行った。

6.2 予備実験の概要

本実験を実施する前に、ワークの妥当性を確認するため、また、ワークの効果を改めて確認するために行った。

6.2.1　予備実験の基本情報

予備実験の基本情報は以下の通りである。

日時　…2020 年 1 月 8 日　14:30 ~ 16:00（1 時間 30 分）
参加人数　…20 代中国人留学生　男性 2 名
実施場所　…慶應義塾大学日吉キャンパス協生館

6.2.2　予備実験の参加者情報

予備実験の参加者は中国人留学生 2 名である。参加者は来日歴が 2 年以上で日本語ができる中国人留学生を選んでいる。表 6-1 はインタビュー協力者の属性の中でも国籍、年齢、性別、専攻、学籍、在日歴、日本語学校期間、日本語関連資格をまとめたものであり、表 6-2 は協力者の主観的な日本語能力、日本人との交流意欲、そして、友人関係に関する項目をまとめたものである。
参加者の基本情報を表 6-1、6-2 に示す。

表 6-1　予備実験参加者の属性

協力者	国籍	年齢	性別	専攻	学籍	在日歴	日本語学校期間	日本語関連資格
B1	中国	25～29 歳	男	理科系	大学院修士	3 年以上	2 年	N1
B2	中国	25～29 歳	男	文科系	大学院修士	3 年以上	2 年	N1

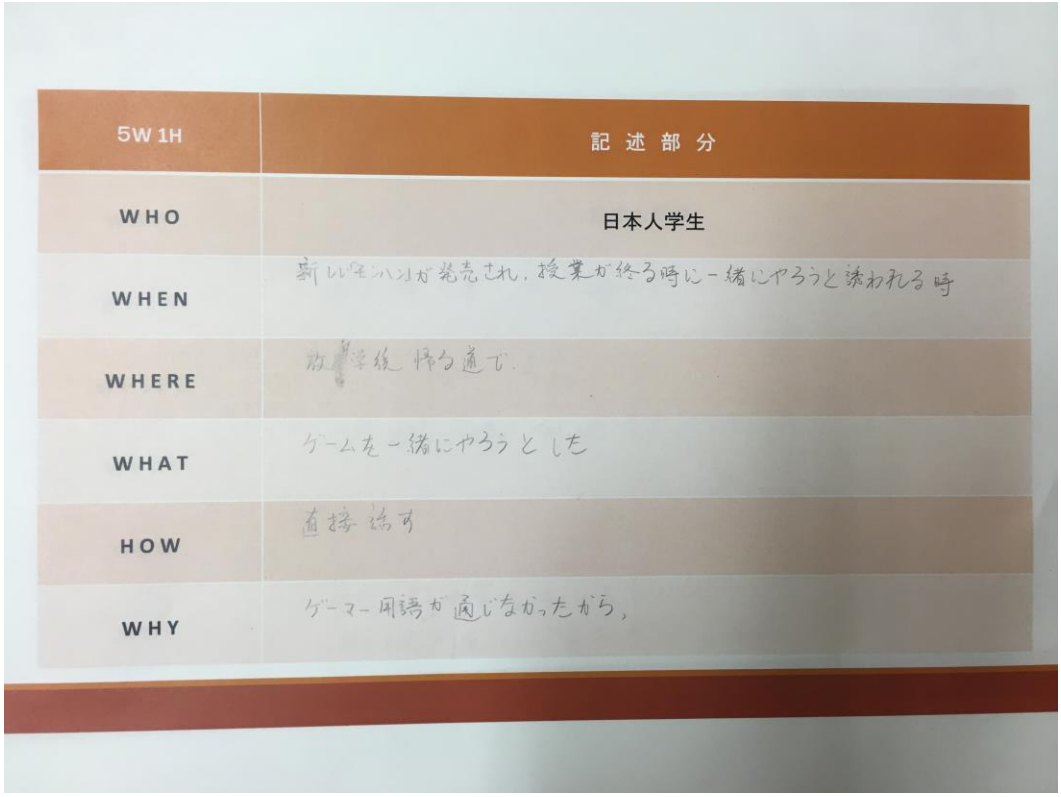
表 6-2 予備実験参加者の主観に関する項目

協力者	あなたの日本語力はどのレベルですか？	日本人（学生）と交流したいと思いますか？	日本人（学生）と交流できると思いますか？	よく連絡を取っている日本人友人・知人は何人いますか？	よく連絡を取っている同国の友人・知人は何人いますか？	よく連絡を取っている他国の友人・知人は何人いますか
B1	ほぼ十分についていける	5	1～2 人くらい	3～5 人くらい	3～5 人くらい	3～5 人くらい
B2	日常会話なら問題なし	4	5～10 人くらい	5～10 人くらい	5～10 人くらい	ほとんどいない

6.2.3 予備実験の実施結果

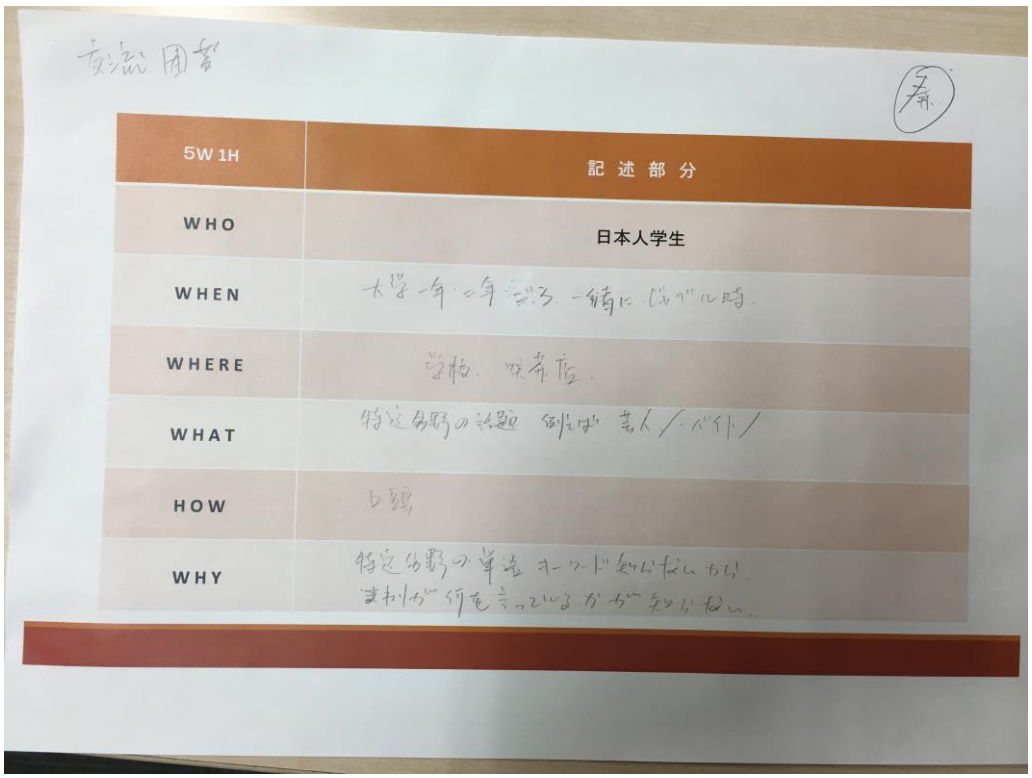
第1段階では「ワークショップの概要の説明」を行い、第2段階の「自分が困難だった場面を出してもらう」では予備調査1で使用したシートを使用し、参加者2名が“今まで日本人学生との交流をするときに、困難だった時”をテーマとして書いた。その結果物は図 6-2, 6-3 に示す。そして、第3段階の「母国でも同じことが起きている」では参加者は日本バージョンと中国バージョンの動画を視聴し、動画での会話の特徴について話あう。次に“中国（母国）で自分のために曖昧な表現を使ったことはありますか？”というテーマに対してブレインストーミングをした。その結果は図 6-4 に示す。そして、“中国（母国）で他人のために曖昧な表現を使ったことはありますか？”というテーマでブレインストーミングを行った。その結果は図 6-5 に示す。第4段階では「困難だった場面を再確認する」を行い、第2段階で作成したシートを再確認した。

図 6-1 予備実験の様子



5W 1H	記 述 部 分
WHO	日本人学生
WHEN	新しいゲームが発売され，授業が終る時に一緒にやろうと誘われる時
WHERE	放課後 帰り道で．
WHAT	ゲームを一緒にやろうとした
HOW	直接話す
WHY	ゲーマー用語が通じなかったから，

図 6-2 B1 さんの”思い出しワーク”結果



5W 1H	記 述 部 分
WHO	日本人学生
WHEN	大学一年の年ごろ 一緒にゴルフ時．
WHERE	学校．研究室．
WHAT	特定分野の話題 例えば 書人／バイト／
HOW	口頭
WHY	特定分野の単語 キーワード知らないから． まわりが何を言っているかが知らない．

図 6-3 B2 さんの”思い出しワーク”結果

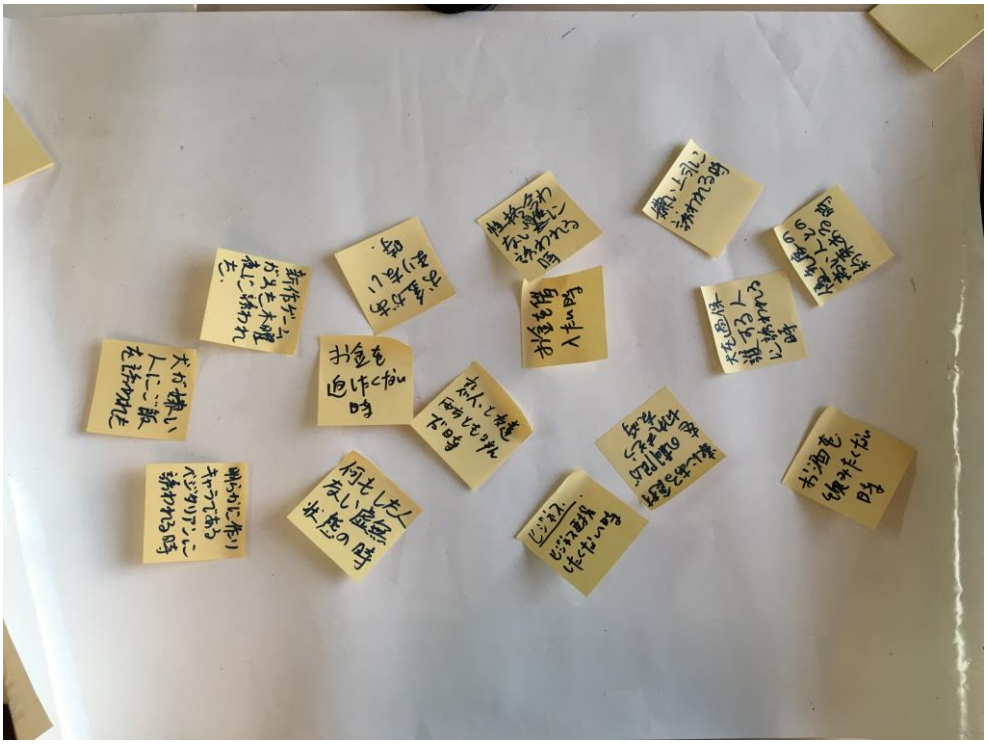


図 6-4 ブレインストーミング1の結果

図 6-5 ブレインストーミング2の結果

6.2.4　予備実験のアンケートの結果

表 6-3 は参加者 B1 と B2 の事前事後のアンケート結果を項目ごとに平均値でまとめたものである。表 6-4 は参加者の自律的動機づけの結果を事前、事後に分けてまとめたものである。表 6-5、6-6 は参加者の自律的動機づけの下位項目である同一化調整、内発的動機づけの結果をそれぞれ分けて示す。表 6-7 は参加者の対人ストレスの結果を事前、事後に分けて示す。表 6-8 は参加者の対人場面における曖昧さへの非寛容の結果を事前、事後に分けてまとめたものである。表 6-9, 6-10 は参加者の対人場面における曖昧さへの非寛容の下位項目である初対面における曖昧さへの非寛容、半見知りの関係における曖昧さへの非寛容の結果をそれぞれに分けて示す。

予備実験でのアンケートの結果から以下のような傾向が見られた。予備実験の結果、対人ストレスの軽減への効果が示唆された。対人ストレス尺度の下位項目である“日本人学生と親しい人間関係をつくることの難しさ”に対しては軽減が見られた。また、対人ストレスの中から“日本人ははっきりしない表現の、本当の意味を理解すること”の項目に対しては B1 は軽減し、B2 からは変化が見られなかった。

表 6-3　予備実験参加者のアンケート結果（平均値）

B1

尺度		事前	事後
自律的動機づけ	同一化調整尺度	4.25	4.00
	内発的動機づけ	4.00	4.00
対人ストレス		3.50	3.00
対人場面における曖昧さへの非寛容尺度	初対面における曖昧さへの非寛容	2.67	3.00
	半見知りの関係における曖昧さへの非寛容	2.67	2.67

B2

尺度		事前	事後
自律的動機づけ	同一化調整尺度	5.00	5.00
	内発的動機づけ	5.00	4.75
対人ストレス		4.38	4.25
対人場面における曖昧さへの非寛容尺度	初対面における曖昧さへの非寛容	4.67	4.17
	半見知りの関係における曖昧さへの非寛容	5.67	4.00

表 6-4 予備実験参加者の自律的動機づけ結果

	B1		B2	
	事前	事後	事前	事後
友人と一緒に過ごすのは、重要だから	4	4	5	5
友人関係は、自分にとって意味のあるものだから	4	4	5	5
友人といることで、幸せになれるから	4	4	5	5
友人のことをよく知るのは、価値のあることだから	5	4	5	5
友人と話すのは、面白いから	4	4	5	5
友人と一緒にいると、楽しい時間が多いから	4	4	5	5
友人と一緒にいるのは楽しいから	4	4	5	5
友人と親しくなるのは、うれしいことだから	4	4	5	4

表 6-5 予備実験参加者の自律的動機づけ(同一化調整)結果

	B1		B2	
	事前	事後	事前	事後
友人と一緒に過ごすのは、重要だから	4	4	5	5
友人関係は、自分にとって意味のあるものだから	4	4	5	5
友人といることで、幸せになれるから	4	4	5	5
友人のことをよく知るのは、価値のあることだから	5	4	5	5

表 6-6 予備実験参加者の自律的動機づけ（内発的動機づけ）結果

	B1		B2	
	事前	事後	事前	事後
友人と話すのは、面白いから	4	4	5	5
友人と一緒にいると、楽しい時間が多いから	4	4	5	5
友人と一緒にいるのは楽しいから	4	4	5	5
友人と親しくなるのは、うれしいことだから	4	4	5	4

表 6-7 予備実験参加者の対人ストレス結果

	B1		B2	
	事前	事後	事前	事後
日本人ははっきりしない表現の、本当の意味を理解すること	5	4	5	5
日本人に質問したり、話題に参加しようとしても無視される	2	2	3	4
日本人学生と親しい人間関係をつくることの難しさ	3	2	5	4
外国人だということで特別視されること	4	2	4	4
礼儀が多くて、いつも「すみません」「ありがとう」などと口にすること	4	4	5	4
割り勘の習慣	4	4	5	5
日本人のまじめさ	4	4	5	5
日本人の冷たい対人態度	2	2	3	3

表 6-8 予備実験参加者の対人場面における曖昧さへの非寛容結果

	B1		B2	
	事前	事後	事前	事後
見ず知らずの人と一緒にいるとき、私に対してどのように振舞うか予想がつかないと、とまどってしまいます	2	2	5	4
友達の友達に会ったとき、どうすべきか迷います	2	2	2	2
初対面の人に、どの程度親しく接してよいのかとまどいます	2	2	6	5
初対面の人に、お互いを探り合いながら話します	4	5	6	5
初対面の人とするあいさつは、曖昧で困ります	2	2	2	3
初対面の人と2人きりでいるとき、話をするべきかどうかとまどいます	4	5	7	6
あいさつぐらいしかしない人をその日、二度目に見かけたとき、どう接してよいのかわかりません	2	2	6	4
隣人と出会ったとき、お互いのお顔を知っているのに、あいさつしてよいのかどうか迷います	2	3	7	3
表面上の付き合いにとまどっている人との会話は、どこかお互いに本音を出すまいとしていて、中身がないので苦痛です	4	3	7	7
中途半端に親しい友人の発言は、はっきりしないことが多いので困ります	3	3	7	6
「知人」程度の人と出会うと、お互い気づかないふりをしてしまい気まずいです	2	3	6	3
昔の知人とあいさつを交わすのは、緊張します	3	2	1	1

表 6-9 予備実験参加者の対人場面における曖昧さへの非寛容結果（初対面における曖昧さへの非寛容）

	B1		B2	
	事前	事後	事前	事後
見ず知らずの人と一緒にいるとき、私に対してどのように振舞うか予想がつかないと、とまどってしまいます	2	2	5	4
友達の友達に会ったとき、どうすべきか迷います	2	2	2	2
初対面の人に、どの程度親しく接してよいのかとまどいます	2	2	6	5
初対面の人に、お互いを探り合いながら話します	4	5	6	5
初対面の人とするあいさつは、曖昧で困ります	2	2	2	3
初対面の人と2人きりでいるとき、話をするべきかどうかとまどいます	4	5	7	6

表 6-10 予備実験参加者の対人場面における曖昧さへの非寛容結果
（半見知りの関係における曖昧さへの非寛容）

	B1		B2	
	事前	事後	事前	事後
あいさつぐらいしかしない人をその日、二度目に見かけたとき、どう接してよいのかわかりません	2	2	6	4
隣人と出会ったとき、お互いのお顔を知っているのに、あいさつしてよいのかどうか迷います	2	3	7	3
表面上の付き合いにとまどっている人との会話は、どこかお互いに本音を出すまいとしていて、中身がないので苦痛です	4	3	7	7
中途半端に親しい友人の発言は、はっきりしないことが多いので困ります	3	3	7	6
「知人」程度の人と出会うと、お互い気づかないふりをしてしまい気まずいです	2	3	6	3
昔の知人とあいさつを交わすのは、緊張します	3	2	1	1

6.2.5　予備実験のインタビューの結果

最初の思い出しワークを通じて日本人学生との交流において困難だった場面を出すことはできたが、それが今回のワークとどのようにつながるかわからないという回答が得られた。B2 には、“よく理解できなかった。中国のことを考えることによって、なぜ日本人の曖昧な表現に対するストレスが緩和されるのかがよくわからなかった”というコメントをもらった。とくに、参加者から交流においての場面が幅が広すぎることからそれをより限定したほうが良いというコメントがあった。

2 つ目の 2 回目のブレインストーミングのテーマである“中国（母国）で他人のために曖昧な表現を使ったことがありますか？”では出しにくかったというコメントがあり、それは実際実施結果からもうかがえる。

最後の今回のワークに対する有効性に対しては B1 から、“たしかに、中国人が曖昧な表現をするの、気づかなかったけど、確かに、中国人も曖昧な表現を使うなと思いました。日本語の勉強をしているときも、先生からは日本には曖昧な表現が多くて、その言葉の裏にある意味をちゃんと理解しろうと教わってきたけど、今日のワークを通じたら、やはり中国もいろんな場面で気まずさを回避するために、曖昧な表現を使うと思った”というコメントがあった。

以上の結果から次のようなことが考えられる。

6.3 予備実験の考察および限界

まず、最初の思い出しワークのテーマを“日本人との交流において困難だった場面”を“日本人との交流において、コミュニケーションで困難だった時”に限定することが考えられる。このことから日本人との交流と中国における曖昧な表現のワークをつなぐ工夫が必要であると考えられる。

予備実験から今回のワークによる友人関係への内発的動機づけの変化は見られなかった。その理由として考えられるのは、内発的動機づけは情動的な部分であるが、今回のワークの内容は認知への変化を試みているため、動機づけの中でも自己効力感との関連性を確認することが必要だと考える。そのため、本実験では対人的自己効力感も項目にいれることにした。

ただし、今回の予備実験は対象者が 2 人であること、また、動画撮影に参加したことがあることから、ある程度本実験の意図を知っていたことから、有効性については疑う余地があり、実験にてそれを確認する必要があると考えられる。

6.4 実験の概要

予備実験からワークショップの内容を一部修正し、実験を行う。

6.4.1　実験の基本情報

実験の基本情報は以下の通りである。

日時　…2020 年 1 月 11 日　13:00 ~ 15:00（2 時間）

参加人数　…20 代中国人留学生　男性 2 名　女性 1 名

実施場所　…慶應義塾大学日吉キャンパス協生館

6.4.2　実験の参加者情報

実験の参加者は中国人留学生3名であり、大学院修士課程の女子留学生が 1 名、学部生の男性が 2 名である。今回の参加者はインタビュー調査の協力者の中で日本語ができて、対人ストレスが高かった人を選んでいる。表6-3-はインタビュー協力者の属性の中でも国籍、年齢、性別、専攻、学籍、在日歴、日本語学校期間、日本語関連資格をまとめたものであり、表 6-4 は協力者の主観的な日本語能力、日本人との交流意欲、そして、友人関係に関する項目をまとめたものである。

表 6-11　実験参加者の属性

協力者	国籍	年齢	性別	専攻	学籍	在日歴	日本語学校期間	日本語関連資格
B3	中国	30～34 歳	女	文科系	大学院修士	3 年以上	1 年半	N1
B4	中国	20 代未満	男	文科系	学部生	1 年以上 2 年未満	半年	N1
B5	中国	20～24 歳	男	文科系	学部生	3 年以上	1 年	N1

表 6-12　実験参加者の主観に関する項目

協力者	あなたの日本語力はどのレベルですか？	日本人（学生）と交流したいと思いますか？	日本人（学生）と交流できると思いますか？	よく連絡を取っている日本人友人・知人は何人いますか？	よく連絡を取っている同国の友人・知人は何人いますか？	よく連絡を取っている他国の友人・知人は何人いますか
B3	日常会話なら問題なし	4	4	5～10 人くらい	10 人以上	3～5 人くらい
B4	日常会話なら問題なし	5	4	1～2 人くらい	1～2 人くらい	3～5 人くらい
B5	日常会話なら問題なし	4	5	3～5 人くらい	10 人以上	3～5 人くらい

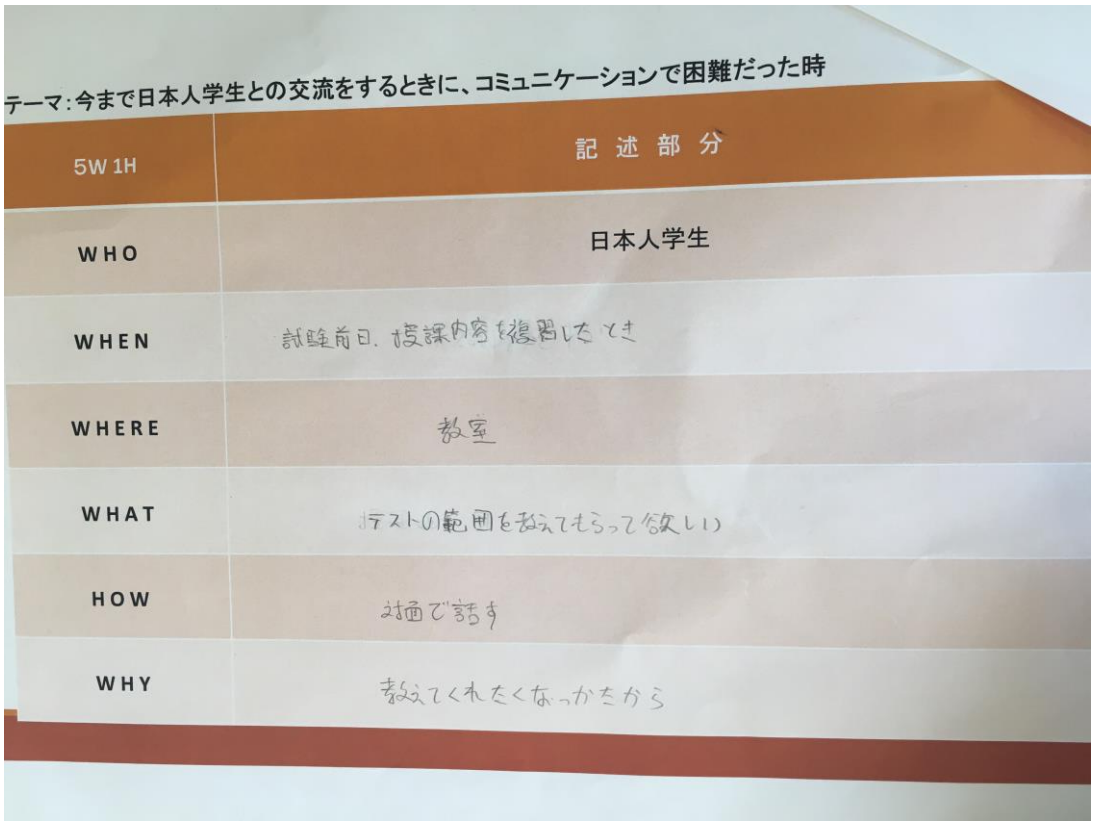
6.4.3　実験の実施結果

第1段階では「ワークショップの概要の説明」を行い、第2段階の「自分が困難だった場面を出してもらう」では予備調査1で使用したシートを使用した。予備実験から、今回のシートのテーマを“今まで日本人学生との交流をするときに、コミュニケーションで困難だった時”をテーマに変えた。その結果物は図 6-8, 6-9、6-10 に示す。そして、第3段階の「母国でも同じことが起きている」では参加者は日本バージョンと中国バージョンの

動画を視聴し、動画での会話の特徴について話あう。次に“中国（母国）で自分のために曖昧な表現を使ったことはありますか？”というテーマに対してブレインストーミングをした。その結果は図 6-11 に示す。そして、“中国（母国）で他人のために曖昧な表現を使ったことはありますか？”というテーマでブレインストーミングを行った。その結果は図 6-12 に示す。第4段階では「困難だった場面を再確認する」を行い、第2段階で作成したシートを再確認した。なお、実験で用いた手順書は Appendix の付録資料⑤に載せている。

図 6-6 実験会場の様子

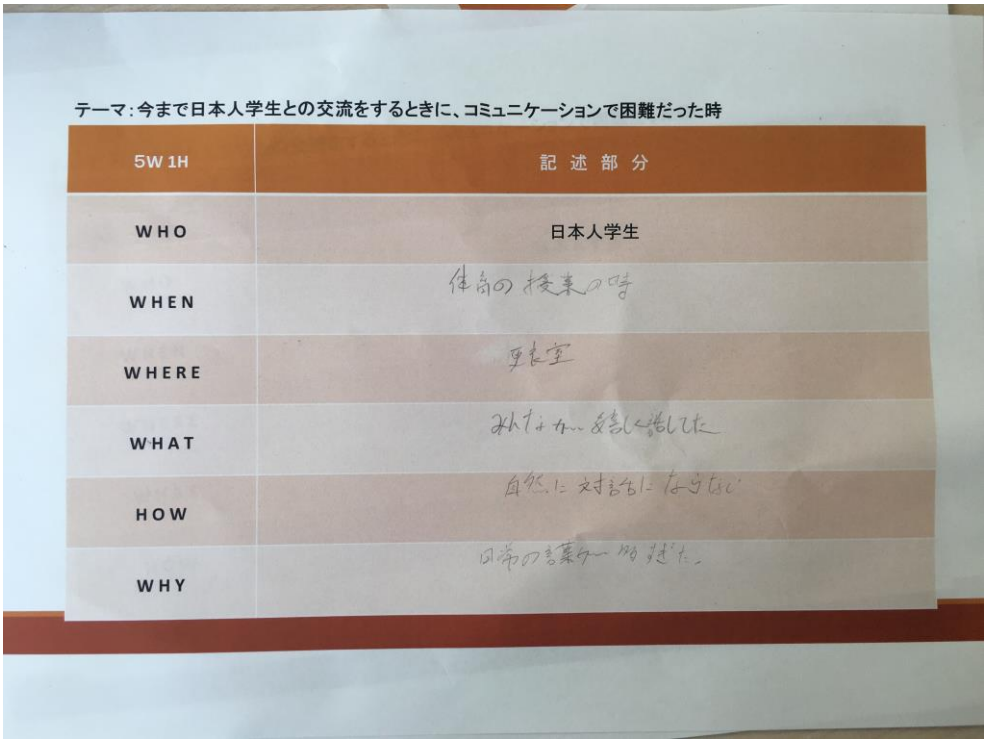
図 6-7 実験の様子



テーマ：今まで日本人学生との交流をするときに、コミュニケーションで困難だった時

5W 1H	記 述 部 分
WHO	日本人学生
WHEN	試験前日、授業内容を復習したとき
WHERE	教室
WHAT	テストの範囲を教えてもらって欲しい
HOW	対面で話す
WHY	教えてくれたくなっかたから

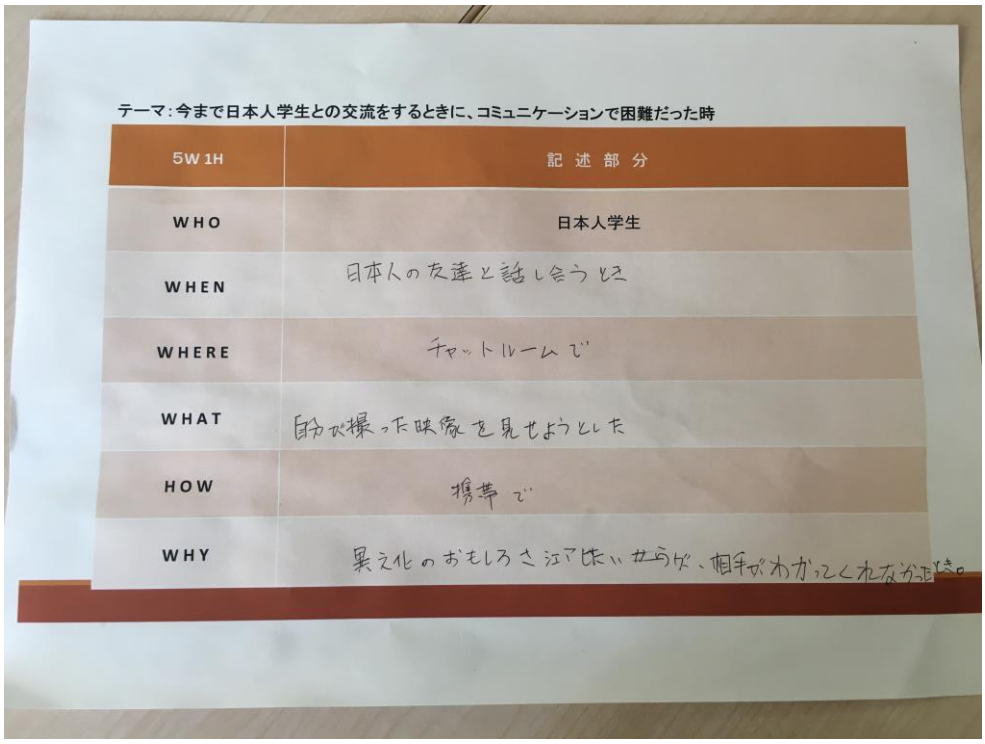
図 6-8 B3 の”思い出しワーク”の結果



テーマ：今まで日本人学生との交流をするときに、コミュニケーションで困難だった時

5W 1H	記 述 部 分
WHO	日本人学生
WHEN	体育の授業の時
WHERE	更衣室
WHAT	みんなが楽しく話していた
HOW	自然に対話もにならない
WHY	日常の言葉が出ない

図 6-9 B4 の”思い出しワーク”の結果



テーマ：今まで日本人学生との交流をするときに、コミュニケーションで困難だった時

5W 1H	記 述 部 分
WHO	日本人学生
WHEN	日本人の友達と話し合うとき
WHERE	チャットルームで
WHAT	自分が撮った映像を見せようとした
HOW	携帯で
WHY	異文化のおもしろさ面白いからだ、相手がわかってくれなかったとき。

図 6-10 B5 の”思い出しワーク”の結果

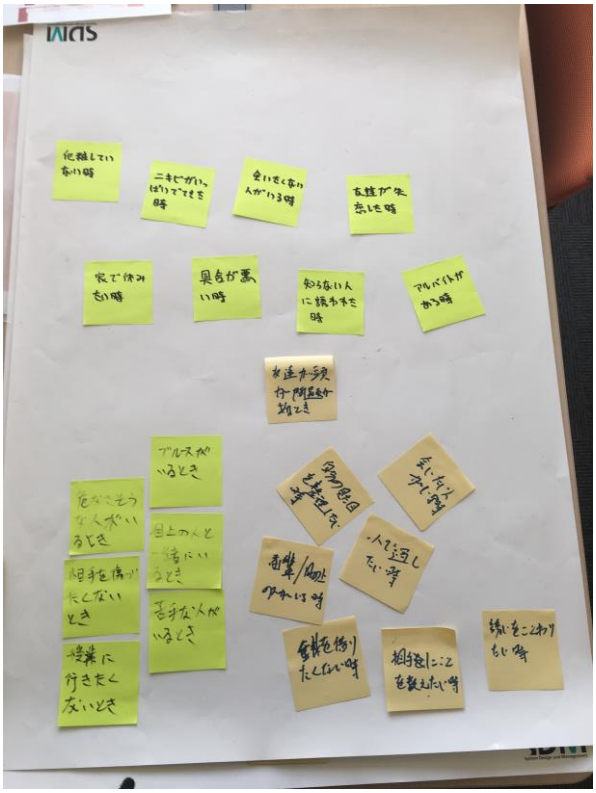


図 6-11 ブレインストーミング1の結果物

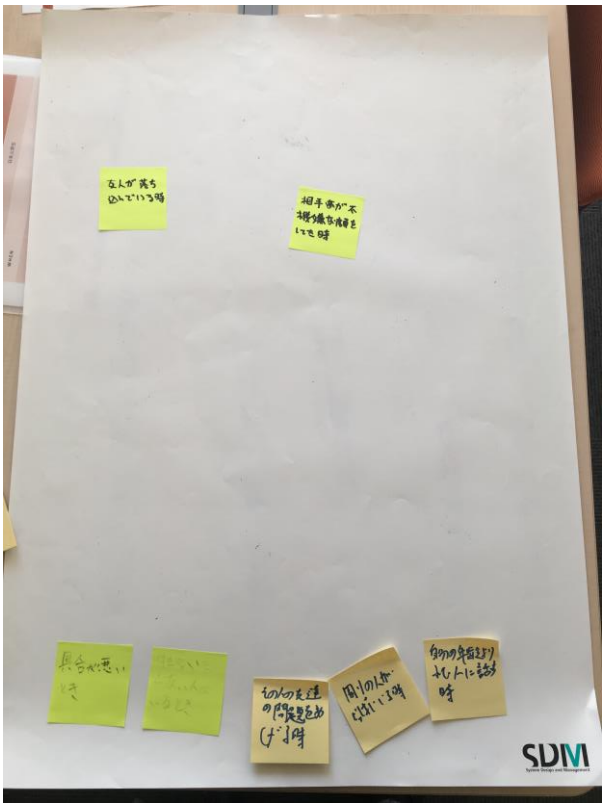


図 6-12 ブレインストーミング2の結果物

6.4.4　実験のアンケートの結果

表 6-13 が示すように、B3,B4,B5 の対人的自己効力感の中で対人スキルへの自信の項目は減少していることから、対人的スキルへの自信が上がったことがわかった。また、B3,B5 の対人ストレスの項目が増加していることから、今回のワークによって日本人との対人ストレスが上がったことが分かった。

表 6-14 が示すように自律的動機づけにおいては B4 の「友人と親しくなるのは、うれしいことだから」が増加しているが、その他の部分では変化が見られなかった。そのため、詳細は付録④に添付している。

表 6-20 で示すように B3 は「友達の友達にあったとき、どうすべきか迷います」が増加しており、B4 は「見ず知らずの人と一緒にいるとき、私に対してどのように振舞うか予想がつかないと,戸惑ってします」の項目以外少し減少していると考えられる。B5 は「初対面の人に、どの程度親しく接してよいか戸惑ってしまう」、「初対面の人に、お互いを探り合いながら話します」の項目について少し減少している。

表 6-21 で示すように「隣人と出会ったとき、お互いの顔を知っているのに、挨拶してよいのかどうか迷います」の項目において B3 だけ減少がみられたが、B4,B5 からの減少は見られなかった。

表 6-18 が示すように「日本人のはっきりしない表現の本当の意味を理解すること」は両方とも上がっていることから、B3,B5 は対人ストレスの項目の中でも日本人のはっきりしない曖昧な表現の本当の意味を理解することに対してストレスを感じたことがわかった。

その理由としては、今回のワークが日本人の曖昧性と中国人の曖昧性の違いを意識することによるものであると考えられる。

表 6-13　実験参加者のアンケート結果（平均値）

B3

尺度		事前	事後
自律的動機づけ	同一化調整尺度	4.00	3.75
	内発的動機づけ	4.75	4.75
対人的自己効力感	対人的スキルへの自信	3.20	3.00
	友人からの信頼	1.25	1.00
	友人への信頼	1.25	1.25
対人ストレス		4.00	4.38
対人場面における曖昧さへの非寛容尺度	初対面における曖昧さへの非寛容	4.83	5.33
	半見知りの関係における曖昧さへの非寛容	4.83	4.50

B4

尺度		事前	事後
自律的動機づけ	同一化調整尺度	1.75	2.00
	内発的動機づけ	3.50	4.00
対人的自己効力感	対人的スキルへの自信	2.20	2.00
	友人からの信頼	2.25	2.50
	友人への信頼	1.50	1.50
対人ストレス		3.50	2.88
対人場面における曖昧さへの非寛容尺度	初対面における曖昧さへの非寛容	4.67	4.17
	半見知りの関係における曖昧さへの非寛容	3.33	3.00

B5

尺度		事前	事後
自律的動機づけ	同一化調整尺度	4.75	5.00
	内発的動機づけ	5.00	5.00
対人的自己効力感	対人的スキルへの自信	2.00	1.40
	友人からの信頼	2.5	1.75
	友人への信頼	1.00	1.00
対人ストレス		4.00	4.25
対人場面における曖昧さへの非寛容尺度	初対面における曖昧さへの非寛容	1.50	1.00
	半見知りの関係における曖昧さへの非寛容	1.50	1.50

表 6-14 実験参加者の自律的動機づけ結果

	B3		B4		B5	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後
友人と一緒に過ごすのは、重要だから	4	4	2	2	4	5
友人関係は、自分にとって意味のあるものだから	4	4	1	2	5	5
友人といることで、幸せになれるから	5	4	2	2	5	5
友人のことをよく知るのは、価値のあることだから	3	3	2	2	5	5
友人と話すのは、面白いから	4	4	4	4	5	5
友人と一緒にいると、楽しい時間が多いから	5	5	4	4	5	5
友人と一緒にいるのは楽しいから	5	5	4	4	5	5
友人と親しくなるのは、うれしいことだから	5	5	2	4	5	5

表 6-15 実験参加者の対人的自己効力感結果

	B3		B4		B5	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後
私はだれとでも気軽に話せる	4	2	2	2	2	2
私はたれとでも仲良くできると思う	3	3	3	2	2	1
初めて会う人にでもうまく自己紹介ができる	4	3	2	2	2	2
相手とうまく話しのやり取りができる	1	4	2	2	2	1
私は同級生だけではなく、先輩後輩ともうまくやっていくことができる	4	3	2	2	2	1
友人は自分を必要としてくれている	2	1	3	4	1	1
友人は私に隠しごとなく、何でも話してくれる	1	1	2	2	3	1
友人に何を話しても、理解してくれると思う。	1	1	2	2	4	3
私が友人を誘えば一緒に行動してくれると思う	1	1	2	2	2	2
私にとって友人は頼りになるものだと思う	1	1	2	2	1	1
友人と元気をわかちあうことができると思う	2	2	2	2	1	1
私は友達に素直にありがとうと言える	1	1	1	1	1	1
私には心から信頼できる友人がいる	1	1	1	1	1	1

表 6-16 実験参加者の対人的自己効力感（対人的スキルへの自信）結果

	B3		B4		B5	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後
私はだれとでも気軽に話せる	4	2	2	2	2	2
私はたれとでも仲良くできると思う	3	3	3	2	2	1
初めて会う人にでもうまく自己紹介ができる	4	3	2	2	2	2
相手とうまく話しのやり取りができる	1	4	2	2	2	1
私は同級生だけではなく、先輩後輩ともうまくやっていくことができる	4	3	2	2	2	1

表 6-17 実験参加者の対人的自己効力感（友人からの信頼）結果

	B3		B4		B5	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後
友人は自分を必要としてくれている	2	1	3	4	1	1
友人は私に隠しごとなく、何でも話してくれる	1	1	2	2	3	1
友人に何を話しても、理解してくれると思う。	1	1	2	2	4	3
私が友人を誘えば一緒に行動してくれると思う	1	1	2	2	2	2

表 6-18 実験参加者の対人的自己効力感（友人への信頼）結果

	B3		B4		B5	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後
私にとって友人は頼りになるものだと思う	1	1	2	2	1	1
友人と元気をわかちあうことができると思う	2	2	2	2	1	1
私は友達に素直にありがとうと言える	1	1	1	1	1	1
私には心から信頼できる友人がいる	1	1	1	1	1	1

表 6-19 実験参加者の対人ストレス結果

	B3		B4		B5	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後
日本人ははっきりしない表現の、本当の意味を理解すること	2	3	2	2	4	5
日本人に質問したり、話題に参加しようとしても無視される	3	4	4	3	1	2
日本人学生と親しい人間関係をつくることの難しさ	4	4	5	4	4	5
外国人だということで特別視されること	4	5	3	3	5	5
礼儀が多くて、いつも「すみません」「ありがとう」などと口にすること	5	5	2	2	5	5
割り勘の習慣	5	5	5	4	5	5
日本人のまじめさ	5	5	3	2	3	3
日本人の冷たい対人態度	4	4	4	3	5	4

表 6-20 実験参加者の対人場面における曖昧さへの非寛容（初対面における曖昧さへの非寛容）結果

	B3		B4		B5	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後
見ず知らずの人と一緒にいるとき、私に対してどのように振舞うか予想がつかないと、とまどってしまいます	4	4	2	3	1	1
友達の友達に会ったとき、どうすべきか迷います	3	5	6	5	1	1
初対面の人に、どの程度親しく接してよいのかとまどっています	5	6	5	5	2	1
初対面の人に、お互いを探り合いながら話します	6	6	6	5	3	1
初対面の人とするあいさつは、曖昧で困ります	5	5	5	4	1	1
初対面の人と2人きりでいるとき、話をするべきかどうかとまどいます	6	6	4	3	1	1

表 6-21 実験参加者の対人場面における曖昧さへの非寛容（半見知りにおける曖昧さへの非寛容）結果

	B3		B4		B5	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後
あいさつぐらいしかしない人をその日、二度目に見かけたとき、どう接してよいのかわかりません	3	4	4	3	1	1
隣人と出会ったとき、お互いのお顔を知っているのに、あいさつしてよいのかどうか迷います	7	2	2	2	1	1
表面上の付き合いにとまどっている人との会話は、どこかお互いに本音を出すまいとしていて、中身がないので苦痛です	6	6	3	5	4	4
中途半端に親しい友人の発言は、はっきりしないことが多いので困ります	3	5	3	3	1	1
「知人」程度の人と出会うと、お互い気づかないふりをしてしまい気まずいです	6	6	3	3	1	1
昔の知人とあいさつを交わすのは、緊張します	4	4	5	2	1	1

6.4.5 実験のインタビューの結果

まず、最初の思い出しワークに対しては日本人学生との交流において、コミュニケーションで困難だった場面を出すことはできた。しかし、それが今回のワークとつながっているとは思えないというコメントがあった。

また、ブレインストーミングに関しては前回と同様、難しかったというコメントがあり、それは B3 から“他人のために曖昧な表現を使うところのブレインストーミングが難しく、中国人は個人主義であることからあまり思いつかなかった。日本人はいやな人と苦手な人をわけており、それに応じて態度を変えているが、中国人は好きか嫌いかはっきりわけており、隠すのが好きではない”というコメントがあった。

最後の今回のワークの有効性については B4 には“日本人の直接言わないからいやだ”というコメントがあり、今回のワークをより深く設計する必要性が現れた。B5 には“曖昧な表現に対するワークの趣旨はあっていると思う。カルチャー・ショックに関するものだと思う。自分の文化に目覚めることに有効だと思う”というコメントがあった。

6.5 提案実施からの考察および限界

アンケートの結果から今回の提案における有効性は以下の通りである。

今回の提案内容で日本や中国の同じ場面に対して違う解釈を行い、日本と中国の違いを認識することは

可能であった。それは、実験の結果から参加者全員が同意した部分である。つまり、同じ場面であるにも関わらず、それに対する解釈を自分の今までの経験から解釈でき、日本と中国の違いを再認識することから“どういうところが違うのか”の確認をさせることは可能であったことが考えられる。これは B5 がいう“カルチャー・ショック”を再認識し、自分の文化に目覚めることには有効であることが示唆される。

当初の目的であった、同じ場面を見せることによって、同じだという認識を与えることができなかったが、逆に同じ場面を見せることによって、本人が持っている両国に対する違いを明らかにすることは可能であった。

そのため、本提案からの有効性は留学生が自分が持っている日本や中国の曖昧な表現の違いについての再認識までであると考えられる。再認識をさせたあとの提案は今後の展望であると考えられる。

ただし、本提案の限界は以下のことが考えられる。まず、対象者数が少ないことから中国人留学生全員に対して有効であることは言えないことである。また、参加者が少なく統計的処理ができなかったことから、有効性の確認はできず、可能性を示唆しているにすぎない。また、本提案の参加者は日本語ができる 20 代の男性学部生が中心であったことから、その対象に対しての可能性を示唆しているに過ぎない。

第7章　結論と今後の展望

第 7 章では本研究の結論および課題や今後の展望について述べていく。

7.1 結論

本研究の、はじめに、「留学生 30 万人計画」に対する目標は達成されたものの、それに伴う留学生支援が追い付いていない現状があり、その解決策として留学生問題で重要だといわれる対人関係問題に着目した。その中でも中国人留学生は留学生全体の 4 割を占めているにも関わらず、日本語を学んできていることから日本人には支援が必要なことが伝わりにくいという問題を抱えている。

そこで、本研究では、在日中国人留学生が日本人学生との交流の動機づけができない原因の特定および、それに伴う提案を行った。

インタビュー調査の対象者は日本語ができる中国人留学生に対象を絞って行った。インタビュー調査の事前アンケートの結果、インタビュー対象者の傾向は日本人との対人ストレスを抱えており、友人関係への不満の原因帰属尺度の中でも「文化の違いから」や「相手の積極的ではないから」が共通して高いと考えられる。インタビュー調査により、実験に参加した在日中国人留学生が日本人学生との交流における動機づけができない理由としては、「留学生の日本語に対する自信のなさ」、「日本人の留学生に対する興味なし」、「留学生と日本人学生の接触場面の少なさ」、「曖昧な表現に対する解釈の違い」、「学校内の同国人のコミュニティの充実さ」の5つの要因の抽出ができた。その中でも曖昧な表現に対する解釈の違いの背景にあるものとしては、友情観だけではなく、“礼儀”という言葉に対する文化の違いも考えられた。礼儀の正しさから相手との距離感をはかることや礼儀が正しすぎることから本心が逆にわかりにくいことからである。

そして、曖昧な表現に対する解釈を変えるために実施した提案に関しては、参加した在日中国人留学生に対して、曖昧な表現の違いを再認識させることが有効であることを確認できた。同じ場面の動画を日本人バージョンと中国人バージョンで見て、それを同じ場面だと認識しているにも関わらず、それに対する日本人と中国人の違いを明確にわけて考え、日本と中国の曖昧な表現に対する違いを意識するようになったからである。このことは日本や中国がハイコンテクスト文化にあることから生じることだと思われ、曖昧な部分を自国の常識で判断せず、確認しあう習慣づけが必要であることが重要だと考えられる。

ただし、本研究における対象者数が少ないこと、そして、インタビュー対象者を 20 代の学部生や大学院生に集中していることから限定された対象者に対しての可能性を示していることが限界である。

7.2 課題と今後の展望

本研究の課題は以下の通りである。まず、インタビュー対象が少ないことから一般化することは難しいという点である。さらに、インタビューは日本語を中心に進められたため、より深い言葉を拾うことができなかった。

そのため、今後の研究では本研究から得られた仮説の量的調査が必要になることが考えられる。さらに、本研究では中国人留学生だけに限定しているが、他文化の留学生に対する研究も必要になると考えられる。

次に提案においての課題もある。被験者が少ないことから一般化することは難しいということである。また、提

案における効果を統計的に処理できなかったため、次回はその有効性を測るためにより多くの参加者を募り行う必要性がある。また、今回は日本と中国の違いを認識することはできたが、その次の認識を変えるための設計が今後必要になることも考えられる。

今回の研究においては日本語能力試験1級を持っており、日本での滞在期間が 2 年以上の留学生を対象にしたが、日本に来てからの年数が 2 年以下の留学生や日本人との一般的なコミュニケーションができない留学生を対象にした研究も望まれる。

このような課題があるものの、本研究によって見出させることは今後増加していく留学生に対する在学中のケアとして、今後、大学側が対応すべきことを示すことができたのではないかと思われる。なお、留学生と日本人学生との交流の研究においてあまり着目されていなかった文化に着目したことから、この分野の研究において新たな方向性を示せたことにおいても意義があると考えられる。

謝辞

本論文の執筆にあたって、多くの方々に御礼申し上げます。

まず、主査である、当麻哲哉先生にはずっとテーマのことで悩んでいてあれもこれもやろうとしている私を見守りつつ、大きくぶれないように指導していただきました。そして、いつも準備不足であるにも関わらず、真摯にご指導させていただけたこと深く感謝いたします。とくに、アメリカでの生活だけで忙しい中、午前、午後にも研究相談に乗っていただいたおかげでここまで来れたと強く思います。また、先生の研究室に入っていたからこそ SDM の様々なものを吸収し、自分のものにできたと強く実感しております。

そして、副査である神武直彦教授には、12 月、1 月に 2 回研究相談させていただいた時に、暖かくお迎えくださり、修士論文についてのアドバイスを数多く頂きました。神武先生からの助言のおかげでより良い研究にするための視点を頂きました。誠にありがとうございました。

また、副指導教員である春山真一郎教授には、中間発表の前、そして、12 月に研究相談させていただき、誠にありがとうございました。春山先生からの助言を頂いたことにより、よりよい研究に仕上げることができました。

谷口尚子准教授には、同じく去年留学生に対する論文を書いた先輩の話や研究に対する数多くのアドバイスを頂けました。先生からの助言は私の研究において大切な視点になりました。深く感謝申し上げます。

今回の研究を進めることにおいての中国人留学生を紹介してくださった方々、そして、インタビューや検証に参加させていただいた方々、深く感謝申し上げます。大変お世話になりました。

なお、修論執筆にあたっての数多くのアドバイスを下さった SDM 研究員の先輩方や 11 期生の同期の方々にも深く感謝申し上げます。

最後に、いろいろとお互いに大変な時期にも関わらず、支えてくれたご家族にも大変お世話になりました。本当に心から感謝申し上げます。

2020 年 1 月 24 日　申　起百

引用文献

[1] 日本学生支援機構, “平成 30 年度外国人留学生在籍状況調査結果,” 2018.

[2] 文部科学省, “資料４　ポスト留学生 30 万人計画を見据えた留学生政策,” 2018.

[3] 文部科学省, “「『留学生 30 万人計画』の骨子」とりもとめの考え方,” 25 04 2008. [オンライン]. Available: https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/attach/1249711.htm. [アクセス日: 18 01 2020].

[4] 中矢礼美, 中川正弘, “留学生支援体制の現状と今後の課題,” *広島大学留学生教育,* 第 12 号, pp. 15-24, 2008.

[5] 加賀美常美代, “大学キャンパスにおけるコミュニティ・アプローチによる留学生支援,” 臨床心理地域援助特論、放送大学教育振興会, 2007.

[6] 日本学生支援機構, “平成 29 年度 私費外国人留学生生活実態調査　概要,” 2019.

[7] 田中共子, 畠中香織, 奥西有理, “日本人学生が在日留学生の友人に期待する行動: 異文化間ソーシャル・スキルの実践による異文化間対人関係形成への示唆,” *多文化関係学,* 第 8 巻, pp. 35-54, 2011.

[8] 田中共子, 藤原武弘, “在日留学生の対人行動上の困難ー異文化適応を促進するための日本のソーシャル・スキルの検討ー,” *社会心理学研究,* 第 7 巻, 第 2 号, pp. 92-101, 1992.

[9] 岡田涼, “親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築,” *教育心理学研究,* 第 56 巻, 第 4 号, pp. 575-588, 2008.

[10] 田中共子, 留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル, ナカニシヤ出版, 2000.

[11] 日本学生支援機構, “平成 30 年度　外国人留学生在籍状況調査結果,” 1 1 2019. [オンライン]. Available: https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2018/__icsFiles/afieldfile/2019/01/16/datah30z1.pdf. [アクセス日: 22 01 2020].

[12] 大橋敏子, 著: *外国人留学生のメンタルヘルスと危機介入*, 京都大学学術出版会, 2008, pp. 238-253.

[13] 横田雅弘、白土悟, 留学生アドバイジング　学習・生活・心理にいかに支援するか, ナカニシヤ出版, 2004.

[14] 岩男寿美子, 萩原滋, 日本で学ぶ留学生　ー社会心理学的分析ー, 勁草書房, 1988.

[15] K. Oberg, “Cultural Shock: Adjustment to new cultural environment,” Practical Anthropology,177-182, 1960.

[16] S. Lysgaard, “Adjustment in a foreign society: Norwegian Fulbright grantees visiting the United States,” International Social Science Bulletin, 7, 45-51, 1955.

[17] J. T. G. J. E. Gullahorn, “An extension of the U-curve hypothesis,” *Journal of Social Issues,* 第 19 巻, 第 3 号, pp. 33-47, 1963.

[18] 譚紅艶、渡邉勉、今野裕之, “在日外国人留学生の異文化適応に関する心理学的研究の展望,” *目白大学心理学研究,* 第 7 巻, pp. 95-114, 2011.

[19] 横田雅弘, “留学生と日本人学生の親密化に関する研究,” *異文化間教育,* 第 5 巻, pp. 81-97, 1991.

[20] 田中共子, “在日外国人留学生による日本人との対人関係の困難に関する原因認知,” *学生相談研究,* 第 16 巻, 第 1 号, pp. 23-31, 1995.

[21] 田中共子, “日本人学生と留学生の対人関係形成の困難に関する原因認知の比較,” *学生相談研究,* 第 24 巻, 第 1 号, pp. 41-51, 2003.

[22] 小松翠, “中国人女子留学生の友人形成および友人不形成に至る過程に関する研究,” *群馬大学国際教育・研究センター論集,* 第 12 号, pp. 71-86, 2013.

[23] 工藤和宏, “異文化友情形成におけるコミュニケーション能力ー留学生の知覚に基づくモデル化の試みー,” *ヒューマン・コミュニケーション研究,* 第 31 巻, pp. 15-34, 2003.

[24] 佐々木泰子, 張瑜珊, 鄭士玲, “中国人留学生は日本人との友人関係をいかに構築しているか: 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく視点提示型研究,” *異文化間教育,* 第 35 号, pp. 104-117, 2012.

[25] 加賀美常美代, “大学コミュニティにおける日本人学生と外国人学生の異文化間接触促進のための教育的介入,” *コミュニティ心理学研究,* 第 2 巻, 第 2 号, pp. 131-142, 1999.

[26] 守谷智美, “留学生支援としての日本語教育の可能性,” *大学教育研究紀要,* 第 11 巻, pp. 139-150, 2015.

[27] 田中共子, 中島美奈子, “ソーシャルスキル学習を取り入れた異文化間教育の試み,” *異文化間教育,* 第 24 号, pp. 28-37, 2006.

[28] 上原麻子, 鄭加禎, 坪井健, “日台中における大学生の友情観比較--「間主観性」 概念の検討をもとに,” *異文化間教育,* 第 34 号, pp. 120-135, 2011.

[29] G. W. Allport, The Nature of Prejudice, MA:Adison-Wesley, 1954.

[30] 加賀美常美代, “教育的介入は多文化理解態度にどんな効果があるか,” *異文化間教育,* 第 24 号, pp. 76-91, 2006.

[31] 池上知子, “差別・偏見研究の変遷と新たな展開,” *教育心理学年報,* 第 53 巻, pp. 133-146, 2014.

[32] J. a. V. H. W. Hilton, “Stereotypes,” *Annual review of psychology,* 第 47 巻, 第 1 号, pp. 237-271, 1996.

[33] 元田静, 第二言語不安の理論と実態, 渓水社, 2005.

[34] G. Allport, 原谷達夫・野村昭（共訳）, 偏見の心理, 培風館, 1968.

[35] 山本冴里, “形成的評価の“5W1H” ーいつどこで、誰が誰/何を、どのように評価すると、どんなことが可能になるのかー”
[オンライン]. Available: http://www.nkg.or.jp/pdf/jissenhokoku/yamamoto.pdf. [アクセス日: 09 02 2020].

[36] G. Allport, 原谷達夫・野村昭（共訳）, 偏見の心理, 培風館, 1968.

[37] 元田静, “目標言語使用環境における第二言語不安の研究ー日本語学習者を対象とー,” 広島大学大学院教育学研究科博士論文, 2002.

[38] 元田静, “第二言語不安と自尊感情との関係ー日本語学習者を対象としてー,” *言語文化と日本語教育,* 第 28 号, pp. 22-28, 2004.

[39] 元田静, “日本語不安尺度の作成とその検討ー目標言語使用環境における第二言語不安の測定ー,” *教育心理学研究,* 第 48 巻, 第 4 号, pp. 422-432, 2000.

[40] 元田静, “第二言語不安と自尊感情との関係ー日本語学習者を対象としてー,” 言語文化と日本語教育, 2004.

[41] M. Rosenberg, “Society and the adolescent self-image.,” Princeton University Press, 1965.

[42] 湯玉梅, “在日中国人留学生の異文化適応過程に関する研究: 対人行動上の困難の観点から,” *国際文化研究紀要,* 第 10 巻, pp. 293-327, 2004.

[43] 加藤司, “大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成,” *教育心理学研究,* 第 48 巻, 第 2 号, pp. 225-234, 2000.

[44] 陳香蓮, “在日中国人留学生における対人的自己効力感が対人ストレスコーピングに及ぼす影響,” *九州大学心理学研究,* 第 巻 12, pp. 113-120, 2011.

[45] 譚紅艶,今野裕之,“中国人留学生における日本人への信頼感と適応の関連,” *青年心理学研究,* 第 24 巻, 第 1 号, pp. 15-30, 2012.

[46] 佐藤郁哉, 著: *質的データ分析法: 原理・方法・実践*, 新曜社, 2008, pp. 97-103.

[47] 川喜田二郎, 発想法ー創造性開発のために, 中央公論社, 1967.

[48] M. Kawase, Crafting selves in multiple worlds: A phenomenological study of four foreign-born women's lived-experiences of being "foreign(ers)", University of Minnesota, 2006.

[49] N. Golafshani, “Understanding Reliability and Validity in Qualitative Research,” *The Qualitative Report,* 第 8 巻, 第 4 巻, pp. 597-607, 2003.

[50] 小松翠, “中国人留学生の友人関係に関する体験の否定的認識と友人関係への不満、原因帰属の関連について,” *人間文化創成科学論叢,* 第 15 巻, pp. 83-91, 2012.

[51] E. Meyer, The Culture Map, Public Affairs, 2014.

[52] 庄藝, “中国の日系企業における管理職間の異文化コミュニケーション--インタビュー調査に基づ

いて--,” *經濟論叢,* 第 180 巻, 第 5・6 号, pp. 560－585, 2007.

[53] S. M. B. &. L. A. Bochner, “Friendship Patterns of Overseas Students: A Functional Model,” *International Journal of Psychology,* 第 12 巻, 第 4 号, pp. 277-294, 1977.

[54] 戦旭風, “友人との付き合い方から見る中国人留学生と日本人学生の友人関係,” *留学生教育,* 第 12 号, pp. 95-105, 2007.

[55] M. Byram, Teaching and assessing intercultural communicative competence, Multilingual Matters, 1997.

[56] 友野隆成, 橋本宰,“改訂版対人場面におけるあいまいさへの非寛容尺度作成の試み,” *パーソナリティ研究,* 第 13 巻, 第 2 号, pp. 220-230, 2005.

[57] 石原翠, “留学生の友人関係における期待と体験の否定的認識との関連--中国人留学生の場合,” *異文化間教育,* 第 34 号, pp. 136-150, 2011.

Appendix

付録①　：　予備実験１用の資料

手順書

①　５W1Hを2回やってもらいます。
1回目は大枠を決めてもらい、1回目のWHYに対してもう1回５W（5回のWHY)をやってもらいます。

②　2回目のWHYの部分では自分が納得がいくまで、書いてみてください。（5回までは必須で）

5W 1H	記　述　部　分
WHO	
WHEN	
WHERE	
WHAT	
HOW	
WHY	

そこにいくタイミングは？
EX　：　日曜日の朝に

5W1H	記　述　部　分
WHO	
WHEN	
WHERE	
WHAT	
HOW	
WHY	

自分がよく行く場所
EX　：　スタバーで

5W1H	記　述　部　分
WHO	
WHEN	
WHERE	
WHAT	
HOW	
WHY	

自分の好きなことを
EX　：　コーヒーを飲む

5W1H	記　述　部　分
WHO	
WHEN	
WHERE	
WHAT	
HOW	
WHY	

自由に書いてください（任意で）
EX　：　片手で

5W1H	記　述　部　分
WHO	
WHEN	
WHERE	
WHAT	
HOW	
WHY	

なぜ、そうなのかを書いてください
（どう感じたか？）
EX　：　アメリカ人は
コーヒーが好きだから

WHYの内容：

WHYに対する５W	記　述　部　分
ＷＨＹ	
ＷＨＹ	
ＷＨＹ	
ＷＨＹ	
ＷＨＹ	
ＷＨＹ	

自分が納得するまでやってください
（5回までは必須で）

付録②　：　予備実験２用の資料

本日の流れ

- 19：00　～　19：10　事前アンケート（10分程度）
- 19：10　～　20：10　本日のワーク（1時間弱予想）
- 20：10　～　20：20　事後アンケート（10分程度）
- 20：20　～　20：35　インタビュー（15分予定）

本日のワークの説明

1. 作文（15分）
2. 中国語に翻訳（15分）
3. 日本語に翻訳（15分）

4. ブレインストーミング（10分）
5. 選びます（5分）
6. スキル化（10分）

作文（15分）

最近あった日常会話を書いてください
（A4用紙一枚程度で）

翻訳（15分）

今書いてくれたものを母国語に翻訳してください
（できれば日常的な感じを活かしたまま）

翻訳２（15分）

母国語で書いてくれたものをもう一回日本語に翻訳してください。

ブレインストーミング（10分）

自分がいま日本でできること

選び（５分）

ブレストから出たものから３つ選んでください。

スキル化（10分）

① その３つをするためには、
　具体的にどういうプロセスが必要ですか？

② その個々のプロセスにおいて必要な
　スキルは何ですか？

付録③　：　事前アンケート結果の詳細

インタビュー参加者の対人自己効力感結果

協力者	A1	A2	A3	A4	A5
私はだれとでも気軽に話せる	5	4	2	2	5
私はたれとでも仲良くできると思う	3	3	2	3	4
初めて会う人にでも うまく自己紹介ができる	2	4	2	1	1
相手とうまく話しのやり取りができる	3	3	2	3	3
私は同級生だけではなく、先輩後輩と もうまくやっていくことができる	4	4	3	2	4
友人は自分を必要としてくれている	5	2	1	1	1
友人は私に隠しごとなく、 何でも話してくれる	5	1	2	3	5
友人に何を話しても、理解してくれると 思う。	5	1	3	3	1
私が友人を誘えば一緒に行動してくれ ると思う	5	1	3	2	1
私にとって友人は頼りになるものだと思 う	4	2	3	1	4
友人と元気をわかちあうことができると 思う	4	1	3	1	2
私は友達に素直にありがとうと言える	1	1	4	1	1
私には心から信頼できる友人がいる	5	1	4	1	2

インタビュー参加者の対人自己効力感（対人的スキルへの自信）結果

協力者	A1	A2	A3	A4	A5
私はだれとでも気軽に話せる	5	4	2	2	5
私はたれとでも仲良くできると思う	3	3	2	3	4
初めて会う人にでも うまく自己紹介ができる	2	4	2	1	1
相手とうまく話しのやり取りができる	3	3	2	3	3
私は同級生だけではなく、先輩後輩と もうまくやっていくことができる	4	4	3	2	4

インタビュー参加者の対人的自己効力感（友人からの信頼）結果

協力者	A1	A2	A3	A4	A5
友人は自分を必要としてくれている	5	2	1	1	1
友人は私に隠しごとなく、 何でも話してくれる	5	1	2	3	5
友人に何を話しても、理解してくれると 思う。	5	1	3	3	1
私が友人を誘えば一緒に行動してくれ ると思う	5	1	3	2	1

インタビュー参加者の対人的自己効力感（友人への信頼）結果

協力者	A1	A2	A3	A4	A5
私にとって友人は頼りになるものだと思う	4	2	3	1	4
友人と元気をわかちあうことができると思う	4	1	3	1	2
私は友達に素直にありがとうと言える	1	1	4	1	1
私には心から信頼できる友人がいる	5	1	4	1	2

インタビュー対象者の日本人への信頼感結果

協力者	A1	A2	A3	A4	A5
過去に、ある日本人に裏切られたりだまされたりしたので、信じるのは怖くなっている	6	3	2	6	6
気をつけていないと、日本人は私の弱みに付け込もうとするだろう	5	5	5	5	6
私はなぜか日本人に対して疑い（うたがい）深くなってしまう	3	4	3	6	6
結局、周りの日本人は敵ばかりだと感じる	5	4	4	6	6
日本人は自分のためなら簡単に相手を裏切ることができるだろう	6	4	5	6	6
今は何かと話せても、日本人など全くあてにならないものである	3	4	2	6	6
相手（日本人）が自分を大切にしてくれるのは、そうすることによって相手（日本人）に利益があるときだ	4	4	4	6	6
今心から頼れる日本人にもいつか裏切られるかもしれないと思う	6	4	4	6	6
無理をしなくてもこの先の人生でも、私は信頼できる日本人と出会えるような気がする	6	4	1	1	6
周りのほとんどの日本人は私を信頼してくれているだろう	6	5	2	3	5
状況が許せば、たいてい日本人はお互いに正直に、かつ誠実にかかわりあいたいと思っているだろう	1	5	1	3	4
私は多少のことがあってもまわりの日本人と今の信頼関係を保っていけると思う	3	3	2	2	5
これまでの経験から、日本人もある程度は信頼できると感じる	1	2	3	1	2
これまでに出会ったほとんどの日本人は私によくしてくれた	3	2	2	2	1
私は現実に信頼できる特定の日本人がいる	6	1	5	1	1
一般的に日本人は信頼できるものだと思う			2	1	1

インタビュー参加者の日本人への信頼感（日本人への不信）結果

協力者	A1	A2	A3	A4	A5
過去に、ある日本人に裏切られたりだまされたりしたので、信じるのは怖くなっている	6	3	2	6	6
気をつけていないと、日本人は私の弱みに付け込もうとするだろう	5	5	5	5	6
私はなぜか日本人に対して疑い（うたがい）深くなってしまう	3	4	3	6	6
結局、周りの日本人は敵ばかりだと感じる	5	4	4	6	6
日本人は自分のためなら簡単に相手を裏切ることができるだろう	6	4	5	6	6
今は何かと話せても、日本人など全くあてにならないものである	3	4	2	6	6
相手（日本人）が自分を大切にしてくれるのは、そうすることによって相手（日本人）に利益があるときだ	4	4	4	6	6
今心から頼れる日本人にもいつか裏切られるかもしれないと思う	6	4	4	6	6

インタビュー参加者の日本人への信頼感（日本人への信頼）結果

協力者	A1	A2	A3	A4	A5
無理をしなくてもこの先の人生でも、私は信頼できる日本人と出会えるような気がする	6	4	1	1	6
周りのほとんどの日本人は私を信頼してくれているだろう	6	5	2	3	5
状況が許せば、たいてい日本人はお互いに正直に、かつ誠実にかかわりあいたいと思っているだろう	1	5	1	3	4
私は多少のことがあってもまわりの日本人と今の信頼関係を保っていけると思う	3	3	2	2	5
これまでの経験から、日本人もある程度は信頼できると感じる	1	2	3	1	2
これまでに出会ったほとんどの日本人は私によくしてくれた	3	2	2	2	1
私は現実に信頼できる特定の日本人がいる	6	1	5	1	1
一般的に日本人は信頼できるものだと思う			2	1	1

付録④　：　実験アンケートの詳細

実験参加者の自律的動機づけ（同一化調整）結果

	B3		B4		B5	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後
友人と一緒に過ごすのは、重要だから	4	4	2	2	4	5
友人関係は、自分にとって意味のあるものだから	4	4	1	2	5	5
友人といることで、幸せになれるから	5	4	2	2	5	5
友人のことをよく知るのは、価値のあることだから	3	3	2	2	5	5

実験参加者の自律的動機づけ（内発的動機づけ）結果

	B3		B4		B5	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後
友人と話すのは、面白いから	4	4	4	4	5	5
友人と一緒にいると、楽しい時間が多いから	5	5	4	4	5	5
友人と一緒にいるのは楽しいから	5	5	4	4	5	5
友人と親しくなるのは、うれしいことだから	5	5	2	4	5	5

付録⑤　：　実験用の資料

留学生の“日本人学生との交流”を考えるWS

慶應義塾大学システムデザイン・マネジメント研究科
当麻研究室　修士2年
申起百

事前確認事項

- 今回のアンケート内容や結果に対しては研究相談や研究発表の時に限って使用させていただきます。
  もし、不都合があればいつでもお申し付けください。

- あと、写真撮影大丈夫ですか？

本日のワークの説明

1. 事前アンケート（10分）
2. 思い出しワーク（15分）
3. ビデオの視聴（5分）
4. 中国の場合を考えるワーク（25分）
5. 事後アンケートおよびインタビュー（15分）

アンケートの入力をお願いします。
終わったら教えてください。

簡単に自己紹介だけお願いします！

思い出しワーク（15分）

やり方の説明

これから配るシートに沿って

“今まで日本人学生との交流をするときに、コミュニケーションで困難だった時”

を思い出して書いてください。

5W 1H	記 述 部 分
WHO	日本人学生
WHEN	
WHERE	
WHAT	
HOW	
WHY	

いつそういうのがあったのか
EX ： 大学1年の時に

5W 1H	記 述 部 分
WHO	日本人学生
WHEN	
WHERE	
WHAT	
HOW	
WHY	

実際に起こった場所/
もしくは、自分に関係がある場所

5W 1H	記 述 部 分
WHO	日本人学生
WHEN	
WHERE	
WHAT	
HOW	
WHY	

どういうことがあったのか/
もしくは、どういうことがありそうなのか

5W 1H	記 述 部 分
WHO	日本人学生
WHEN	
WHERE	
WHAT	
HOW	
WHY	

自由に書いてください（任意で）

5W 1H	記 述 部 分
WHO	日本人学生
WHEN	
WHERE	
WHAT	
HOW	
WHY	

なぜ、そうなのかを書いてください
（どう感じたか？）
EX ： ○○なことがあって、
○○を感じたから

“今まで日本人学生との交流をするときに、コミュニケーションで困難だった時”（15分）

5W 1H	記 述 部 分
WHO	日本人学生と
WHEN	授業が終わったあとに
WHERE	教室で
WHAT	飲み会の誘いをしようとした
HOW	メールで
WHY	親しくなりたかったから

一回周りの人とシェアしてみてください

ビデオの視聴（5分）

日本人同士の会話　ビデオの視聴（1分）

t

中国人同士の会話　ビデオの視聴（1分）

周りの人と今の場面で感じたことを話してみてください

日本のバージョンと中国のバージョン

どういう特徴がありましたか？

周りの人と話し合ってみてください
（5分）

ブレインストーミング
（説明 5分　＋　ワーク 20分）

ブレインストーミングとは？

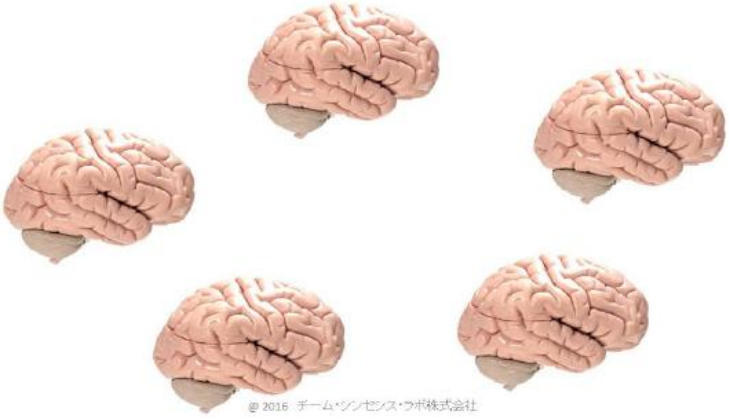
集団でアイデアを出し合うことによって
連鎖反応で発想を誘発すること

（Wikipedia）

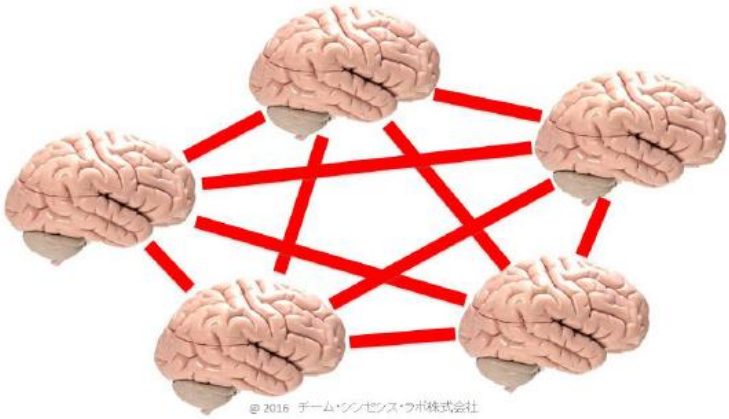
やり方の説明

質より量

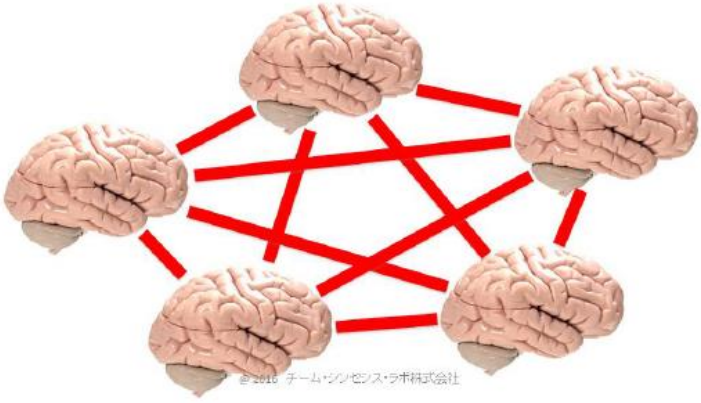
脳（無意識）を接続せよ



脳（無意識）を接続せよ



「意識」で考えず、
他人の考えに乗っかる！



プレインストーミングするときのルール

質より量

自発的に盛り上げる

ポジティブなFB

大きな声で読み上げる

必ず

はっきり、
くっきり、
わかりやすく、
大きな字で！

りじちょー
せんせい

中国で自分のために曖昧な表現を
使ってしまったときはありますか？
目の前のポストイットに書いて出してみてください

10分

微妙な感じの人から飲みの誘いがあったとき

まだよく知らない人に誘われて、どうしたいかまだわからないとき

中国で他人のために曖昧な表現を
使ってしまったときはありますか？
目の前のポストイットに書いて出してみてください

10分

友達がとても飲みに行きたがっているけど、自分の日程がわからないとき

他人の顔を立てるために、その場では断れないとき

最初に書いてもらったシートを見て振り返ってみてください。

どう思いますか？

アンケートの入力をお願いします。
終わったら教えてください。

周さん　　曹さん　　ケイさん

テーマ：今まで日本人学生との交流をするときに、コミュニケーションで困難だった時

5W 1H	記 述 部 分
WHO	日本人学生
WHEN	
WHERE	
WHAT	
HOW	
WHY	